

色や香りは五感を刺激して脳を活性化しますと有名化粧品品の宣伝にありましたが、先人は逆に「目は五色に迷う」（沈徳符『万暦野獲編「国師閱文偶誤」など）といっています。老子は「五色は人の目を盲ならしむ」、莊子も「五色は目を乱す」といっています。「五色」でも迷うのに、人工色の氾濫。人為的につくられた色にさらされていると、色を失っていく夕暮れの風景が目にはやさしく、モノクロ映画や写真の情感に深い味があるのに気づきます。カラー映画のなかの小津安二郎作品「東京物語」、カラー写真のなかでのアラキー（荒木経惟）が見撮った愛猫チロ（二二歳）のモノクロ写真も、けっして忘れることのないものを伝えていきます。

古来、伝統の五色は青・赤（朱）・白・黒・黄で、これがいわゆる正色です。正色の朱に対して間色の紅や紫が際立つことを「紅紫乱朱」といいます。たしかに朱の衣よりも紫の袈裟や紅裙（紅いもすそ）のほうが目立ちます。しかし正統というものはワンポイント目立たないところにあることを伝えていきます。

* * * *

1

「一目十行」（いちもくじゅうぎょう）

26 2013・4・24

速読の能力を「一目十行」（劉克莊『後村全集「四四・雜記六言五首其二」』など）つまり「一目して十行書を読む」ことをいいます。ひと目で十行なら多読も可能ですが実際にはどうでしょうか。「十行俱下」（十行ともに下る）ともいいます。新聞や雑誌の新著紹介欄の担当者は「巻頭十行」＋「巻末十行」ですますことも。

逐語読みではなく跳躍読みですから、核になる語をすばやく探し当てて関連づけで文意を得ることになります。書物の上を流してゆく視線の先で、書き手の意図を伝えるキーワードが次々に立ってくる。これが読み手の奥義です。漢字は表意文字なのでそれが可能だということです。

実際に臨沂の高校生（教科書だけで七八〇万字とか）が試んでいます。一年で三倍（理解率八〇％）になり、なかには「一目十行」といっていい程の者もいたようです。こんな読み方については、熟読玩味の立場の人からは一言ありそうなので、やや遠慮して「一目五行」や「五行併せ下る」というのも控えにありません。

眉をちよつと動かすほどの情報に対して眼で応えてくれるほどの間柄であること。恋人同士ならヤボったいことばをつらねるより「眉来眼去」(辛弃疾「滿江紅」など)のほうが良いがストレートに伝わる。仲むつまじい夫婦の間なら、ことばはいらない「夫唱婦随」といったところでしょうか。

四大美女のひとり貂蟬(ちようせん)が、暴政を布く董卓の宴席でなさぬ仲の呂布との間で酒を酌みながら交わす「眉来眼去」(『三国演義「八回」』)は隠微です。美女と美男子による「連環の計」として、『三国演義』の見せ場のひとつです。

女性の眉に魅力があるというので、眉筆のキャッチフレーズにもなります。眉峰から眉尾まで形と色で眉を画く技法と魅力が仔細に語られます。

美人だけではありません。国同士にだって「眉来眼去」があります。

ロシアはウクライナとEUがそういう関係にあるというし、中国からはインドと日本が「眉来眼去」の間柄に見えるようです。

* * * *

「百齡眉寿」(ひゃくれいびじゅ)

11 2013・1・9

二〇一二年には大正(一九一二年から)生まれの人が百歳に達しました。大正生まれの人びとは、昭和期の戦争を謳歌する歌より前に、母が歌う大正生まれの優しい童謡・唱歌をたくさん聞いて育った優しい心根のみなさんです。

大正二年には「早春譜」「海」「鯉のぼり」が、そのあと「朧月夜」「浜辺の歌」「宵待草」「背くらべ」「叱られて」「七つの子」「赤とんぼ」などが次々に発表されています。ですからこれらの童謡・唱歌も歌い継がれて百歳になります。わが国は百歳の人が五万人を超えて、史上でもまれな長寿国を現出しようとしています。

「眉寿」はわかりますか。老齢になると白い長毛の眉「眉雪」が特徴となることから長寿の証にいわれます。初唐の書家の虞世南は「願うこと百齡眉寿」(「琵琶賦」から)と記して百歳を願いましたが、八〇歳を天寿として去りました。「人生七十古来希なり」(「曲江」)から)と詠った杜甫は「古希」には遠く五九歳で亡くなっています。いまや「七十古希」に達したら、次は「百齡眉寿」が目標です。

記憶や写真に残っているいい表情の多くはこれ、「和顔悦色」（陶潜『庶人孝佳贊「江革」』など）です。悦はこころに生じたよろこびのこと。喜悅、愉悅、満悦、法悦、悦欣（おおよるこび）などなど、悦びは全身をつかって大小強弱さまざまに表現できますし、顔の表情やことばでさらに微妙に仔細にあらわすことができます。人間の悦びの表現機能が豊かであることを心から悦びたい。

そんななかでも顔をほころばせて悦びを表現する「和顔悦色」の持ち味は最たるものといえます。悦色の発露としての「眉開眼笑」（眉開き眼笑う）は、うれしくて気持が高ぶるようすにいいます。やや女性向きには「和容悦色」（『紅樓夢「六八」』など）というのも用意されていて、こちらはいつそう柔和に喜びの気色を伝えるいいことばです。

仏教の無財七施のひとつに「和顔悦色施」（わげんえつじきせ）がありますが、施として意識された「和顔」は人生の悦びを凝縮しているといえるのでしょうか。

* * * *

「明眸皓齒」（めいぼうこうし）

明るく澄んだ瞳と白く美しい齒。むかしから美人をいうのに「明眸皓齒」は広く用いられてきました。「明眸皓齒」であっても美人とは限らないよという屁理屈はやめにして、「和顔悦色」（別項）のそういう女性を想像してみてください。身の回りにそれに近い美人がいる人は幸せです。

杜甫は「哀江頭」で、「明眸皓齒いまいずくにか在る」と、長安を追われて玄宗皇帝と蜀へ落ちのびる途中で死を賜った楊貴妃の姿を追います。美しい女性のほほえみを「一笑百媚」と評しますが、これも楊貴妃にちなみます。白居易は「長恨歌」に、貴妃が「眸を回らして一笑すれば百媚生じ」て後宮三千の女たちは色あせてしまったと詠っています。

中国の「四大美人」といえば西施、虞美人、貂蟬、楊貴妃で、貂蟬が実在した人物でないことから王昭君とすることもあるようです。唐代の楊貴妃以来、千年余ものあいだ次の美人が現れないのはどうしたことなのでしょう。

全身を露わにして一糸もまとわなないことが「赤身露体」(『野叟曝言「五一回」』など)ですが、「儒教は裸を厭う」ので用例は多くありません。西欧では神が人をつくったときアダムとイブは「赤身露体」でしたが、へびがすすめた木の実を食べてそれを知り、いちじくの葉でお互いを隠します(『旧約聖書創生記「第三章七節」』)。

全裸は恥ではなく自由と平等の証であることで、シドニー・オペラハウスの屋外で、秋三月の夕方の冷しい風にさらされて同性愛者五〇〇〇人の裸体の集いが開かれたりします。わが国では、神に近づく無垢の信仰心を裸と白フンドシに託して、九〇〇〇人の裸の男たちが「宝木」を奪い合う岡山西大寺の「はだか祭り」がおこなわれます。中国の人には奇観といふべき催しでしょう。韓国はもともと儒教的で、司馬遼太郎の『耽羅紀行』に濟州島の海女(ヘニョ)の「赤身露体」の姿が描かれています。乳房を隠した伝統水着を付けています。

日本に旅行にきた中国女性は、温泉に裸で入ることに躊躇するといえます。

* * * *

「著作等身」(ちよさくとうしん)

24 2013・4・10

著作が作者の身長に等しくなるほどに多いことを「著作等身」(趙岱「陶庵夢憶序」など)あるいは「著述等身」といいます。

竹簡に手書きしていた時代は「汗牛充棟」や「学富五車」でしたが、紙に記される時代になって「等身」が多作であることの形容に用いられました。

宋代には蔵書や読書量が多いことで「等身書」(読書等身)がいわれ、その後に「著述等身」が用いられたようです。印刷時代の「等身書」は四〇〇〇万字といえますから等身高は稀れのうち。

「他人が珈琲を飲んでいる時も書いていた」と記す魯迅でも一一〇〇万字といえますから「著作半身」にも及ばないようです。

さて、IT革命の後には多作の人をどう表現するのかわかりませんが、それでも「著作等身」は、分量よりは著作態度が等身大であること、率直な自己表現によって共感を得るといった意味合いで実感をもって残ることでしょう。

暮らしの中に竹かんむりの字が多いことから、竹はさまざまな用途をもった植物として利用されてきたことがわかります。

まず筆がそうですし、竿、箒、箒、箱、籠、笛、笠・節や筋や算もそうです。また竹はたたずまいを愛されて、詩画としても数多くの名品が残されています。

竹の画に秀でた人といえば北宋時代の文与可でしょう。四川に住んで、春秋、朝夕、晴雨といった自然の変化の中で、竹を仔細に観察しつくして描きました。同時代の文学者晁補之は「胸中に成竹あり」(『鷄肋集』八)と称賛しています。

ことをなす前に胸中にしっかりと描いた結果が見えている(成算がある)例として用いられます。

TPPへの日本の加入について、『人民網』は「賭博かそれとも胸有成竹？」の見出しを付けました。賭博はないでしょうが、といって政府に国民を納得させる「成竹」が胸中に描けているのかどうかはあやういところです。

* * * *

「胆大包天」(たんだいほうてん)

123 2015・3・4

キモが大きいことには際限がありません。

「胆大包天」(歐陽予倩『荊軻「第四幕」』など)ともなれば世に何ごとも恐れることなし、大胆極まりないということ、いまは悪事など困ったことに使われます。

白昼堂々と脱獄したり(米)、赤の広場のレーニン廟に酒をかけた(露)、三四年間無免許運転していたり(日)、派出所を狙って車を盗んだり(中)・・・

魯迅は若い人の作品に「胆大心細」を求めていますから、新しいことをするに際しては「胆大心細」あるいは「胆大心雄」であってはじめて成就することは確かです。何かを恐れて「胆小如鼠」というのでは、社会も人生も変わらないどころか萎縮(デフレーション)していきます。

歴史上では「胆如斗大」が知られます。三国時代の蜀の武将姜維が死んで腹を開いたところ、胆が斗大(斗は一〇升)あったということから、むかうところ万夫といえども恐れず闘うという武勇の人にいわれます。

「摩肩接踵」（まけんせつしょう）

129 2015・4・15

並んだ肩と肩をすり合わせ、踵に踵を接するほどに人が多く絶えないようすを「摩肩接踵」（黄庭堅『豫章先生遺文「三」』など）といいます。

東京・浅草寺の仲見世や大阪・造幣局の桜の通り抜け（二〇一五年は四月九〜五日）。桜の花見は中国にもあつて、武漢大学キャンパスの五〇〇mほどの桜花大道が有名です。一人二〇元の入場料は大学にとつて大きな収入源になっています。

「摩肩接踵」は訪問客が多いこと、博物館の展示が人気なこと、優れた人材が多く集まることにも用いられます。

最近では中国が主導して設立した「アジアインフラ投資銀行」（A I I B・亞洲基礎設施投資銀行）の申請期限であつた三月三一日までに、四八カ国が参加を表明したことに「摩肩接踵」がいわれました。日本はアメリカとともに創設メンバーには加わりませんでした。リスクはあるものの開発途上国が資金を借りやすくなることで発展が見込まれ、国際金融の秩序を変えると推測されています。

* * * *

「立雪断臂」（りつせつだんぴ）

174 2016・2・24

雪の白と炭の黒の対比が明解な「雪中送炭」（別項）に対して、この白い雪を赤く染めた「紅雪」の伝承も色あざやかです。

拳法のふるさと、禅宗の祖庭といわれる中岳嵩山の少林寺でのこと。

降り積もる雪の中で師の菩提達磨から示された「天降紅雪」という問いに、神光（のち慧可）は、みずからの臂を断つという答えを引き出しました。「求法の志」の強く固い姿を答えとして示すことで、のち達磨から衣鉢を相伝されることになったという慧可の「立雪断臂」に関する伝承です。「慧可断臂」ともいいます。

雪中で断つたのが右臂だったのか左臂だったのか。雪舟の「慧可断臂図」は達磨に左腕を差し出していますし、後世の絵画は左臂を断つ姿を伝えますが、法のため師に献じたとすれば利き腕である右臂だったのではないか。

『菩提達摩伝記』（呉洪激）では神光は跪いて左手で右の断臂をささげる姿を記し、少林寺の塑像は右腕を衣に隠して左手を見せているからです。

「手舞足踏」(しゅぶそくどう)

112 2014・12・17

両手で舞いながら足を踏みならし跳びはねる。歓喜の極まったようすを「手舞足踏」(『詩経「周南・関雎」』など) といいます。

時には興奮のあまり狂態に近い姿を示すこともあります。『水滸伝「二九」』で、宋江が狂蕩の思いにかられて「手舞足踏」し、筆をとって「西江月」の詞を白壁に書きつける場面などはその極みでしょう。

身近な例では、スペイン舞踊とか、リオのカーニバルとか、よさこい連とか、はたまたEXILEの舞台を思う人もいるでしょう。親しいのは桜花の下で催す酔余のはての舞い踊り。女子バレーボールで接戦の末に勝利した瞬間のコートでの舞、サッカーのゴールでの歓喜の瞬間は、さまざまに「手舞足踏」をつくりだしています。外には静かな心のうちの表現にもなります。微妙なところでは、「リムパック」(環太平洋合同演習)に初めて中国海軍が参加して、船上でお互いの軍官が歓迎していました、そのようすにも「手舞足踏」が垣間見えました。

* * * *

「十指連心」(じっしれんしん)

171 2016・2・03

働けど働けど楽にならなかつたとき、石川啄木は「じつと手をみる」と詠っていますが、中医や気功術では「十指」は五臓六腑に通じているとされて、とくに中医は仔細に手指の変化をみます。指先の色の変化やしびれは疾病の前兆だからです。

十本の指が心臓に連なっているということから、一指が痛めば全身が痛みを感じることが「十指連心の痛み」(湯頭祖『南柯記「情尽」』など) といいます。

暮らしが親密な肉親はもちろんのこと、企業と同僚や組織・団体の同志のつながりを強く意識して、それぞれが持つ能力を出し合って困難を乗り越えようと呼びかける場面に用いられます。

固い握手でお互いの心を通じ合うのもそのうちでしょうし、「十指連心慈善音楽会」なども開かれますし、連続TVドラマのタイトルにもなっています。

「十指繊繊」(張裕「題宋州田大夫家楽丘家箏」など)は、女性の繊細な十指が箏の弦を爪弾いているようすをいいます。音も優美ですが指の動きも美しい。

戦場ではもちろん、地震、大事故の現場で、瀕死の傷を負った人びとの救護に当たることを「救死扶傷」(司馬遷「報仁少卿書」など)といます。生命を救われた人は数知れません。よく知られているのは、革命時に戦場で生死をともした医師「白求恩(ベチューン)」を追悼する毛主席の「救死扶傷、実行革命的人道主義」でしょう。白求恩は中国の「十大国際友人」のトップに選ばれています。

生涯を僻地で患者の病痛の解除と介助にむきあう医師・看護師、日ごろから天職として任に当たっている医療従事者の無私奉仕の精神にもいわれます。「国際看護師の日」が設けられてから一〇〇年(一九一二年。五月一二日はナイチンゲールの誕生日)。どれほどの人びとが、その献身的な活動に支えられ救われてきたでしょうか。個人的な献体、献血もそこに通じます。

「救因扶危」(『三国演義「第一回」』から)というのは国家に報じ民を安んずること、劉備、関羽、張飛が兄弟とし同心として立ち上がる時のスローガンです。

* * * *

国家のリーダーが自国の先人の事績を引いて自説の糧とすることはどこも同じですが、さすが「故事成語」の国、中国の要人もよく四字熟語を用いて講話に風格を添えています。習近平主席のこの「刮骨療毒」(『三国志「蜀書・関羽伝」』から)は、腐敗が「骨をけずる」ほどに深く、根本的な治療が求められるという深刻な認識をもつて行動しようと、「反腐敗」を呼びかけての引用です。

開会中の全人代(国会に相当、二〇一四年)では、公務員の汚職などでの立件が八%増えて五万一三〇〇人余だったことを、「反腐敗運動」の実績としています。大戦後のわが国の官吏が、国・地方を問わず、いかに公僕として「国土の均衡ある発展」に尽くしてきたかを知ることになります。

ここでの先人は国民的ヒーロー三国時代の英傑関羽です。左腕にささった毒矢の毒が骨に及んだため、華佗は臂を破り骨を刮り毒を取り去ったといわれています。その間、仲間と「言笑自若」(別項)していた関羽の豪胆さに学ぼうというわけです。

「命若懸糸」（めいじやくけんし）

153 2015・9・30

細い一本の糸に「命」が託されているような危うい状態にあることを「命若懸糸」（『敦煌変文集「大目乾連冥間救母変文」』など）といいます。

かつて芥川龍之介が『赤い鳥』創刊号（大正七年）に書いた「蜘蛛の糸」の犍陀多（カンダタ）の姿が思い出されます。上記の原典で目乾連（モクケンレン）は地獄へいつて母を救い出そうとするのですが、小説の犍陀多は蜘蛛の糸にすがって地獄をのがれて極楽へたどり着こうと喘ぎます。極楽と地獄というのは格差が広がってゆく時代表現だったのでしょう。「自分だけは」と考えた犍陀多は地獄に落ちていきました。後に自死する芥川が生きづらい時代を予見していたのは確かです。

安全保障関連法案に反対する国会前の集会で出会った若い女性たち。将来、産み育てる子どもたちの労苦を予見するがゆえの行動に素直に共感を覚えました。国会内で「平和」をいいながら戦いの現場しか語らなかつた男性議員たちに対峙する、産む性としての「命」への感性がおのずから息づいていました。

* * * *

「寿終正寝」（じゅしゅうせいしん）

145 2015・8・5

平和な時代に暮らしていると、天寿を全うして生涯を終えることは、それほどむずかしいことではないように思われますが、戦争に明け暮れていた時代やそれが予測される時代には、安眠できることが人生の理想でした。

平和が長くつづいて、「戴白の老も干戈をみず」（老人も戦争を知らない。北宋時代）というのは、史上でも稀有な時期といえます。それでも災害や事故に遭遇して、だれもが天年を尽くして穏やかに寿終を迎えることはむずかしい。古来、長寿は上寿百二十、中寿百、下寿八十歳（孔穎達等『正義』など）といわれています。

住み慣れた自宅で穏やかに死を迎えることが「寿終正寝」（許仲琳『封神演義』「一回」など）です。世界大戦が終わって安らかに眠れるようになって七〇年。願っても得がたいその夢を国民から奪うことになる「安保法制」が国会承認されようとしています。後人の「寿終正寝」のためにも取り返しがつかない一步を許すわけにはいきません。

「心服口服」(しんぷくこうぷく)

143 2015・7・22

「心服」は内心で納得し、「口服」は口頭で従うこと。したがって「心服口服」(『莊子「寓言篇」から)となれば全幅の信頼であり、信服です。

「口服」ばかりでなく、「心服して天下定まる」と莊子はいいますが、「安保法案」の衆議院での議論と採決をみていると、とても「天下定まる」ようには思えません。なかなか信服とはいかないことが多く、この成語はさまざまな場面で、できない意味で用いられることになります。

その点ではスポーツの世界は明解で、前日まで「口服」せずに「なでしこジャパン」のW杯連覇の夢を語っていたマスコミも、五対二という点差、身体能力、技術、戦術の差を見せつけられて、アメリカの強さには「心服口服」したうえに「甘拜(完敗?)下風」までせざるをえなかったようです。

といって、ドイツと日本を破ったアメリカのサポーターが、先の大戦の勝利と重ねて示す愛国主義には「心服口服」とはいかない思いを禁じえませんでした。

* * * *

10

「心有余悸」(しんゆうよき)

186 2016・5・18

過去にあったことがふいに回想されて動悸がすることを「心有余悸」(巴金『随想録一四〇』など)といいます。

だれにもそんな経験があるでしょう。失恋のときの心痛がそうでしょうし、難関といわれた入学試験に受かったときの喜びの鼓動とか、万馬券を当てて「歓(欣)喜雀躍」したときのこととか、夢から覚めたあと夢でよかったというそんな経験も少なくないでしょう。熊本地震の余震をおそれ、福岡地方で防災用品が売れたのは、「心有余震」といったところなのでしょう。

「心々念々」というのは、いつも念頭から離れないでいること。亡き師のことばやふるさとへの思い、超おもしろかった料理にもいいます。

車イスで酸素吸入しながら舞台稽古に臨んでいた演出家の蜷川幸雄さんが五月一二日に肺炎による多臓器不全で他界(八〇歳)しましたが、愛弟子たちの哀悼のこゝとばからは、師によせる「心々念々」の熱い思いが伝わってきます。

これ以上ないというレベルでの痛恨の嘆きを「痛心疾首」（『左伝「成公十三年」』など）といいます。

歴史の転回期に表舞台から一転して罪を負うことになった為政者は、こういう思いで対処するようです。いま中国で職権乱用や違法蓄財で裁かれる被告も、裁判で有罪判決を受けて「痛心疾首」といって、自分ひとりが罪を負う嘆きを伝えていません。法をまもる立場にある弁護士が飲酒運転（知法犯法）で事故をおこして拘束一か月、一〇〇〇元の処罰を受けて「痛心疾首」するあたりには実感があります。

日本が伝統としている相撲、抹茶、畳、下駄などを、すべて中国起源ではないかと「痛心疾首」する向きもあるようです。また気がかりなところでは、中国の軍事戦略専門サイトが、近代に失った「十大領土」について、ロシア、蒙古、インドなどの国境周辺とともに琉球、釣魚島を取り上げて「痛心疾首」していることで、人民共和国（王朝）三〇〇年での「蚕食鯨吞」（別項）の行方は想像もつきません。

* * * *

「冰心玉壺」（ひょうしんぎよくこ）

17 2013・2・20

中国ではスマートフォン（知能手機）の広告に「一片冰心在玉壺」をみます。終生変わることもない友情の証として、氷のような澄明な心を玉製の壺に入れておくことを「冰心玉壺」（王昌齡「芙蓉楼送辛漸詩」から）といいます。

唐の詩人王昌齡が長江沿いのいまの鎮江から都の洛陽へゆく辛漸に、「一片の冰心玉壺に在り」の詩句を託したことから、「一片冰心」あるいは単に「冰壺」ともいいます。ただし現代の「冰壺」は冬季スポーツで人気のカーリングのことです。友を思う「冰心」は今も昔も変わりありませんが、現代の「玉壺」はパソコン（個人電能）でしょうか。フォルダ（文件挟）に澄明な心で付き合える友人の名前とメール（電子郵便）が保管してあり、さらに一片また一片と増えていくようすに例えられそうです。

しかしスマートフォンを手軽に持ち運んで、忘れたり無くしたりしたのは「良師益友」に申しわけが立たたたなくなりそうです。

「壮心不已」(そうしんふい)

178 2016・03・23

暮年(高齢)になっても事業へのさかんな志がやまないことを「壮心不已」(曹操「歩出夏門行」から)といいます。

乱世の英傑曹操がこの詩をつくったのは五四歳で、官渡の戦いで袁紹を破ったころのこと、覇業はこれからというときでした。ですからその胸中に動いたものが「烈士暮年、壮心不已」の句であったとしても、それは実感というより将来への願望だったのでしょうか。

暮年というのは、いくつくらいからをいうのでしょうか。時代によって異なるとはいえ、ふつうには仕事から離れる時期。乱世を生き抜いて六五歳で怒濤のような生涯を終えた希代の覇者が、「老驥伏櫪、志在千里」というとき、千里を走る驥(駿馬)は老いて櫪(うまや)に伏していても志は千里を走ろうとするのだ、と世の趨勢にたてついてみせたとき、このフレーズは時代を越えて、「朝露の如き人生」を謳歌する名句になったのでした。「老驥(き)伏櫪(れき)」ともいいます。

* * * *

「愛莫能助」(あいばくのうじょ)

100 2014・9・24

東京駅コンコースで人だかりに出会いました。

天皇ご夫妻が新幹線を降りて構内を通過して皇居への車寄せに向かうわずかな区間でしたが、国民に近く親しく会釈されながら寄りそうお二人の姿には「相思相愛」がふさわしい四字熟語です。

愛は溢れるほどあっても、力が足りないとか条件がきびしくて助けることができなことが「愛莫能助」(『聊齋志異「鍾生」』など)で、『詩経「大雅」』では「愛莫助之」といっています。

ご成婚のあと「テニスコートの愛」などともてはやされた美智子妃が、平民であるゆえの皇室内での孤立に対して、皇太子は「愛莫能助」であったようです。

たとえば「千年樹」が手入れの甲斐もなく枯れてしまったとか、泳げないので溺れる子どもを見ながらどうしようもなかったとか、見るに忍びない情景もあります。が、こういう事例はいつの世にも多いのでよく使われます。

生み養い育ててくれた亡き父母の恩を思う「哀哀父母」（哀哀たる父母、『詩経』小雅』から）は古くから伝え継がれてきた成語です。みずからがその労苦を知るところには父母はすでにいなかった。ところがいま史上まれな長寿時代になって、高齢期を過ごす父母に、生きていよううちに親の恩に報いることが可能になっています。

そこで「哀哀父母」をふまえて「愛愛父母」という成語が生まれる。生きていよううちに孝行をしようという明快さが「愛愛」にあります。時代とともに新たな味わいを付加しながら「四字熟語」も生き延びていくようです。

年初の『日本経済新聞』「NIKKEIプラス1」（二〇一四年一月一日付）で、「今年の抱負、四字熟語で」という読者応募の企画の発表があつて、選者のひとりとして「人間関係」編に寄せられた応募作の中から「愛愛父母」を「傑作」として推薦しました。一位となりわたしのコメントが付けられています。愛愛への展開もよく、世相をとらえてユニークです。

* * * *

「哀而不傷」（あいじふしよう）

180 2016・4・6

詩歌や音楽が湧きあがろうとする感情を適度に抑えて表現されていることを「哀而不傷」（『論語』「八佾』から）といいます。

こういう作品はそれゆえに湧きあがる生きる喜びを伝えてきました。『論語』「八佾』では、孔子が「関雎（かんしよ）」という詩の曲調について、「樂而不淫、哀而不傷」と評しています。訓詁では「樂しみて淫（いん）せず、哀しみて傷（やぶ）らず」と読んでいます。「淫」は現代では性的に狭義に使われますが過度にならないこと。「不傷」は心の平穩をくずさないこと。

中和の美をたもち哀切さを帯びた感情表現は奥ゆかしく心が洗われます。小沢征爾が「二胡皇后」といわれた惠芬の古楽器演奏で「江河水」を聴いて、「人間の悲切さが奏し出されている」といつて感動の涙を流したのですが、それが「哀而不傷」です。比喩としては、極端な左右の立場を制して、過不足なく調和がとれている活動、言動に用いられています。

「嗚呼哀哉」（おこあいや）

217 2016・12・21

嗚呼も哉もともに感嘆を示す詞であり、「嗚呼哀哉」（ああ、哀しいかな、『三国志蜀志「諸葛亮伝」』など）は心底からの哀痛の極みを表現しています。

唐朝を代表する書家、顔真卿の「祭姪文稿」（台北の故宮博物院蔵）は、安祿山の乱で非業の死をとげた親族の顔杲卿、季明の親子への哀惜の情を切々とつづったものですが、その文字づかいは「文は人なり」を感得させてくれるものといわれ、その中で一瞬、真卿が心を鎮めて「嗚呼哀哉」と一行に書きとめたとき、人の吐露しうるものの極限をきわめたといわれます。

のち顔真卿は叛軍のなかで堂々と宣諭をおこなない、そのまま囚われて幽禁ののち、北泉寺内の大イチョウの下で縊死して「嚴霜烈日」の生涯を閉じています。真卿の書体は「顔体」と呼ばれて後世の書家の範とされていますが、風格あるその楷書は明代に印刷版本の書体（明朝体）に採り入れられ、味わいある活字として今に伝えられているといえます。空海も唐の長安でその書風を学んだようです。

* * * *

「不恥下問」（ふちかもん）

181 2016・4・13

後輩や目下の者に対しても問うことを恥としないことを「不恥下問」（『論語「公冶長」から）といえます。古来からとくに学者の中には下問を恥とする向きもあってなかなか素直にはできないことのようにです。

『論語』では弟子の子貢が、孔圉（こうぎよ）という人物が諡（おくりな）として最上である「文」の字を得て孔文子と呼ばれることを疑問にして、あの程度の人物になぜ「文」が許されるのかと問うたところ、孔子の答えは「敏にして学を好み、下問を恥じず」というものでした。学問の問のありようにかかわる「下問を恥じず」を高く評価したことばです。ちなみに唐の「文公」は韓愈ですし、宋の「文正公」は司馬光、「文忠公」は歐陽修や蘇軾です。

身近な事例として、和食が世界遺産に登録されたのにあやかっって制作された『武士の献立』で、加賀藩に仕えた庖丁侍の舟木伝内（西田敏行）が息子の嫁（上戸彩）から料理を学ぶ場面の「不恥下問」ぶりには文公を思わせる演技の味がありました。

俳優の高倉健さんが二〇一四年一月一〇日に亡くなりました。

中国では文革のあと最初の外国映画となった「君よ憤怒の河を渉れ」(中国名「追捕」)の主演者として知られ、主人公の検事が着たコートは半月で一〇万着も売れたといえます。

その後、「幸福の黄色いハンカチ」(「幸福的黄手帕」)や「遙かなる山の呼び声」(「遠山的呼喚」)があり、二〇〇五年には中国の張芸謀監督による合作「単騎、千里を走る」(「千里走単騎」)が撮影されています。張監督は、その公開にあたって、高倉さんは眼ではなく心で泣く(心在哭泣)演技者だったと紹介しています。

離世に当たっての「往く道は精進にして、忍びて終わり悔いなし」は、数多く演じた「忍辱負重」(辱めを忍んで重責を負う。『三国志・呉書「陸遜伝」』など)を思わせます。「不器用ですから・どうぞお幸せに」(コマーシャル)といって去っていく後ろ姿を残して。健さん、天堂でお幸せに(幸福開心)。享年八三歳でした。

* * * *

「想入非非」(そうにゆうひひ)

230 2017・3・22

現実にある姿を離れて実現ができないことを想像することを「想入非非」(『官場現形記「四七」』など)といえます。

もとは仏教が説く世界観で、通常的能力では到達できない玄妙な境地(天上界)のうちの最上位の天を「非想非非想天」(有頂天)といいます。座禅瞑想で到達できる境地では次はもう涅槃(入滅)であるというほどにつきつめた世界なのです。わたくしたちは、いささか気軽に有頂天になったりしているようです。

企業家イーロン・マスクが熱っぽく語るロケットやソーラーシテイの野心的なプロジェクトは、まさに近未来の「想入非非」の世界といえるでしょう。

日本女性の和服は、民族衣装のなかで女性の心身の隠れた魅力をもっとも「想入非非」させる衣装といわれます。北方系の狩猟民族の衣装は、中国の旗袍(チーパオ)もそうですが、活動的だからでしょう。美女を前にしての「想入非非」ということになれば、男性は仏教が説く有頂天とは別の世界に遊ぶことになります。

恥ずかしくて穴があったら入りたい(使穴可入)、無ければ冷や汗をかいて持ちこたえるしかありません。自らの身を置く場所がないほど羞恥や恐れ of 極みにあることを「無地自容」(朱熹「与呂伯恭書」など)といいます。

ニセモノを展示してしまった博物館の館長、エジプトの古跡に「到此一游」と刻んでしまった子の両親、五輪エンブレムでデザイン盗作を指摘されたデザイン審査委員、そして国民の支持が得られずに憲法違反が指摘される「安保法制」を通す政治がまかり通る国の憲法学者。「平和」という現実には、「戦争と戦禍」の悲惨さを記憶に留めておくのではなく、ひとりひとりの胸から胸へと伝えなければ守れないとを迎えています。

かつて九〇年代にロック・グループ「黒豹」が歌った「無地自容」は、「いまわたしはこれまでのわたしではない」(現在不是従前的我) HI YE HI YE と、何かの始まりを暗示して終わっていました。

* * * *

「神機妙算」(しんきみようさん)

218 2016・12・28

「神ってる」が二〇一六年の新語・流行語大賞に選ばれましたが、四字熟語なら「神機妙算」(『三国演義「四六」』など)でしょうか。本人すら予測不能ながら実行して最善の結果を導き出す超人的な能力。「神ってる」は、超人とか神ががっているとかを越えて神そのものになりきっているところが新語の妙味なのでしょう。

広島カープの三二年ぶりのセ・リーグ優勝に貢献した鈴木誠也外野手がその人で、発語者は緒方孝市監督。「錦上添花」(別項)となる来季の年俸が3・75倍の六〇〇万円に。打率は10割、200本塁打、1000打点くらいが来季の目標と真顔でいうのですから、「神ってる」にはちがいありません。「神奇莫测」ともいいます。

有名なのは風の変化まで読んで仕掛けた諸葛亮の「草船借箭」の故事ですが、多くは「以弱伐強」の局面で生まれるようです。碁の盤面ではだれも予想できなかったこういう「神機妙算」の妙手が生ずることがあるようです。

情意がのびやかであれば、みずからの人生を楽しみ、みんなと飲びを共にすることができ、寿命を延ばすことができるというのが「美意延年」（『荀子「致仕」』など）です。芸術の実りの秋に、どこかで「美意延年」にふさわしい作品と出会えたいでしょう。四季折り折りの美しい風物や芸術との出会いも長寿の源に違いありません。作家が短命で画家が長寿といわれるのも納得がいきます。小倉遊亀一〇五歳、片岡球子一〇三歳、奥村土牛一〇一歳・九〇歳まで生きた『広辞苑』産みの親新村出の追悼文集が「美意延年」として出ていますが、学者も長命のようです。

この成語は書道家に人気で、いろいろな人が書いていますし、落款でも見かけます。美酒もまた命を延べるといっているので、江戸以来の白酒で知られる豊島屋の大吟醸酒に「美意延年」があります。

のびやかな音楽もまた美意の源泉、ことしは中国合唱百年ということで「美意延年―記念中国合唱百年」（杭州市）も開かれました。

* * * *

「吉祥如意」（きつししょうじよい）

春節（二〇一五年は二月一九日）の賀詞として「吉祥如意」（張成「造像題字」など）は、「新年快樂」や「恭賀新禧」とともによく用いられています。たくさんの幸いごとが意のままになるようにという願いを込めています。

「祥」も「美」も「善」も羊にちなむ文字ですし、『説文解字』には「羊は祥なり」とあって、吉祥は吉祥の意で用いられています。羊（未）年の「吉祥如意」ですから、良いことが多い一年でありますように。

内容のいい四字熟語なので、テレビ劇や楽曲の名、料理や会の名などにも多用されています。有名ホテルが「吉祥如意年夜饭」（日本のおせち）を提供して、離れて暮らしている家族が手狭な自宅ではなくホテルに集まって、NHKの「紅白歌合戦」にあたる「春晚」（CCTVの「春節聯歡晚会」）をみる「除夕」の過ごし方にも人氣があるようです。各地放送局の同種の番組が好まれて、全国「春晚」の視聴率は落ちています。

「言笑自若」（げんしょうじやく）

18 2013・2・27

毒矢が左ひじを貫き毒が骨に及んだため、関羽は名医華佗の手術に左腕をまかせます。血がしたたり落ち、盆に溢れるその間、関羽は肉をほおぼり、酒を飲み、諸將と平然として談笑しつづけたといいます。

当時すでに華佗は外科手術に麻酔を使ったようですが、それにしても「言笑自若」『三国志』「蜀書・関羽伝」からは、三国時代蜀の英傑関羽の持つ稀代の豪胆さを伝えるのに相応しいことばです。

文聖といえば孔子、武聖といえば関公。頼りになる両者ですが、海外各地で華人が展開する中華街には必ず関帝廟が設けられて、豪快な関羽像が祀られるようになりました。もちろん横浜でも神戸でも長崎でも出会えます。

この激痛に耐えて「言笑自若」している関羽を思えば、少々のピンチにあわてることもないでしょう。「談笑自若」『三国志』「呉書・甘寧伝」という場合もあるようですが、ここは関羽伝の厳とした「言笑自若」でいきます。

* * * *

「大弁若訥」（だいべんじやくとつ）

37 2013・7・10

老子は「大弁は訥なるごとし」『老子「四五章」』から」といいます。

まことの弁舌は巧妙であるよりは訥々としていて、その訥々とした語り口のなかから語り手が探しあてた「信言」を聞きとることができるからでしょう。巧みな弁舌ではなく、訥々とした語り口に「大弁」を聞く老子の人間理解は、いくら努めても勉強してもさわやかな弁説とはいかない人には同感できるにちがいありません。

いま参議院議員選挙の最中にあります。わが国は“国難”の時期といえるほどいくつもの難題を抱えています。「震災復興」「経済」「憲法」「外交（とくに日中間の尖閣問題）」「農産物自由化」「原発」「社会保障」・・・

選挙戦を終えて当選がきまって、われわれの代表として国政に携わることになる新議員としての第一声がありますが、万歳と選挙民へのお礼のあいさつはそれとして、街頭でえた国民の生の声を訥々とした語り口で伝えてくれるまことの弁舌を聞きたいものです。

歌声があたりに響きわたると同時に聴く者の心を振るわせるようすを「声は林木を振るわす」（『列子「湯問」』など）といいます。

暮歳のころの「声振林木」といえば、電飾並木の聖歌、「第九」の大合唱、大晦日のカウントダウン・ライブ、除夜の鐘の声。どれもが来る年に期待を寄せる人の心に響く音声です。

秦の音楽家であった薛譚（せつたん）は、師の秦青から技能を学び尽くしたと思いい、辞し去ることを申し出たことがありました。そのとき秦青は、ことばでは止めずに街はずれまで送っていき、手拍子をうち心をこめて別れの歌を聴かせます。

「声は林木を振るわせ」、響きは行く雲をとどめたといいます。類なき絶唱を聴いた薛譚はあやまちを知り、留まることを求め、そのあと終身、師のもとを去ることがなかったといいます。人の心を深く打つ歌の力を伝えることばです。

そう、由紀さおりさんのスキヤットは、世界中の林木を振るわせています。

* * * *

「先声奪人」（せんせいだつじん）

189 2016・6・8

京劇には主役が舞台に登場する前に舞台裏から劇場を圧する素晴らしい美声の“聞かせ場”があつて、それだけで劇場が湧くそうです。まず先に力の籠った「声威」によって相手を圧倒すること、内容もさることながら、勢いで先んじることを「先声奪人」（姚雪垠『李自成「二卷二十章」』など）といいます。戦いの鬨の声はその最たるものでしょう。双方が声をあげつつ敵陣に殺到する姿は壮絶です。

コンピューターはさまざまな「奪人」のシーンをつくりだしています。人間とコンピューターの対決は将棋やチェスでは終わっていて、人知の最後の砦だった囲碁対決でもコンピュータ・ソフト「アルファ囲碁 (AlphaGo)」が韓国の李世石九段を四勝一敗で破ったことが話題になりました。

これは文字どおりの「奪人」です。人間と同じように誤った手は打つようですが、人類が思えばない手を打ってきたと人類代表の李九段は漏らしています。「機械的」といっておとしめていた人間が「人間的」と機械におとしめられる世がきそうです。

小学校の教場を明るくしてくれていた先生の記憶は、いつまでも春風のように温かい。人生の柔らかな追い風であったように思えます。「春風に座すが如し」というのは、春の実景ではなく、教えを受けた先生に対する謝恩の辞に用います。

学派や流派というのは、こういう和氣をたたえた人物を中心にした一団から生まれます。兄弟が中心になった場合が宋代の二程子で、兄が程顥(ていこう)で明道先生、弟が程頤(ていいい)で伊川先生。弟が兄を「時雨の潤いのごとし」とその温和さを讃えています。のちの程子学流の興隆をみるとき、この「如座春風」(『二程集「外書二二」から)ということばが生まれた座の温もりが偲ばれます。

伊川先生に教えを求めてやってきた学生が、師が瞑座しているので、一尺を越すほどの大雪の門外で目覚めるのを待ったというのが「立雪程門」です。

「春風」のように優しい師と教えを求めてきびしく身を処する「立雪」の学生。快い師弟の姿です。

* * * *

「聞一知二」(ぶんいちちに)

28 2013・5・8

一と十の四字熟語に「一目十行」(別項)とともに「聞一知十」がありますが、「一を聞いて二を知る」という「聞一知二」のほうに味わいがあります。

あるとき孔子が弟子の子貢(端木賜)に「おまえと顔回とはどちらが優れているかね」と問うたことがあります。本人には答えづらい問いかけです。そこで子貢は「回(顔回)や一を聞いて以って十を知る、賜(端木賜)や一を聞いて以って二を知る」と答えました。(『論語「公冶長」から)

自分をおとしめずに他をほめるこの答えは巧みです。聞いた孔子は、「そうだね、わたしもおまえも回にはかなわない」といつて喜びました。「二を聞いて十を知る」顔回は学才に優れ、「二を知る」子貢は商才に長けていたといえますから、「一を聞いて二を知る」ほどのほうに生活力があるといえそうです。

孔子晩年の講学と著作を助けた顔回は師より先に死んで師を嘆かせましたが、子貢は師の死後六年の喪に服し、のちの孔里「曲阜」の成立に寄与しました。

声にこそ出さないものの、眼から雨のように大粒の涙を落として離別の悲痛に耐えることを「泣涕雨の如し」（『詩経「邶風・燕燕』など）といいます。

『詩経』ではふたたび会えない女性を、野に遠く見えなくなるまで送ったシーンでの涙ですが、幽明境を異にする場面での「泣涕如雨」は、「管鮑之交」で知られる管仲の姿にそのきわみをみます。

管仲は自分をよく知り何度となく危機的困難を支えてくれ、みずからは下がって自分を宰相にしてくれた友人の鮑叔芽が死んだ時、低い声で哭き、抑えきれない涙が雨のように下ったといいます。「泣下如雨」ともいいますが、この管仲の姿は、「管鮑之交」ということばに込められたふたりの友誼の深さを伝えていきます。

柳田国男は、泣くことの少なくなった文明人はことばの力を過信している、「音声や『しぐさ』のどれくらい重要であったか」（泣涕史話、昭和一五年）と、講演で言及しています。率直なボディ・ランゲージ、男泣きの姿を見たいものです。

* * * *

「可歌可泣」（かかきゅう）

55 2013・11・13

人の泣き方にもいろいろあって、「号」や「哭」は大声をあげるのに対して、「泣」は喜びも悲しみともに極まって涙を流すことというようです。泣を歌によって開放するのが、「可歌可泣」（歌うべし泣くべし。趙執信『談龍録「二四」』など）です。だれもがそういう場面に出会うことが多いので、いまでもよく使われます。

美空ひばりは「悲しい酒」を歌うとき、きまって涙を流しました。涙のむこうに戦後の哀切な時代を思いおこして、共に涙した人も多かったのでしょうか。

「喜びにつけ悲しみにつけ、人は歌い泣く。そして知らず手足を鼓舞するものだ」と欧陽修はいいます。和歌や唐詩の多くは詠われたものですし、「人生白露」の憂愁を利那に開放してみせる曹操の「対酒当歌」（酒に対せよ、歌に当たれ。「短歌行」は圧巻です。「可歌可泣」の極みは、他の人の命を救った殉身的行為や戦場での悲壮な愛国の事跡は愛唱歌や軍歌として伝えられ、国民や時代を動かしたそれは「国歌」のなかに込められて歌われています。

非常時や重大時などの緊迫した場面に、走りまわって知らせ合うのが「奔走相告」（韓愈『昌黎集「二四」』など）です。

古くから任務として「告奔走」（『国語「魯語下」』）が知られます。嬉しいことの場合なら「喜笑顔開」しながらの「奔走相告」となります。裁判で無罪判決が出て、その報告をみんなで「欣喜若狂」して喜び合う姿などがいい例でしょう。中国では四月三日〜五日が「清明節」の三連休でした。日本のサクラの評判を聞いてツアー客がどっと増えて、上野公園は昨年より四〇%も多い人出となり、どこでも中国語の歓声が聞かれました。

肉声が届く口コミの範囲での喜びは共有できませんが、いまやツイッター時代ですから電波が走ります。TPS（一秒ツイート数）が宮崎駿『天空の城ラピュタ』のTV放送時の一四万回が話題になりました。グーグル検索数の「女性」は四億二五〇〇万件、「男性」は二億二〇〇〇万件で半分です。

* * * *

「走投無路」（そうとうむろ）

192 2016・6・29

当時は読書して科挙を受けるのが正路なのに、魯迅は日本へいくといい出します。それを聞いた母親から、日本へ行って洋務を学んで靈魂を鬼に売るような「走投無路」（『水滸伝「五六回」』など）の人にならないでくれと泣いてたしなめられたと『呐喊「自序」』で述懐しています。魯迅は一般人にはまだ見えない時代の姿を見ていたのですが、窮地に陥って出口がないことを「走投無路」といいます。

人生のさまざまな場面で出合いますからよく使われる成語です。

いま八方ふさがりの「走投無路」にある首脳といえ、ロシアのプーチン大統領と北朝鮮の金正恩首相があげられます。プーチン大統領はシリア国境での衝突やウクライナ問題、石油危機まで内外の難題にせめられていて、その中で安倍首相訪露は多に歓迎されたのでした。しかし懸案の北方領土問題は新しい方途でいいながら「無路」のまま。一方の金正恩首相の「走投無路」ぶりは、いまさらいうまでもなく行き着くところまでいって、中国に救援を求める路しかないといわれます。

田舎育ちの若者が都ぶりを学ぶとしたら原宿・渋谷・青山あたりでしようか。

北国の燕の田舎からひとりの若者が都ぶりの歩き方を学ぼうとして、趙の都邯鄲にやってきました。「邯鄲に歩を学ぶ」（『莊子「秋水篇』など）お話です。しばらく努めてみたもののサマにならない。あきらめて故郷へ帰ろうとしたが、元の歩き方を忘れて歩けない。そこで這って帰るしかなかった。

あこがれて都会へ出たものの挫折して故郷に帰る。故郷でも受け入れられなくなる、というお話です。

中原の古都であった邯鄲にちなむ成語は一五〇〇余もあって、「成語典故の郷」と称しています。市内に「成語典故苑」を設けて彫像や碑文にして展覧しています。よく知られるものに「黄梁一睡（邯鄲之夢）」「刎頸之交」「完璧帰趙」「奇貨可居」「背水一戦」それにこの「邯鄲学歩」も。いまも明代の「学歩橋」が沁河に架かっています。日本から邯鄲に「蘭陵王入陣曲」が「秘曲帰趙」しています。

* * * *

「寸歩不離」（すんぽふり）

201 2016・8・31

「寸歩」はきわめて短い距離。それしか離れていないのですから、ぴったり寄り添っている情景が思われます。

梁の仁昉『述異記』では陸東美と朱氏という仲睦まじいご夫婦がおり、奥方が際立つようすを異としながらも「比肩の人」と呼び「寸歩不離」としています。

朱氏が亡くなると夫も後を追って亡くなったので合葬したところ、塚の上に梓の木が生えて二つの幹が抱き合うように一樹をなしました。それを聞いた孫権が憐れんで、その里を「比肩」とし、その墓所を「双梓」と呼ぶことにしたといいます。ご夫妻のほかに兩人の感情がぴったり合っているようすや両者の距離の遠くないことにも広く用いられています。「半歩不離」ともいいます。

九〇歳の母親が五〇歳を過ぎた病弱の息子をかいがいしく扱う姿や、結婚して三〇余年の間寝たきりの妻に寄り添う夫の姿など、胸が痛む事例も見受けられます。人間ばかりでなく愛犬や愛猫との間の「寸歩不離」の事例も尽きません。

「信言不美」（しんげんふび）

70 2014・2・26

老子は「信言不美」（信言は美ならず）といえます。対句として「美言不信」（美言は信ならず）とつづきます。李耳（老子。生没年とも不詳）は、人生の終わりに近く、衰亡の淵にあった都の洛陽を離れて、東方にある郷里とは反対の西方へと隱遁の旅に発ちます。周室の蔵書の官として冊簡（文献）を読み解き、王都にいて現下の世情をつぶさに見て、人為を知り尽くした末の旅立ちでした。

中原と西方の山地とを分けるのが函谷関。関を出てしまえば蓄積してきた知識ももはや何の意味もありません。

老子の胸の奥にうごいた感慨を察して、関令の尹喜は熱く懇願します。李耳は関にとどまり五千余語の『道と徳の経』を残しました。そして最後の章に「信言は美ならず、美言は信ならず」（『老子「八一章』から）と謙遜のことばを記して山中へと消えていきました。対比される孔子は弟子たちに囲まれて死にましたが、老子の最後は「終わるところを知るなし」なのです。

* * * *

「信誓旦旦」（しんせいたんたん）

185 2016・5・11

日本語の音読みで「たんたん」といえば、淡々や坦々や眈々などが思い浮かびますが、この「旦々」は日が地平にあらわれたときのようにすべてが明瞭で陰がないことから、誠実なようにすに用いられます。

「心口如一」であることが「信」ですから、「信誓旦旦」（『詩経「衛風・氓』から）といえば、真心を込めた「誓い」が誠実で信用できるということになります。聞いてみんなが明るくなれる心地良い四字熟語なのです。

結婚式の誓いや新入生への学校長や新入社員への社長の訓示などは率直に納得してもいいのですが、政治家の場合にはみずから「信誓旦旦」と前置きしても明々白々とはいかないのはどの国でも同じようです。

一方で「信口雌黄」（郭沫若『屈原「四幕』』など）となると、古くは黄紙に記した誓文の誤りを直すにあたって、雌黄（顔料・鶏冠石）を塗って重ね書きしたことから、根拠のない言説や責任のない論評をいいます。

「交口称賛」（こうこうしょうさん）

117 2015・1・21

みんなが口をそろえてほめたたえることが「交口称賛」（姚雪垠『李自成「第一卷二十章」など）です。口をそろえるだけなら「異口同声」や「衆口一詞」などを用いられますが、みんなで称賛する明るい話題となると、昨今あまり多くはありません。昨年一二月一日のノーベル物理学賞の授賞式が思い出されます。世代が異なる赤崎勇（八五）さん、中村修二（六〇）さん、天野浩（五四）さんの三人がそれぞれ異なった場で研究した成果である青色発光ダイオードでの同時受賞は、「交口称賛」の好例といえるでしょう。

北京のスモッグは現代の大都市の課題です。北京を避けて家族連れで訪れた秦皇島北戴河（かつて幹部の避暑地でいまはリゾート地に）の海岸で、子どもたちは清新で湿潤な空気を胸いっぱい吸って喜ぶそうです。

秦皇島市を訪れた北京市民が市の大気汚染対策を「交口称賛」する情景は、環境への市民の「衆口一詞」の願いの表現でもあるようです。

* * * *

「歪打正着」（わいだせいちゃく）

191 2016・6・22

野球でバントすべきところを強振したらホームランになってしまったなどはよくあること。結果オーライといったところ。手法や手段が本来のものではなかったのに、幸いにも満足すべき結果が得られたときに「歪打正着」（『醒世姻縁伝二二』など）といいます。

碁や将棋では「正打歪着」やら「歪打正着」がしきりです。競馬の万馬券は「歪打正着」そのものです。サッカーでのアシストのボールなどは本人は「正打正着」でしょうが観客には「歪打正着」に見えて、そこが魅力なのでしょう。

史上に残る「歪打正着」では、秦の始皇帝が不老長寿の元として水銀を用いたこと。陵墓にも大量の水銀を使って池を構築したことで、水銀の防腐作用で遺体は腐乱を免れている可能性があるうえ、有毒だったことで盗掘も免れてきたというのです。始皇帝は「歪打正着」の水銀の池に浮いていまでも「長生不老の夢」を見ているというのです。

天女や仙女が着けている「天衣」には縫い目がないことを「天衣無縫」(牛嶠『靈怪録「郭翰」など』)といいます。たしかに飛天や仙女像をみると、身にまとっている衣装に縫い目(人為のあと)がありません。内に秘められた美(神性ある存在)の表出には人為(ファッション)を排したのびやかで自然な衣がふさわしいようです。本屋さんの雑誌コーナーで、「女性ファッション」誌のあまりの多さに出会うと、「お気に入り」に収めてあるこの成語を思うことがあります。

そこから言行が自然で障りのないようす、詩文や書画が技巧の跡を感じさせずに造形されていること、事物のありように一点の破綻もないことなどにひろく用いられています。

二〇一三年の年初の北京で、ズービン・メータ指揮のイスラエル・フィル新年音楽会があり、演奏に合わせて書家の李斌権が龍蛇走る草書で毛沢東と李白の詩を揮毫しましたが、この芸術合作を「完美無欠、天衣無縫」と伝えていきます。

* * * *

「量体裁衣」(りょうたいさいい)

体の大小長短をよくはかって着心持ちのいい衣装をこしらえるという意味から、実情にあわせて的確にことをおこなうことを「量体裁衣」(毛沢東「反対党八股」など)といいます。

毛主席の好みのことばだったようで、情勢をよく判断して行動する必要があることで「看菜吃飯、量体裁衣」を引いています。古くは「食」と「衣」のふたつが合わさって「量腹而食、度身而裁」(『墨子「魯問」』)といわれて、王侯がみずから節制に努める意としていました。後には「裁衣」にあたっての「量体」の意で用いられ、測る対象に応じて「量体裁情」や「量体裁葉」としても使われます。

身体障害者の体にあわせた補助器具づくりやファッションデザイナーの衣装づくりが実情を示しています。子どもたちの体形にあわせた通学用かばん(書包)も「量体裁衣」のひとつ。日本製ランドセルは丈夫で機能的ですが、画一的なこと高価なことあつて、中国ではもっと軽く柔らかな素材のものが好まれているようです。

「飲食男女」（いんしよくだんじよ）

228 2017・3・8

飲食は食欲で、男女は性欲で、『礼記「礼運』では合わせて「飲食男女は人の大欲」といつています。ともに節すべきこと戒めることとして用いられてきたことばですが、いまやレストランで食事をしながら恋人と語り合う姿などにいわれて、大欲より少欲といえるほどにほほえましい情景です。

そんな意味合いから、香港のグルメ旅行雑誌『飲食男女』は週刊発行部数が二〇万部というベストセラーになっています。また台湾映画「飲食男女」は料理人と三人姉妹の美味しくもまた心温まる恋物語で、カンヌ映画祭で評判になりました。やや遅れて中国本土でも大都市でのライフスタイルが軽い喜劇調の「飲食男女」ドラマとして制作されています。

わが国では久世光彦『飲食男女』（文春文庫）では「おんじきなんによ」と読んで、食べものから立ちのぼる女性たちの記憶をたどっています。となると小津安二郎の『秋刀魚の味』などは「飲食男女」映画の名作にノミネートされることになります。

* * * *

「茶余飯後」（ちゃよはんご）

160 2015・11・18

空腹をいやしたあとのちよつとした穏やかで暇な時間が「茶余飯後」（梁啓超「世界最小之民主国」など）です。お酒がはいれば「茶余酒後」となります。

これからの話題といえは「年終獎（年末ボーナス）」でしょうか。行政機関でも企業でも一年間の利益と業績を考慮して支給される一時金で、同工同酬が原則ですが、一三月目の収入の手取りアップこそが働く者にとって経済成長の証なのです。

「茶余飯後」の話題はいずれも同じ。行政トップの汚職と摘発、VWなどドイツ車や新しいIT機器、TVの娯楽番組、スターのスキヤンダル、富豪の裏話、サッカ―のワールドカップなどスポーツももちろんです。身近なレストランや釣り場情報といったことも話題になります。重慶にはこの名のレストランもあります。「茶余飯後」飯店での「茶余飯後」ではやや整いすぎたシーンですが。

みんながそれぞれにさまざまな話題で暇な時間を楽しめるのが、中産階級化の証といえるのでしよう。

「山珍海味」（さんちんかいみ）

113 2014・12・24

わが国では「山海珍味」がふつうですが、中国では「山珍海味」（『紅樓夢「三九」』など）といえます。「山珍」と「海味」が合わさった形です。「山珍」では重慶や成都の山珍がいわれ、「海味」では香港の海味街が知られます。

「山海の珍味」といわれて、なにを思いますか。

「山」ならマツタケ、スッポンの縁側、シカのアキレス腱・・・とか、「海」ならアワビ、フカヒレ、サメの唇・・・とか。

珍しい山の幸、海の幸とのおいしそうな盛り合わせは料理の精華として珍重されます。身近なコンビニに並んでいるおにぎりも、山珍（南高梅・きのこ）や海味（こんぶ・明太子）を巧みに取り合わせた和食の芸を感じさせます。

年末恒例の「おせち料理」は、世界遺産の和食の「山珍海味」の見せ場です。老舗料亭の京料理はもちろん、中華風おせちや和洋折衷おせちなども加わって、四〇品から五〇品が三段重や五段重に盛りつけられています。見るだけで満腹です。

* * * *

「浮瓜沈李」（ふがちんり）

144 2015・7・29

瓜や李を冷水の中で冷やして食する「浮瓜沈李」（曹丕「与朝歌令吳質書」など）が、消暑遊樂の行事として伝えられています。

魏の都、洛陽にいた曹丕は客人のもてなしのために「清泉に西瓜を浮かべ、寒水に朱李を沈めて」とそのようす記しています。宋の都、開封では孟元老の『東京夢華録』に巷の売り物として「雪檻に瓜を、氷盤に李を」と、いかにもすずしそうな風物を記しています。

西瓜はまくわうりの類です。いま主流のスイカ（西瓜）は名前からも知られるように、原産地のアフリカからエジプト、インド、シルクロードを経て中国へ入ったようです。西瓜は大きくとも浮かびます。桃はどんぶらこと浮沈するのでしょうか。

李と桃は同じ中国が原産地です。春先に咲く美しい花は「年年歳歳」でも取り上げましたが、「投桃報李」（『詩経「大雅・抑」』から）があつて、桃を贈られ李を贈って季節の心を通じていました。夏の果実はこの「浮瓜沈李」が話題です。

「夜に戸を閉ざさず」、それでも安全に暮らせる社会をつくること。「セキュリティって何？」という社会です。『礼記』の「外に戸を閉じず、これを大同という」(「礼運」から)にはじまり、いつの世にもそれが為政者の目標でした。

『水滸伝「一回」』でも「路に遺ちたるを拾わず、戸夜に閉ざさず」という太平の世を梁山泊で夢見ていますし、『三国演義「八七回」』では蜀の民衆が「両川の民、太平を欣樂して、夜に戸を閉ざさず、路に遺ちたるを拾わず」と、東の間の安定を謳歌しています。

いまや世界が狭くなり、どこからでも侵入者、破壊者がやってくる時代。外界に善意とともに悪意の存在を前提とせざるをえない社会では、「小康社会」という中国の夢でも「夜に戸を閉ざさない」社会とまではいえないようです。局地的な小世界「日本」では、つい三〇年ほど前、一九七〇年代、一九八〇年代に「一億(九割)中流」という「夜に戸を閉ざさない」社会を東の間体験したのです。

* * * *

「万家灯火」(ばんかとうか)

220 2017・1・11

夜になってすべての家々に灯が点ることを「万家灯火」(王安石「上元戲呈貢父」など)といいます。城市が繁榮して平和が続いている証であり、その下での穏やかな暮らしが思われます。

「日本三大夜景」には長崎・札幌・神戸(「日本夜景サミット」二〇一五)が選ばれ、「世界三大夜景」にも香港・ナポリとともに函館か長崎かが挙げられています。

民俗行事としては、春節(新月)のあとの望月(十五日)の夜におこなわれる「観灯」で、夜を通して門々に灯を点して過ごします(元宵節)。歳初の満月に皇帝は万人の幸せを祈り、農民は豊作を祈ったのでしよう。唐の玄宗のときの「元宵灯節」が最も豪華で、長安中の燃灯は五万盞を数え、皇帝は広さ二〇間、高さ一五〇尺の灯楼をつくらせています。

白居易の詠う「灯火万家」(「江楼夕望招客」から)は、杭州刺史(長官)時代のもので、杭州の万家の灯と西湖に映る遊船の灯を「星河一道」に対比しています。

日本では「良妻賢母」ですが、中国では「賢妻良母」(馮玉祥『我的生活』など)といえます。この語順の違いに近代の両国の女性観や女性の果たしてきた役割の違いがこめられている四字熟語です。

日本の場合は明治維新のあと西洋から帰った啓蒙家が女子教育の指針としました。「富国強兵」で働く男子を支えて内助に努めて「良妻」となり、子女を薫育して「賢母」となる。初代の文部大臣森有礼は「良妻賢母教育こそ国是」といつています。八・一五「終戦記念日」に心から黙祷をささげる老いた女性の姿。戦場で兄や夫を失って以後、女性が「戦後」を支えてきたのです。

中国の場合は、日本に留学した康有為や梁啓超が「賢母良妻」教育として移入しましたが定着しませんでした。男女がともに働きともに子育てをし、平等の社会的役割を果たした革命中国では、自立意識を持つ「賢妻」であり優しい「良母」となることが志向されました。両国とも「賢良な妻と母」を必要としたことは確かです。

* * * *

「敬老慈幼」(けいろうじよう)

99 2014・9・17

老人を心から尊敬し、子どもを愛護することが「敬老慈幼」(『孟子「告子下」』など)で、老幼はともに賓客と同等の扱いを受けます。「敬老愛下」も同じです。

日本では毎年の九月第三月曜日が祝日の「敬老の日」、九月一五日が「老人の日」です。九月を「敬老月間」「老人月間」「高齢者保健福祉月間」としている自治体も多くみられます。中国では旧暦「重陽」の九月九日が「老年節」です。

「国際高齢者デー」は一〇月一日です。
いくつから「お年寄り」? 新聞社の調査では一般的には七〇歳からがいちばん多いようです。国際基準には六五歳以上があつて、その人口比率が「高齢化率」。わが国は二五・九%で世界最速・最高です。

「敬老の日」は毎年、新聞各紙とも「何の祝日?」というほど関連記事が少なく、二〇一三年はホームラン記録をつくった「バレンティン・デー」でした。二〇一四年は山口淑子(李香蘭、九四歳)さんの死を伝えていました。

晩唐の詩人鄭谷が袁州府にいたころのこと、僧の齊己が自作の詩を携えて訪れま
す。「早梅詩」というタイトルで、「前村深雪裡 昨夜数枝開」とあります。見て
鄭谷は「数枝では早とはいえない。一枝がいい」といいます。齊己は覚えず拝して
身を投げ、これよりみなが鄭谷を「一字之師」（『海録碎事「師授門」』など）と
呼びました。それ以後、「一字之師」は数多く記録されることとなります。

それ以前にもあつて、有名なものが「推敲」の故事でしょう。中唐の詩人賈島が科
挙でやってきた長安の街なかで、「鳥宿池辺樹 僧推月下門」の句を得たあと「推
す」だけでなく「敲く」にも気づきません。

が、いずれかに決められない。と、乗っていたロバが大官の列にぶつかつて、連
れていかれたのが韓愈の前でした。賈島は「推か敲か」の悩みを述べます。聞いて
韓愈は「敲がよい」と答えて「一字之師」となったのでした。この話の方が故事成
語にふさわしいのですが、いわれは動かせません。

* * * *

「得意門生」（とくいもんせい）

126 2015・3・25

師がみずからその才能を納得して認めた弟子を「得意門生」（『児女英雄伝「第二
回』など）といいます。多くの学術や芸能はそうして世代を越えて引き継がれてい
くこととなります。

よく引かれる例が孔子門下で、七二賢とも十哲ともいわれますが、「得意門生」
ということになれば徳行の顔回（子淵）と政事の仲由（子路）です。

孔家から遠くない陋巷に住んでつましく「一簞一瓢」で暮らした顔回は「聞一知
十」といわれた俊才でした。いまに曲阜の孔廟には孔宅の井戸が残り、すぐに駆け
つけられる距離にある顔廟には顔回が用いたという陋巷井が残されています。

二〇〇九年に孔子は二五六〇年記念祭を、師と三〇歳違う顔回は生誕二五三〇年
を祝いました。顔回は病により早世し、子路は政治家として義に殉じています。ど
ちらも師より先に離世しています。子路の末裔も七三代の仲偉堅氏などが健在です。
曲阜を訪ねた折に人口六〇万余の市民のうち二〇%が孔姓と聞いて驚きました。

日が竹の三つ目の節あたりまで上がっているということで、朝寝坊のこと。当初は日が上がって竹のむこうの春霞が消えるといった詩的風景の描写に用いられたようですし、相愛の男女の「日上三竿」(『東周列国志「二三回」』など)はうらやましいかぎりですが、昨今はみんなが働きはじめている時間に起きるという後ろめたい意味合いの朝寝坊専用の成語です。

それでも「全国大学統一入試」(高考)を終えたあとの子どもたちの「日上三竿」にはみんな肯定的です。

一方で、FIFAサッカーを深夜に見たり、週末に夜更かしして翌朝のしごとと差しつかえる「日上三竿」には、周囲の目はきびしいようです。

戦乱に明け暮れた時代には「高枕して憂いなし」(高枕無憂。『戦国策「魏策」』など)は悲願でした。先人が命がけで残してくれた平和な時代に、高枕して憂慮なく睡眠がとれる幸運を思えば少々の憂いなどもの数ではないでしょう。

* * * *

「花花公子」(かかこうし)

165 2015・12・23

正業にまともに就かず、日々着飾って外へ出て、酒を飲み遊びほうける富家や成金の子弟、いわゆるプレイボーイを「花花公子」(張南荘『何典「第六回」』など)といいます。繁華な都市空間(花花世界)を好み、水を得た魚のように暮らす若者たち。こつこつと将来のために自らを鍛える「白面書生」とは裏表の仲。

かつて「花花世界」といえば、都を追われて南遷(東晋)した人びとが奪回しようとした東京(開封)や西京(洛陽)のことで、「中原花花世界」と呼んで慕いきました。近くはイギリスから返還された香港や日本の東京や銀座がひとしきりそうでしたが、北京や上海では**銀座の服飾店が賑わっているようですから、遠からずして花花公子の登場は街の話題になるでしょう。

アメリカでは、月刊『花花公子』(プレイボーイ)誌が一九五三年創刊号のM・モンロー以来ウリにしてきた女性フルヌードを二〇一六年三月から掲載しないと決めて「男性エンターテイメント」誌として転回を図ることを公表しましたが。

本年もご多用のうちに過ぎたみなさま、お疲れさまでした。

才能や技能に優れた人びとつまり能ある者ほど労苦が多いということを「能者多勞」（『紅樓夢』「一五回」など）といいます。

莊子も「巧者は勞にして知者は憂、無能者は求める所なく飽食して敖遊」（『莊子』「列禦寇篇』から）と述べており、いにしえから巧者や知者であることは多勞を覺悟せねばならなかったようですが、実のところは本当に能ある人は「多勞」とは感じていないから多勞多いことを悩みとはしていないのでしょうか。

磨きあげられた鏡はいつ写しても何度写しても疲れを見せることはないというのが「明鏡不疲」（劉義慶『世説新語』「言語』」など）です。磨かれた叡知・技術というものは使っても損なわれることはないのだから、優れた師や先輩はどしどし使おうではないかというのが後人の立場からの理解です。「不疲」であるかどうかは「明鏡」の側の立場ですが、「多勞」への配慮は必要でしょう。

* * * *

「正本清源」（せいほんせいげん）

135 2015・5・27

問題を根源までさかのぼって解決することを「正本清源」（『晋書』「武帝紀』」など）といいます。「正本遡源」ともいいます。

製品の品質が規格に合わないこと、薬品の成分表示、財政規律、精神的な腐敗など、問題が指摘されるさまざまな場面でよく用いられます。歴史の真相を究明することにもいわれて、五〇巻からなる『極東国際軍事裁判証拠文献集成』の発刊によって、四〇〇〇件余の証拠が明かされ、日本の侵略・罪行に対する「正本清源」の研究が可能になったというふうにも使われています。

清源といわれると、伝統文化である囲碁を広めて、日本で「昭和の棋聖」と称され、本国でも知名であった呉清源さんが偲ばれます。名前と人柄はこの成語を想起させました。二〇一四年一月に一〇〇歳で亡くなり深く哀悼されています。

韓国では恒例の「新年希望の四字熟語」二〇一五年に、この四字熟語が選ばれています。偽善と無責任からさよならしようというのが選んだ教授たちの理由です。

「無価之宝」（むかしほう）

102 2014・10・8

金銭では測れないほど稀有にして珍貴なるものを「無価之宝」（劉克莊『後村全集「宿山中十首」など）といます。

高価でなくとも婚約の時に贈られた〇・三カラット（三〇万円）のダイヤの指輪は、ご本人にとつては「無価之宝」でしょう。一九〇五年に南アで採掘された三〇六・七五カラットのダイヤ原石は、ご存じのように英王室の王笏（五三〇・二カラット）や王冠（三一七・四カラット）など九個にカットされています。最近同じ鉱山で採掘された二三二カラット原石が一〇〇万ポンド（一七・七億円）といますから、ダイヤなら値が測れないことはないようです。

七月に東博の「台北故宮博物院 神品至宝」特別展で「無価之宝」として特別展示されたのが「翠玉白菜」です。清・光緒帝に嫁いだ瑾妃が持参した高さ一九センチの翡翠の細密な彫刻で、白菜は純潔をバツタとキリギリスは多産を象徴したといわれます。一方で、山中の「月色と泉声」が「無価之宝」と詩人は詠っています。

* * * *

「鱗次櫛比」（りんじしつぴ）

221 2017・1・18

同形ものがさかなの鱗や櫛の歯のように次から次に整然として並んでいるようですが「鱗次櫛比」（陳貞慧『秋園雜佩「蘭」』など）です。建物群や商店街などそういう情景を見ることができます。古いものも新しいものもあって、人はそういう整列した人工物の姿に安心感をもつでしょう。

発展をつづける中国では、いまや高層ビルが立ち並んでいることが発展の証とばかりに、香港、北京、上海、深圳ばかりでなく、地方都市はどこも中央部の商業圏では高層化を競い、郊外には同階同色の住宅群が「鱗次櫛比」して出現しています。現代人の安心感が都市の変容のなかに息づいています。

また古いほうでは、自然に囲まれた村落の伝統的建築群が「歴史文化名村（鎮）」として保全・保護されています。たとえば貴州侗族の大利侗寨は、四周を楠の古木に囲まれて何百戸もの青瓦木楼が何百年となく河筋や石板古道の両側に「鱗次櫛比」して残されています。「天人合一」といった風情の平和な生活が営まれています。

「挙棋不定」(きよきふてい)

32 2013・6・5

将棋の駒を手にして打とうして挙げたものの、瞬間に迷いが生じて決めかねている。よく見かける「挙棋不定」(『左伝「襄公二十五年」』など)の情景です。しかし挙げた駒は打たねばなりません。プロ棋士の場合は持ち時間が決められていますから、最後は「秒読み」によって急かされることになります。

盤上が戦場であり駒が戦力である将棋・象棋・チェスは、ゲーム(智力運動)とはいえ「闘い方」の違いをルールが表現しています。

将棋がもつ何よりの違いは、象棋・チェスの駒は次ぎ次ぎに盤上から消えますが、日本将棋の駒は相手方の持ち駒になって生き残ります。この戦場での「人道主義」は日本将棋のもつ特徴です。チェスや象棋の盤上に、取った駒を置いたら「勝負」になりません。閣僚の靖国参拝は「ルール」の基本にかかわる問題なのです、

さて政党支持率では自民優勢ですが、「挙棋不定」の有権者が多くおり、国民の次の一手はわからないのです。

* * * *

「弦外之音」(げんがいしん)

89 2014・7・9

春秋時代に琴の名手に伯牙がいました。鍾子期は傍らでその音の趣のあるところ「弦外之音」(袁枚『随園詩話「第八卷」』など)をしつかりと聴き窮めたといいます。「あなたの聴くところわが心のごとし」として伯牙は認め、鍾子期の死後はわが音を知る者なしとして「破琴絶弦」(『呂氏春秋「本味」』から)したといえます。

聴衆の質の高さが名演奏を引き出す要件であることは確かなことで、音楽の表現力には極まりがないようです。「言外之意」を察するのむずかしいですが、「弦外之音」や「甘余之味」となるのもっと微妙な領域のようです。

中国でのロングセラー『傳雷家書』の翻訳が「君よ弦外の音を聴けくピアニストの息子に宛てた父の手紙」として出ています。

ロマン・ローランなどの翻訳家であった傳雷と夫人(一九六六年文革時に服毒自殺)が、息子の傳聡と傳敏に宛てた書簡集で、父親の息子たちへの「呕心瀝血」の愛が深く込められて響いています。

至宝とされている書の名品がそうであるように、優れた文章が一気呵成に記されていて、修改の余地のないことが「文不加点」(禰衡『鸚鵡賦』「序」など)です。それは文思にも修改の要のないことを示しています。書の名品の筆づかいは、どれもがそういうきびしい姿をしています。

王羲之の「羲之頓首」ではじまる「喪乱帖」や、顔真卿が心を鎮めてしたためた「祭姪文稿」の「嗚呼哀哉」(ああ哀しいかな)の一行は、文字は人なり(文如其人)の極みを教えてくれます。「顔体」は職人を通じて明朝体に採り入れられています。

現代作家の作品は印刷されますが、原稿の一气呵成ぶりはおよそ理解できます。一气呵成のほうは、近代の文学者では三島由紀夫や丹羽文雄が有名で、その一方に大江健三郎がいます。大江さんの原稿は一字一字ていねいに記して、途中での修正は後ろに添えたり張って繕ったりして、欄外に吹き出しをつくらないうですから「文不加点」です。一气呵成とは異質の幅と含みのある文体をつくっています。

* * * *

「温文爾雅」(おんぶんじが)

176 2016・3・9

闘争性にはやや欠けるのでしようが、態度が穏和で端正な生き方について「温文爾雅」(蒲松齡『聊齋志異』「陳錫九」など)がいわれます。

革命のあと政治や経済が優先してきた世相にあらたな価値観が広がる時期を迎えているようです。角ばらず古淡な情感をたたえた紳士、目立たず爽やかで性を露わさせない女性が、静かで文雅な関心を呼び起こしています。

温家宝前総理の著作名が「温文爾雅」(二〇一〇年刊)です。日本映画の「三丁目の夕日」(「永遠的三丁目的夕陽」)や「おくりびと」(「入殮師」)をみて、日本の大衆の暮らしや死生観を理解していた前総理は、演説や記者会見で古典を引いて中国文化の奥行きを伝えてきました。その百編余をまとめた著作が「温文爾雅」です。

二〇〇六年一〇月に安倍総理を迎えたときは、「青き山遮って住(つ)きず、畢竟東に流れ去く」(北宋の辛棄疾の詩)を、日本訪問をした二〇〇七年四月の国会演説では、「朋友と交わるに言いて信有り」(『論語・学而』)を引用していました。

「斤斤計較」(きんきんけいこう)

96 2014・8・27

かつて「斤斤」は名王の明察が細やかなようすにいました(『詩経「周頌」』など)が、のちになって小利や小事に細かくかかわることを「斤斤計較」(魯迅『彷徨』「弟兄」など) というようになって、庶民もさまざまな場面でよく用います。

お金に細かいことでは、まずしい村民なら三毛五毛をどうするかのつましい表現になりますし、大金持ちならドケチになります。心配りでは、男性は「斤斤計較」すぎないことが女性に好まれます。糖尿病の人なら飲食の細部にこだわることに。アメリカが中国に「斤斤計較」で細かい要求を出すのは衰落の証になります。

わが国では、「斤」は印刷用紙の厚さや競馬の負担重量として斤量が残っていますし、食パンの一斤(三四〇g)も親しい。

中国では一斤は一〇両で、日常的に用いられていますが、はかりには電子ばかり、卓上ばかり、天秤ばかりとあって、なぜかどれもやや少なぎみの「欠斤短両」であつたことが、世界計量日(五月二〇日)に話題になりました。

* * * *

「以訛伝訛」(いかでんか)

98 2014・9・10

ここの「訛」は、なまりでなくあやまりです。

あやまってものごとを伝えることが「以訛伝訛」(『紅樓夢「五一回」』など)で、古今にその例には事欠きません。真実をありのまま伝える「以真伝真」(伝真機はフアックス)では味けないので、こちらを取り上げておきましょう。

よく事例に出されるのが「三人成虎」でしょうか。城内であわてた三人が虎が出たといえは聞いた人はほんとうだと信じてしまう。二人までは半信半疑でも三人になると根拠のない話でも信用してしまうということ。日中のかかわりで「以訛伝訛」といえば植物の「柏」でしょう。これは「松柏之茂」で述べました。

日本では「生サケ(サーモン・三文魚)を食べない」というのも中国では長くいわれてきました。寄生虫による重症の原因として江戸前のスシでサケを避けていたことはたしかです。いまはサーモンの登場で、イカと同じ並ネタになって「以訛伝訛」のひとつが消えたようです。

何ものにも煩わされず、悠々自適であることを「優哉遊哉」（『詩経「小雅」』など）といいます。日々をおだやかに迎えて一年をつつがなく過ごすことを「優遊卒歳」といいます。

後漢を興した劉秀に、皇太子の荘が勤労の過ぎるのをみて「優遊自寧」を求めています。「優遊」はあくせく暮らす日々のありようを省みて、悠々閑々であること、のんびりした生活を楽しむために心に留めることばとしていいことばです。

さて日々しごとに追われている現代人は、どんなときにこのことばの意味合いを感じているのでしょうか。「遊」に引かれてやはり旅行のようです。北欧にいつてオーロラをみる。寒山寺へいつて除夜の鐘をつく。トコトコ列車に乗って山間を走って放牧のようすを眺める。筏で川下りをする。キャンピングカーで家族で自在な旅をする。はては高層マンションの最上階に住んで下界を見下ろして暮らす。

なんともあわただしい現代の「優哉遊哉」の情景です。

* * * *

「美輪美奐」（びりんびかん）

141 2015・7・8

「奐」はあきらか、あざやかなこと。「美輪美奐」（『礼記「檀弓下』』から）は古くは建築物が壮大で美しいことにいわれましたが、建物の配置や装飾さらに彫刻などの芸術品にもいわれて、時代の変化の中で意味を拡大しながら用いられてきたほめことばの一つといえます。

いまや衛星から送られてきた映像や、世界遺産の古跡や、数万匹のホタルの飛翔（武漢東湖）や、詩情をたたえて演じられるバレエにまでいわれ、名寄市立天文台が撮影した低緯度オーロラも「美輪美奐」と紹介されていました。

美輪にかかわることでは、たとえばフォルクスワーゲン傘下になりましたが、英ベントレーの高級車などなら中古車でも「美輪美奐」のうちですし、洛陽市恒例の「国際牡丹花節」では牡丹園内を三〇万隻という風車で飾る「風車展」が開かれて、七彩の花田を現出してこれも「美輪美奐」です。そういえば、われらが美輪明宏さんは、み仏からささかったというお名前で「美輪美奐」の現代人を実現しています。

「堂堂正正」(どうどうせいせい)

63 2014・1・8

「山珍海味」はいかにも中国ふうな表現の四字熟語です。会合の盛大なようすには「堂堂正正」がよく使われます。

日中の「四字熟語」には典故や経緯の違いから内容は同じでも語順の異なるものがあるのに気づきます。上が中国で下が日本の用法。

山珍海味・山海珍味	雲消霧散・雲散霧消	灯紅酒緑・紅灯緑酒
賢妻良母・良妻賢母	粉身碎骨・粉骨碎身	異曲同工・同工異曲
不屈不撓・不撓不屈	堂堂正正・正々堂々	奪胎換骨・換骨奪胎
一部の文字が異なる「四字熟語」も挙げておきましょう。		

安身立命・安心立命	異口同声・異口同音	異想天開・奇想天外
金科玉律・金科玉条	虎頭蛇尾・竜頭蛇尾	善男信女・善男善女
朝令夕改・朝令暮改	日新月异・日進月歩	燃眉之急・焦眉之急

七年つづいた日本の「一年一相」政権を「虎頭蛇尾」と評する向きもあります。

* * * *

「登堂入室」(とうどうにゆうしつ)

183 2016・4・27

中国の住まいは門があり堂(客間)がありその奥に室(私室)があるというつくりですから、客人は入門して登堂してさらに入室するという段階を踏むことになります。学問や技芸などが深く高い境地に達したことを「登堂入室」(宋・呉垞「五総志」など)といいます。

孔子が子路の瑟のひき方を「由(子路)や堂に昇れり、未だ室に入らざる也」(昇堂入室・『論語「先進」』)と評したのは、堂にまで昇ったのだから遠からず入室できるよ、という師の励ましを伝えています。

それがいまは「登堂入室」で到達したという使い方になっています。たとえば茶芸師の技能大会では「登堂入室の域」にあるなどといわれます。そこで「登堂難入室」という言い方が必要になります。ライト・イノベーションといわれるLEDは価格の点で、割安の民営航空は安定感で、レベルアップしているとはいえ「web文学」はなお「登堂難入室」の域にあります。

「就地取材」(しゅうちしゅつこ)

154 2015・10・7

必要とする素材や人材を現地で調達することを「就地取材」(李漁『笠翁偶集』「三・手足」など)といえます。最近よくいわれる地産地消はそれに当たるでしょう。全国津々浦々(中国では五湖四海)どこでも可能であるところに意味合いがあります。ですからよく使われる四字熟語です。

途上国に進出した日本企業が、現地で最良の素材や人材を得てうまくしごとができてくるのは、これまで長く本国で消費者の利益のために品質のよい製品(モノ)を提供することに努めてきた品格の優れた企業人(ヒト)が、現地で信頼をえているからに相違ありません。それこそが最良の輸出品です。

華道の師範が訪れた地の草花を素材にしてみごとな作品に仕立てるのがわかりやすい例といえます。新聞記者の場合には出張した現地(取材先)で意に合った伴侶を得ることにいわれます。スポーツの国際大会で、本番前に現地入りして練習試合をしたり情報を得ることも「就地取材」です。

* * * *

「満載而归」(まんさいじき)

163 2015・12・9

行く先で身にあまる大きな収穫を得て帰ることを「満載而归」(巴金『随想録』「八」など)といいます。近代の作家巴金は、文化の先進国フランスへ行ってそういう経験をしたことを記しています。国を代表して行く外交交渉や国際会議なら参加して「空手而归」ではすまないでしょう。

「満載而归」は旅先でのお土産の多いことや留学が実り多いことを祈って使います。大成を期待されて故郷を出て、期待どおりに中央での栄達を果たして「錦を衣て郷へ還る」(衣錦還郷)はいい話として知られていますが、志を得ずしてひっそりと帰る「白首空帰」の人もまた多くいるのです。

湖北料理に桂魚を使った「満載而归」という伝統料理があるようです。桂魚の頭と尾を残して背骨を抜いて元宝(馬蹄形の金銀貨幣)に見立てて舟形にし、豚肉や卵やキノコほかの多彩な具を満載して供するもの。宋代の蘇軾は東坡肉で有名ですが、湖北出身の米芾はこの「満載而归」で張り合ったと伝えられています。

狭い路で出くわしてしまい、退いたり避けたりできない状態が「狭路相逢」(『古楽府「相逢行」など)です。親しい人との不意のめぐり逢いならうれしいほうの相逢です。逢いたくない間柄くらいの人なら、急いで心の中の怒や怨を抑えて怒(ゆるし)に替えてすまずこともできますが、仇敵とする人物との出会いとなったらお互いただではすまないでしょう。テリトリーを守る動物同士が狭路に相逢うときのすさまじい争いの形相をみれば、この成語の持つ意味合いがよく解ります。

『三国演義「二二回」』には曹操配下の劉岱が残兵をつれて逃げているとき、勇将張飛と「狭路相逢」してしまい、回避することができずに馬を交えて戦って、ただの一合で生け捕りにされる場面があります。

いまでも車が行き交えないような狭い路での「狭路相逢」はよく経験するところですが、のっぴきならない出会いを両者がどういう方法で収めたのかは興味のあるところですから、日ごろのニュースでよく出会います。

* * * *

不満の声が何より速く伝わるということ、あるいはたいせつな物が突然になくなることを「無翼而飛」(『淮南子「説山訓」』など)または「不翼而飛」といいます。飛ぶ鳥がもつとも速い伝達の例とされていたところに、翼が無くてもそれを越える速さで飛ぶのは人間の「声」(管子)であるということです。それも不満の声。

秦の王稽が兵を率いて趙の邯鄲を攻めたが攻め切れない。そこで兵士を奨励し鼓舞しない王稽に、部下の荘が不満の声は「無翼而飛」(『戦国策「秦策」』から)で伝わりますぞと忠告したが動かない。秦軍に叛乱がおこり攻撃は失敗します。

また、突然に物がなくなってしまうことには今も「不翼而飛」として使われます。とくに大金が紛失したり盗難にあったり、あるいはカードから奪われたりする事例が多いのでよく使われます。おカネ以外にも、廟内の仏像の頭や骨壺までが「不翼而飛」にあうという世相を伝えています。

「不翼而飛」のタイトルで梁静茹が男と女の愛情の曲折を歌っています。

風物はもとのままなのに、人はもとのままでないことを「物是人非」（曹丕「呉質書」など）といえます。境遇によって人が変わってしまったのを嘆いたり、故人を懐かしむ場合もあります。

同じ思いはすでに「年々歳々」（年々歳々花相似たり、歳々年々人同じからず）でみえますが、四字熟語としては「物是人非」が明解で、今でもよく用いられています。「物是人非、事事休す」としても使われ、この場合は「語ろうとしてまず涙が流れてしまう」とつづくので、思いはいっそう深くなります。

中国東北の長春には中国残留孤児の養父母のための「中日友好楼」がありますが、戦後七〇年、はじめ二九戸が住んでいましたが次々に亡くなり、いまは三人になって「物是人非」も語られているようです。ヤクルト・スワローズが二〇〇一年以来一四年ぶりにセ・リーグ優勝を決めました。外野手・代打だった真中満選手が監督となり「物是人非」のシーズンとなりました。

* * * *

「大殺風景」（だいさつぷうけい）

85 2014・6・11

時代が後退期にあることの兆候を自然の風景をこわす営みとして「殺風景」（「雑纂」から）と呼んだ詩人李商隠は、「看花淚下」「苔上鋪席」「花下曝禪」「游春重載」「果園種菜」「背山起樓」「煮鶴燒琴」・・・と列挙しています。カワウソが獲物を岸辺に並べるように、鰻祭魚（だっさいぎよ）を作詩の手法とした商隠ならではの時代諷刺なのでしょう。興ざめの事例は「市井穢語」「乞兒夜号」とつづきます。

むろん李商隠は「大」など付けてはいません。

後世の俗人が同時代人の営為を「大殺風景」と呼んで批判の対象としてきたようです。最近の例では、上海の古寺「静安寺」の景観を無視して囲むように高層ビルが建ち、現代の「大殺風景」を現出しています。歴史環境保存の好事例として、京都の景観への対応が議論されているようです。もうひとつ、杭州西湖の白堤のほとりて脚を洗う「西湖洗脚」を殺風景としたわが国の実見者の感想が話題になりました。「清泉濯足」も古来、殺風景のひとつに挙げられているのです。

「経国大業」（けいこくたいぎょう）

36 2013・7・3

「文章は経国の大業にして不朽の盛事なり」（『典論「論文」から』）といったのは、曹操の長子で三国魏の皇帝となった曹丕です。このことばは、その後、国家のリーダーに「優れた文人」であることを課することになりました。国の営為は不朽であらねばならず、それを表現し国民に理解を求めるには必要な能力だからです。

父の曹操は武人であるとともに文人を志した人であり、丕と弟の植を合わせて「三曹」といわれます。曹操なきあと三国争覇の魏軍を統率していたのは司馬懿であり、子の師と昭を合わせた「三馬」に対する牽制の意味合いもうかがえます。

みずから不朽の文章をとなえた曹丕でしたが、筆をおるせば文章をなす「下筆成章」の曹植のほうが勝るといふ世評は当時からのものだったようです。

鍛えあげた文章表現力をもつ人物によって国の事業は不朽となるのだというのですが、曹氏は武力によって司馬氏に敗れてしまいます。それゆえに曹丕のこのことばは不朽となりました。

* * * *

43

「多難興邦」（たなんこうほう）

205 2016・9・28

先の「温文爾雅」の稿で紹介した温家宝前首相の発言集成である『温文爾雅』の日本語版『温家宝の雅』が上梓されて、出版記念会が九月二六日に東京でありました。とりあげられた一〇三編の発言のうちでやはり二〇〇八年五月一二日に四川省汶川で起こった大地震の次の日に被災地に入って、訪れた北川中学校で黒板に白墨で板書して、政府の対策を約束し子どもたちを激励した「多難興邦」（『左伝「昭公四年」から』）が鮮明な印象を残しています。黒板に書かれた「多難興邦」の文字は、消されずにそのまま大震災を記念するため残されたことでも。現場で難を乗り越えてこそ国は興ると訴える温首相の実践行動に感激して、多くの人が義捐金活動に参加しました。

ところが五年後の二〇一三年四月二〇日に起こった四川省雅安地震で義捐金で立てた建物が損壊したり鉄筋不足が発覚して、政府側の対応が指摘されて、改めて「多難興邦」がいわれました。

『礼記「礼運』』にあるこのあまりに有名な成語は、歴代の政治家が常に目標としてきました。近代では孫文がよく揮毫したことで知られ、雄渾な直筆が南京の中山陵正門に掲げられ、原筆を所蔵する台湾の故宮博物院にも掲げられています。

「辛亥革命一〇〇年」を記念する行事が各地で行われ、封建制（一家族の権力）を打破した民主革命に評価がありました。そのあとは優れた将相名賢が出て、「天下為公」の政治をどう展開するかです。「大道の行われるや、天下を公と為し、賢を選び能を与し・故に外戸をして閉じず、是を大同と謂う」と。セキュリティのいらない社会のことで、それなら戦後のわが国で実現していた記憶があります。

一方に「上下こもごも利をとれば国危し」（『孟子「梁惠王章句』』から）が知られます。みなが利をむさぼるとき国は危うくなる。とくに上位のものが大きく奪うとき国はいつそう危うくなる。公の「大同」（格差を容認しない）を掲げる「為公会」は麻生副総理の政策集団ですが、「利」によって社会は動いているようです。

* * * *

「山中宰相」（さんちゆうさいしょう）

43 2013・8・21

王朝の衰退期には、優れた人物は政権の中枢には近寄らないで身を処したことから、都から離れて山中に「隠居」して出仕しない賢人を「山中宰相」（『南史「陶弘景伝』』など）といいました。それでも朝廷から丁重に諮詢されれば、きちんと対応をしました。それを都の人びとは敬愛をこめて「山中宰相」と呼びました。

南朝梁（都は建康いまの南京）の陶弘景の場合は、みずから華陽隱居と号して山中の館に籠もり、皇帝（梁の武帝）から礼をつくして招聘を受けても茅山の館からは出ませんでした。三〇歳代に致仕して以後、門弟たちに囲まれて医薬、道学などを講じ、琴棋書画を愉しみ、八〇歳余まで「山中宰相」でありつづけました。

「戦後日本」の形成に参画し、成果を後人にゆだねて退き、「山中宰相」と呼びうるような暮らしをしている優れた先人がいるはず。そういう人物から学ぼうとせず、みずからの手で新時代が築けると過信して、せまい範囲で右顧左眄している現代の政界は、衰退期を迎えているといえそうです。各地各界にも同様な事情があるようです。

良きにつけ悪しきにつけ官が官を助け合うことはあるわけですが、官吏同士がお互いにかばい合うことを「官官相護」(馮夢龍『醒世恒言』「二三」など)といいます。

良い方の清廉な官吏同士の用例はそれが当然という事情があつて用例は少なく、道理に合った執務が行われる「官清法正」がある程度。一方、かんばしくない方は、法が炉の火のように無情である「官法如炉」や官吏が虎狼のように残暴である「官虎吏狼」など、官吏が「官官相護」になることで民衆の造反を呼び起こす事例は歴史上に絶えることはありません。

「刑は大夫に上らず」(『礼記』「曲礼上」)というのは、大夫(高級官僚)は倫理的に鍛えられた素養を持つているので罪を犯すことなどありえないという前提で刑を免れる特権があつたのですが、急激な経済成長の陰で表面上の清廉さを保つ「官官相護」が腐敗の温床になっているというところで、いまは軍といえども特区はないという習近平政権下で、厳格な「反腐敗」告発が各地各界に広がっているようです。

* * * *

「両袖清風」(りょうしゅうせいふう)

92 2014・7・30

盛夏の午後のひととき、袖なしどころか、TV局の冷房の効いた部屋で、背広を着てワイシャツの襟だけ空けて「クールビズ」を装う解説委員が、電力を確保するための「原発再稼働」について解説しています。

一方、電力の節約を考えて、梅雨あけの「電気予報」を気にしながら視聴する庶民の方は、ゴーヤのつくる日蔭の窓辺でウチワ片手に浴衣掛け。こちらは風が立つたびに両袖に清風が戯れます。

「両袖清風」は、実は橋上を月に随って歩む心地よい実景を詠った元代の陳基の詩によって知られます。が、明代になると兵部侍郎の于謙が、黄河の氾濫で災禍にあえいでいた河南地方での任務を終えて京に戻るにあたって、礼品をいっさい受け取らず、寸物も帯びずに京へもどる晴れがましさを「清風を両袖にし、天(みやこ)に朝(むか)いて去る」(『于肅愨公集』「入京」)と詠んだことから、以後は実景ではなく清廉な官吏をいうこととなりました。

「入郷随俗」(にゆうごうざいぞく)

31 2013・5・29

T・S エリオットの詩集をミュージカル化した「キャッツ」(音楽劇「猫」とい
えば、一九八一年にロンドン初演以来二六カ国三〇〇余都市を巡回しており、日本
でも「劇団四季」が演じて親しい。中国でも人気で、二〇一二年暮れの北京公演で
は、開幕の歌「ジェリクルソング」(傑里科之歌)にいくつもの四字熟語を巧みに織
り込んだ演出が評判になりました。

エリオットの英詩の押韻による美しい語感も詩意も、直訳の歌詞で伝えるのはむ
ずかしい。そこで伝来の四字熟語を重ねることでリズム感と意味合いとの「入郷随
俗」(郷||ごうに入つて俗に随う。その地の風俗習慣に随う。『続伝灯録・七』など)
に成功したといえます。

歌詞には、語尾がnの四字熟語「威風八面」(威風堂々として)「智勇双全」(智勇
そろって)「詭計多端」(だましあつて)「風雲变幻」(何が起きても)「左右逢源」(ど
つちみち同じ)ほか散りばめられています。

* * * *

「小国寡民」(しょうこくかみん)

157 2015・10・28

新たな王朝が前王朝を倒して夷平した大地に現われるとき、民衆はその恩恵を受
けたことはたしかです。その反動で王朝が衰亡を迎えるとき、民衆はその影響を受
けて災禍に苦しんだことでしょう。いまは歴史的にどういう時期なのでしょう。

大国がもたらす禍福を離れて、おのおのがその食を甘(うま)しとし、その服を
美(うま)しとし、その居を安んじ、その俗を楽しむ「小国寡民」(『老子「八〇章」
から)を意識して暮らす人生を、老子は理想としました。

ヒマラヤ山地のブータンは「国民総幸福量」(GNH: Gross National Happiness)
を基本理念として掲げる「世外桃源」(シャングリラ)といわれる小国です。仏教国
ですから老子の理想をそのまま重ねるわけにはいかないでしょうが、大国の民が失
つてしまった素朴で満ち足りたうまし(甘・美)小国のくらしを伝えていきます。

桃源郷は世外の理想のこととして、民衆にとっては世情が安定して将来に不安が
なく、おのおのがその居に安んじ、その業を楽しむ「安居樂業」が願いです。

「喬遷之喜」（きょうせんしき）

80 2014・5・7

鳥が深い谷から出て、高く大きな木に遷って巢を営むこと。

『詩経「小雅・伐木」』に「幽谷より出でて、喬木に遷る」とあり、「喬遷」は、遷ることの喜びを述べてともに喜ぶ祝詞として用いられています。

新年度をむかえて、役職が高い地位に昇進したりする場合の祝詞としていわれます。遷るにも「左遷」では迎えるほうもつらいですが、「喬遷」ならみんなで祝つて、みんなで「喬遷を望む」のは快い情景です。店舗や会社が中心地に遷つて営業することは「喬遷新址」。とくに会社自体が業界のトップに躍り出たりすれば社員みんなで「喬遷盛典」で祝うことになります。

都市では高層住宅の新築が盛んですから、高層の新居を購入した人ならば「喬遷新居」は実感をもつて祝えます。

しかし大気汚染ばかりでなく、建材や装飾、家具による室内空気汚染も問題のようで、日本製の空気清浄器が「喬遷」のお祝い品という話もあります。

* * * *

「虚位以待」（きょいいたい）

152 2015・9・23

「虚位」は、地位などを空席にすること。

賢人を得て充てるために席を空けて待つというのが「虚位以待」（『歐陽文忠公集「奏議集一五」』など）です。これからしごとに関わる新しい任地で、「虚位以待」と紹介されるのは何よりの光栄でしょう。そうして招かれれば、だれでも力を尽くして任に当たるはずで。

企業が人材を求めるために、いまでは「一起工作」（いっしょにしごとを）くらいの軽い呼びかけとして求人者のキャッチにも使われています。夏場の「虚位以待」といえば、企業が英才を求めて開く高校卒業生への就職説明会があります。各企業は条件を提示して説明を行いますが、最近では競って高賃金をアピールしています。

また「虚左以待」（張籍「贈殷山人」など）というのは、左右どちらが上座かは時代によって異なるのですが、車騎の場合に左側を上座としたことから高位の席を空けて待つことになります。傍らにどうぞお座りをという親しさを伝えて。

しごとが順調で成果が現れており、将来がなお期待されている時に果断に勇退して自己の節義を保つことが「急流勇退」(『蘇東坡集「贈善相程傑」』など)です。

サッカーのベツカムや野球の松井秀樹、ゴルフの宮里藍などスポーツ選手の引き際がそれに近いですが、二〇一三年九月に宮崎駿(はやお)監督の進退の判断は「急流勇退」というにふさわしいものでした。ベネチア国際映画祭に『風立ちぬ』(風起了)が出品中であつたことで、「動画界のクロサワ」「日本のディズニー」の引退は一気に世界中に知られました。宮崎さんは公式引退の辞で、しごとの目安を「あと一〇年」、しごとをやるやらないの自由を理由とし、七十二歳の「急流からの勇退」は「生涯現役宣言」でもあつたのですが、二〇一九年の公開予定の長編の制作のため二〇一七年二月に引退を撤回しました。

宋代の蘇軾もすでに「急流勇退はあに人なからん」と、なかなかできないことだと述べています。

* * * *

「急中生智」(きゅうちゅうせいち)

150 2015・9・9

平常時には思いつかなかつたのに、緊急時にそれを乗り切る方策や名案が思い浮かぶことを「急中生智」(『三侠五義「二三回」』など)といいます。

この典故の「急中生智」は、きこりが木にのぼって仕事をしていたところ、子どもをくわえたトラが木の下を通りかかります。そこできこりはとっさに手にしていた斧を、トラの頭をねらつて投げます。斧はトラの背にうまく刺さつて、子どもを助けるシーンで使われています。

トラとの遭遇は現代の吉林省でも「急中生智」の例を残しています。牛を探して山に入った老人が寝ていたトラに遭遇します。老人はとっさにこん棒で樹を叩きながら咆哮したところ、トラは林に逃げ込んでしまったというのです。

中国市場に参入した日本企業のなかには、経済の下降状況を迎えて苦闘しているところもありますが、日本で鍛えた経験をかして、実情に見合った製品やサービスを案出して「急中生智」で乗り切るだろうと推測されています。

「買空売空」(ばいくうばいくう)

34 2013・6・19

「空を買い空を売る」(「大清宣宗成皇帝聖訓など」というのは、実態としての現物の介在がないまま期待値の価格変動から差益を得るためにおこなう投機行為にいいます。いまや「大衆資本主義」の盛時、株式による「買空売空」には多くの国民が一喜一憂しています。

安倍総理が国民の「家計を潤す」ためとして放った「三本目の矢・成長戦略」とともに東証株価が五―八円も下落しました。デフレ状態からの脱却をめざした「アベノミクス」は、「コンクリートから人へ」の次は「人からカネへ」であるかのよ
うに、「金融緩和」や「財政出動」を繰り返して、内外の金融資産家の関心を呼んで
います。先払い利益をえた企業は、「粒粒辛苦」して働く人びとに還元せず、社内留
保したまま。億兆円をふりかざす首相に「行動なくして成長なし」といわれると、
企業は展望のないままに設備投資をし、これから働くことを強いられる社員は、「買
空売空」に一喜一憂する仲間を「それが人生か」と横目で見ながら憂慮しています。

* * * *

「通商寛農」(つうしょうかんのう)

203 2016・9・14

中国のリーダーが優れた文人であろうとすることは、「経国大業」(別項)でみ
たとおりの長い伝統です。歴史的できごとを現代の問題として理解した上で、温家
宝首相が演説や講演のときに古典からの故事成語を引用していたことは「温文爾雅」
(別項)のところで述べました。

もちろん習近平主席もそうですが、二〇一六年九月三日の「G20杭州サミット
(峰会)」「開会式の演説で、「知行合一」や「同舟共済」(別項)といった成語と
まじえて、貿易を促進し農政にゆとりをもたせる意味で引用した「通商寛農(寛農
が簡体字)」「(『国語「晋語四」』から)を「通商寛衣」と読みちがえてしまった
ことが話題になりました。

複数の担当官が意見を接ぎ合わせた文体だったこととともに、学問をすべきとき
に学問の場を離れた下放世代の知的弱点が指摘されています。中国を代表する次世
代の国際派リーダーの登場までにはまだ間があるようです。

同じ最終目標さえしつかりしていれば、意見や手法の違いから生じる左右の対立があっても、どんな激論をかわしても、ともに最終目標に達する成果が得られるというのが「左右逢源」(『孟子「離婁章句」』など)の考え方です。川の左岸をいつても右岸をいつても、いずれ同じ水源へ到達できるということです。

安倍総理は、靖国神社の秋季例大祭に参拝せず、神前に「真榊」の奉納ですませました。「国のために戦い、命を落とした英霊に尊崇の念を示す」としながら、一方で「外交問題化している中で行く行かないをいうのは控える」という立場です。

中韓両国はA級戦犯を合祀する靖国神社への閣僚参拝は、「歴史から学ばない」ルール違反として中止を求めています。

この安倍総理の参拝態度について、中国側からは「左右逢源」にあらずがいわれます。同じ源に向かわないことは明解で、いずれ国内では保守派の信任を失い、隣国関係の修復にも利さないことになるという結果をみています。

* * * *

昨今の左翼は進歩的立場を代表することで評価されていますが、古くは「左道をとれば政を乱す」(『礼記「王制」』から)といわれ、傍門八十、左道三千といえますから、本家本元でないものが多いか分かります。左は邪で正統でない流派が左道、傍は不正で正当でない体系が傍門、そこで「左道傍門」(『封神演義「七十二回」』など)は、正統派でない宗派や学術の流派、正常でないものごとについていうことばであったようです。

それでもおもしろいのは左道や傍門のほうなので、ドラマや小説になっていますし、「左道書法」や「左道茶具」などには独特の味わいがあります。「左道財神」なら蓄財の奥義を教えてくださいそうです。中道正統派からは、非主流の左派は「左道傍門」で、右派は「邪道歪門」という評も現われます。「左道傍門」については、固く理解せずに、リオ・オリンピックで示されたブラジル人の陽気な「いい加減さ文化」を思いあわせていただくと分かりやすいでしょう。

旧暦では日暮れから日の出までを五つの刻みにわけて、初更く五更と呼んでいきます。そうすると「三更」が真夜中であり「半夜」でもあることから「三更半夜」(『宋史「趙昌言伝」』から) というのは、いわゆる午前さまです。

宋都の東京開封(「清明上河図」に画かれる)は、平和を謳歌して深夜まで夜市中で賑わいました。いまの開封にまでその伝統はつづいています。塩鉄税の徴収官であった陳象輿と財政官であった董儼らは、夕方から深更まで熱心に税談議をしていたといえます。そこで都の連中からは「陳三更、董半夜」といわれました。能吏に三更まで税徴収の談議などされたら、夜市を楽しめない者もあつたことでしょう。

冬の夜の東京は光が明るい。

とくに霞が関界限は、官僚の残業で明るい一角です。かつては国土発展の予算配分で深更までしごとをしている明かりでしたが、いまや増税による予算づくり。その「三更半夜」の明かりとなると寒さがつのります。

* * * *

「事半功倍」(じはんこうばい)

79 2014・4・30

事半なら功半が当たり前なのに、想定外の金融緩和によって想定外の利益を得ている人がいます。「事半功倍」(『孟子「公孫丑上」』など)です。目の前にいない先人・後人から借りたり、他者から得たりするから可能で、想定外の不利益がどこかで生じていることを知っておくべきところでしょう。

ですから一方で必ず「事倍功半」(白居易「為人上宰相書」など)が生じて、こちらを力を尽くしても収益が半分。「ワーキング・プア」といった現象が起きています。そのときだれかが「事半功倍」であることを喜んでいることになりました。

巫聖の孟子がなんでこんな効率的な話をしたのでしょうか。原典では古人の営為と今とを比較しての成果のことで、力半分得ということではないようです。

得することばとしてよく使われます。朝やる体操の「事半功倍」は清々しい。化粧品や塾の学習効果の宣伝はわかりやすい。釣魚島の奪回に台湾と大陸(兩岸)が手をむすんで船を出すと何やらぶっそうな功倍です。

「平易近人」(へいいきんじん)

137 2015・6・10

民衆とともに「同甘共苦」すること、群衆の中に入って親しくその心の声を聞くことを「平易近人」(巴金『随想録「二九」』など)といます。

もとは孔子も理想の政治家として慕った周公(姫旦)の治世の姿を、『史記「魯周公世家」』では「平易近民」と伝えています。「周公吐哺」というのは、賢人が訪ねてくると口にしてきたものを吐いてまで会ったことにいわれます。食事中なのでといって断るようでは、この「平易近民」の意味は理解できないでしょう。

「平易近民」は周恩来総理の風姿を周公旦と重ねて用いられていました。ですから、以後の政治家には胡錦濤・温家宝といった首脳に対しても遠慮して使わないようです。習近平主席の最近の著作も『平易近人 習近平的語言力量』というタイトルになっっています。

「中国夢」で知られる女性歌手陳思思(全国政協委員)が、優美に平等と友愛の心を秘めて歌う「平易近人」が各地の大街小巷で歌われているようです。

* * * *

「平起平坐」(へいきへいざ)

156 2015・10・21

旧時代の官僚は、地位の同じものが同時に起ち同時に坐したことから、地位や権力などが等しいことを「平起平坐」(吳敬梓『儒林外史「三回」』など)といます。

習近平主席と奥巴马(オバマ)大統領の米中両首脳の「平起平坐」は、習主席の初訪米(二〇一三年)の折りには赤いベンチに座って(平坐)話しましたが、それは形だけ。二〇一四年の北京APECの際には九時を延長して夜一時まで同座しましたが、別れは闇の中でのこと。

そして今回の九月訪米のホワイトハウス内での私的ディナーで、親しく園内を肩を並べて散策したことで、ふたりの「平起平坐」が示されたといえます。

武器輸出の件では、経済活況の裏でインドや東南アジア諸国が輸入をふやしており、米、露、ドイツに次いで、英、仏と中国が「平起平坐」となり、日本は焦慮という情報もあります。政治向きの話だけでなく、サッカーのリオネル・メッシがFIFA三度優勝をもたらした。ペレと「平起平坐」したというシーンもあります。

理がないことを強いことばで押し通そうとすること。『三国演義「四三回」』では、蜀の諸葛孔明が呉地に乗りこんで、並み居る孫権配下の文武の論客を「強詞奪理」で正論にあらず、といって次々に論破する場面で用いられています。

「知韓派」である習近平主席の訪韓の際(二〇一四年七月四・五日)には、両国の世論が、第二次大戦での軍事的侵略と慰安婦問題に対する日本政府の言動を「強詞奪理」といつて批判し、漢風と韓流をつなぐ習主席の「風好正揚帆」という呼びかけを後押しして、経済・文化交流への蜜月ぶりを演出しました。来年に両国は「戦勝七〇年」を記念する行事を共同で展開することを決めています。

安倍政権の「集団的自衛権」の推進は、七〇年の平和を破る「強詞奪理」として受け取られています。本来なら、三国の政府が共催で、欧米に立ち遅れていた東アジアの近代化の進展と経済・文化交流の成果を、「アジアの勝利」としてともに祝うことがみんなの願いなのですが。

* * * *

「日理万機」(にちりばんき)

106 2014・11・5

日ごと一万件の事務を処理することが「日理万機」(余継登『典故紀聞「三二」』など)で、政務が繁忙である国家リーダーに対する敬意と慰労をこめた褒めことばです。近くは周恩来首相がその対象になっていました。「反義語は「無所事事」です。

首脳たちはいつも繁忙ですが、いつても閑をつくって映画やテレビ番組をみて愉しんでいるようです。息抜きの対象はそれぞれです。

毛沢東、習近平主席はアメリカ映画ですが、温家宝元首相は日本映画をみています。中国公開の最初の外国映画となった「追捕(君よ憤怒の河を渉れ)」(高倉健・中野好子主演)から「三丁目の夕日」や「入殮師(おくりびと)」までみています。戦後日本の大衆の暮らしや共有する死生観を映画から理解しています。

世界一の「日理万機」の人といえば米国オバマ大統領でしょう。ゴルフと家族旅行と休暇での息抜きが歴史上もつとも豪華で高価な大統領であるということ、国家リーダーの「日理万機」と休息の違いとして指摘されています。

訪中の際にアメリカ大統領は中国の古語を引用して、親密さと知的関心を表現しているようです。オバマさんは「温故知新」(『論語』)、ブッシュさんは「民為邦本」(『尚書』)、クリントンさんは「天下為公」(『礼記』)。レーガンさんの「賓至如帰」(『左伝』)、賓客として帰ってきたようなどは極めつきといえるでしょう。

韓国の朴槿惠大統領が訪れた際、清華大学(習近平主席も卒業生)での講演で用意したのが、「・十年之計、莫如樹木、終身之計、莫如樹人」(『管子』)で、木は十年だが人の育成は終身)でした。清華大学の校訓である「自強不息、厚德載物」(『周易』「乾」「坤」)。自ら努めて休まず、徳を積んでどんな任にも当たれる)を知つてのこと。中国の夢と韓国の夢を融合しましょうと呼びかけ大歓迎されました。今年三月に訪中したミシェル・オバマ夫人は北京の中学校で書に挑戦して「永」と書き、同道した彭麗媛・習近平夫人はこの「厚德載物」と書いてミシェル夫人に贈っています。

* * * *

「満腹経綸」(まんぷくけいりん)

224 2017・2・8

「経」は絹糸を並べて織機の台に据え付けたタテ糸で、「綸」は糸をよりあわせること。二文字を合わせて国家を治め整えるという意味を表します。「経綸」はすでに『周易』「屯」に「君子は経綸を以つてす」とありますから経歴の長さが知られることばです。それが「満腹」をつけて「満腹経綸」(洪炎『西渡詩集』など)となったのは、経綸だけでは経綸にならなくなった事情があったのでしよう。

「満腹」には疑惑にみたされている「満腹狐疑」や不平で心中おだやかでない「満腹牢騷」などもあります。どれが先かはわかりませんが、「狐疑」は屈原の「離騷」にありますし「牢騷」となると「離騷」と表裏の気配すらあります。宋代の用例が多いようです。

ここでは「満腹中枢」がおかしい政治リーダーの命令の経綸のなさをいいたかつたまでのこと。わが近代国家の秩序を整える方策を紳士君、豪傑君、南海先生が酒席で論じた『三酔人経綸問答』(中江兆民・一八八七年)の筋のよさが知られます。

道義にかなえば必ず多くの人びとの支援が得られ、道義にそむけば孤立無援になつてしまうというのが、「得道多助、失道寡助」(『孟子「公孫丑下』』から)です。『孟子』には対句として記されています。

いま中国で「得道多助」として論じられていることに、中国が主導するアジアインフラ投資銀行(AIIB・亜洲基礎設施投資銀行)構想があります。「摩肩接踵」(別項)するようにして五七か国まで創設国が増えました。将来は利益を分け合つてお互いに発展していこうというのが「得道多助」の理由です。途上各国からも道理にかなつているとして支援を集めているのです。

とすると、参加を見合わせているアメリカと日本は「失道寡助」として孤立することになります。安倍首相のアメリカ訪問での「日米戦争」に対する「痛切な反省」と「日米の絆」演説は過剰といえる歓迎ぶりとなりましたが、両国の孤立が憂慮される光景でもあるのです。

* * * *

「黒白混淆」(こくびやくこんこう)

74 2014・3・26

「黒白混淆」といえば何やらアメリカ社会の課題と思われそうですが、じつは大国の再興「中国の夢」も、この課題の克服なしにはありえないといわれています。

ことは後漢時代の楊震にはじまります。楊震は、三〇年間教育にたずさわって門下生三〇〇〇人、「関西孔子」と称えられました。その後の出仕は二〇年余り。東萊太守のとき通りかかった昌邑で、県令の王密から深夜ひそかに金一〇斤を贈られます。楊震は「天知る、神知る、我知る、子(あなた)知る、なんぞ知るなしといわんや」と断りました。それが知られて「四知先生」と呼ばれることになります。

はては高官たちの目にあまる豪邸、園林づくり、是非をわきまえず、黒白混淆(『後漢書「楊震伝」』から)と強く諫めて地位を追われ、毒をあおって憤死したといえます。

「改革の全面深化」を掲げる全人代活動報告は、腐敗の打破のむずかしさをにじませていきます。強化しすぎれば「口是心非」という心理的腐敗を引き起こすからです。

「举世无双」（きよせいむそう）

125 2015・3・18

世界にふたつとないまれにして貴ぶべきものが「举世无双」（魯迅『故事新編「剣」』など）です。

史跡では唐代の長安城もそうですが、西域の「莫高窟」はその名のとおり「举世无双」の仏教遺跡です。世界を相手にこれから盛時にむかう現代中国がどれほどの優れた作品を生み出すかは想像もできませんが、これまでの各王朝の代表的作品の数々が日本に渡来して国宝として所蔵されていることは確かです。

「曜変天目茶碗」（静嘉堂文庫）、「瀟湘卧游図」（東博）、「王羲之の喪乱帖（摸本）」（宮内庁）、「観音猿鶴図」（京都大徳寺）、「紅白芙蓉図」（東博）、「菩薩処胎経」（京都知恩院）など、いずれも日本の国宝であり「举世无双」の神品です。「举世」の熟語のうちには「举世皆濁」（「漁父辞」から）があります。国家の将来に絶望して世俗の塵埃を避けて去る楚の屈原が残したことです。韓国の大学教授六〇〇人余が選んだ二〇一二年の世相を示す「今年の漢字」が「举世皆濁」でした。

* * * *

56

「濫竽充数」（らんうじゅうすう）

65 2014・1・22

「竽」（竹管楽器）の合奏者の中にうまく吹けない者が混じっていることをいう「濫竽充数」（『韓非子「内儲説上」』から）は、さまざまの意味合いでよく使われます。

無能なのにいい地位にいる、実力以上の待遇や声価をえている、全員のレベルを乱している・手ぬき品やブランド品のなかのニセモノにもいわれます。

竽の合奏を聞くのを好んだ斉の宣王は、吹き手を集めて合奏させました。そこで南郭先生が三百人の吹き手を集めて演奏したところ、王は喜んで国費で楽員を抱えたといいます。

問題は宣王が死んで湣王が立ち、個人の演奏を好んだことにあります。演奏者として実力のない南郭先生が去ったのはいうまでもありません。

楽団がいい演奏をするには、全体の調整を図る指揮者やコンサートマスターが必要です。後者は演奏の名手ですが、中心にいて必要な指示を出していた南郭先生は指揮者に近い役割をしていたという解釈もあっていいようです。

「同舟共済」(どうしゅうきょうさい)

33 2013・6・12

同じ舟に乗っているのだからお互いによくやりましたよというものが「同舟共済」(『孫子「九地」から』)です。

中国の李克強総理が五月最初のインド訪問で用いましたし、二〇〇九年にクリントン国務長官が訪中した際にも自分のほうから米中協調を呼びかけるに当たってこの故事成語を引用しました。習近平主席ほか中国の要人が外国との交渉にあたってよく使います。二〇一一年に在日中国人のみなさんが選んだキーワードも「同舟共済」でした。

日本では同じ『孫子』を典拠として「呉越同舟」として用いています。呉人と越人という歴史的に知られた敵同士の人びとが同じ目標にむかって助け合うという意味合いは鮮明ですが、呉越というのは現代の中国では使いづらいのでしょう。

目標や志向を同じくする者同士が助け合って互いに益を得ることを「同道相益」(欧陽修『朋党論』など)といます。成果を共有してゆくいいことばです。

* * * *

「来日方長」(らいじつほうちよう)

53 2013・10・30

黒姫に居をかまえるC・W・ニコル(七三)さん、熊野の山里に住むE・ハンソン(七四)さん、そしてD・キーン(鬼怒鳴門、九一)さん。それぞれに「来日まさに長し」の日本国籍をもつ知名人です。(年齢は二〇一三年)

「来日方長」(汪由敦『甌北初集序』など)をこういう「来日」の読み方で、山東省の臨海都市のひとつ日照市(室蘭市の友好都市)は、わが日照市に来れば人は健康で長寿になり、投資企業は末長く発展しますと市の紹介と産業招致に用いています。そこで、わが日本に来れば親しいオモテナシを受けて、順調に活躍しつつ長生きできますよ! と世界一の長寿国として、世界中の優れた技能者や教養人に長期滞在を呼びかけたらしい。

それが来たる日々を豊かで明るい展望を持って過ごせる定住から永住につながる広報となり、三氏のような日本を日本人より良く知る人びとが多くなる国際文化立国にむかって、本来の「来日まさに長し」を示すことになります。

トランプ大統領との電話会談でにわかにかわだつた台湾初の女性総統・蔡英文総統は、高雄にある黄埔軍官学校の閱兵後の訓示で、「貪生怕死莫入此門（生に執着し死を恐れる者はこの門を入るなかれ）」と述べていました。

ご存じのように「三民主義、吾党所宗 以建民国、以進大同」ではじまる「中華民國国歌」は、一九二四年の黄埔軍官学校創設時の孫文の訓詞の一節です。曲折あつて学校は一九五〇年に高雄に再建、広州の跡地は全国文物重点保護單位に。

敵前で「貪生怕死」（『三國演義』など）である軍隊では鬨えない。「出生入死」（『韓非子』など）が反義語で、命をかけた行為にいいます。こちらをいわないのは鬨争を好まない国民性があるからで、かつて台湾総督だった後藤新平も台湾人の性格に「貪生怕死」を指摘しています。国歌の「吾党」が「国民党」を指すことから、民進党の蔡英文総統が歌うかどうか話題となりましたが、総統就任の後は斉唱に加わっているようです。

* * * *

「両敗俱傷」（りょうはいくしょう）

75 2014・4・2

双方がともに正義を掲げて争つたものの、双方が傷ついてもに敗者となる「両敗俱傷」（汪応辰『文定集』「一五」など）の事例は数知れません。さわやかな勝敗はスポーツならではこのことで、ロシアの「ソチ・冬季オリンピック」でも勝者となることの感動シーンが見られました。その同じソチで六月に開催予定であったG8が、ウクライナ・クリミア共和国のロシアへの強行編入によって中止され、欧米側の経済制裁が加わって「両敗俱傷」の実例となろうとしています。強行したプーチン大統領の支持率が七〇%を越えたといえますから勝者といえるのでしょうか。

魚釣島国有化や首相の靖国神社参拝で悪化しつづける日中間の対立が軍事衝突にでもなれば「両敗俱傷」といつていたのは米国でした。いま米国に対して対露経済制裁は「両敗俱傷」というのが中国側の論調です。

そんなおかげさな話を例に持ち出すまでもなく、夫婦喧嘩というのも「両敗俱傷」で、さわやかな勝者はないようです。

四方から集中攻撃のマトになることを「衆矢的的」(魯迅『朝花夕拾「瑣記」』など)といいます。魯迅の引く例は、天津にできた漢学のほかに洋学や数学を教える中西学堂に対する旧守派からの攻撃でした。事情は異なるにせよ、森友学園騒動でのマスコミ攻撃は、他に報道するできごとがないかのような過熱ぶりでした。

google での検索数は「籠池」で一一四〇万件、「トランプ大統領」で一一八〇万件、この似た数字をどう解釈したらいいのでしょうか。(「安倍晋三」は二〇一〇万件、「小池百合子」は五六〇万件です)。ここで指摘したいのは、他のできごとが無視されてしまう片寄り。民放ラジオのプロ野球中継もただごとではありませんが。

米軍の韓国へのサード (THAAD) 配備によって中国の報復的反応がはじまり、その「衆矢的的」となっているのがロッテ (LOTTE、中国名は「樂天」) です。人気があった瀋陽店でも天津店でも客足が遠のいていましたが、他の店舗とともに閉店に追い込まれています。

* * * *

「無的放矢」(むてきほうし)

明確なマトに向かって矢を放つ「有的放矢」でも的中するのはむずかしいのに、見定めがつかないままの「無的放矢」(梁啓超『中日交渉滙評』など)では目標を達することなどありえないという場面で用いられます。

経済動向の見定めのみずかしいことは、しっかりデータ分析をした「有的放矢」であっても、百人百様の推測があることや株価変動での大衆投資家の一喜一憂の姿からも知られます。

中国経済の減速、株価の暴落があつて、李克強首相の発言が注目されましたが、「有的放矢」としての判断は、微調整の局面であるということでした。

さて日本経済のほうですが、安倍首相が「新三本の矢」として、希望を生み出す強い経済 (GDP六〇〇兆円)、夢を紡ぐ子育て支援 (出生率一・八)、安心につながる社会保障 (介護離職ゼロ) を放つても、デフレ脱却の成果がえられないのは「無的放矢」どころか、「無的放言」といわれても仕方ありません。

いまや愛国のための主たる戦いは、一方は自爆テロ、一方は近代科学兵器による遠距離攻撃ですから、相接することがありません。フェンシングや剣道などスポーツとして相手と対面して戦う姿は残っていませんが。

短兵は刀剣などの短小兵器のこと。相接は交戦すること。両軍が近い距離で対面して死を懸けて戦いをまじえることが「短兵相接」(屈原『九歌「国殇」』など)です。歴代を通じてどれほどの兵士がお互いに愛国のために相接して命をかけた死闘を繰り返してきたことでしょうか。

しかし今でもこのことばが多用されるのは、人の殺傷ではないところで用いられる状況があるからです。たとえば、金とアメリカ・ドルの動き、東南アジアの高速鉄道敷設での日本と中国、北京や青島の超高級マンションの入居、世界各地でのデモ隊と警察官、車ならプジョー(仏)とゴルフ(独)、カメラならわがニコンとキヤノン、お酒なら白酒と紅酒(赤ワイン)といった具合にです。

* * * *

「有征無戦」 (ゆうせいむせん)

90 2014・7・16

戦場へ兵を送っても、犠牲者がでるような作戦をおこなわないことが「有征無戦」(征有れど戦うことなし。『漢書「嚴助伝」』など)です。大義によって立つ討伐であれば、戦闘をおこなわなくとも制圧して勝利を得ることができるといいます。

殷の紂王の軍が「前徒倒戈」(前面の兵が武器を逆に倒す)して周の同盟軍に降った有名な「牧野」の戦いは「不戦にして勝つ」(不戦而勝)ことができた一例です。皇帝は臣下から上書を受けて「有征無戦」を旨として正義の兵を送るのですが、戦わずして勝つには兵士もまた和平を願う「有志之士」でなければなりません。

平和主義の「憲法」を持つ国からの軍隊として送られ、イラクの“戦場”で一兵も損なうことなく任務を遂行した「日本の自衛隊」。その稀有な国際的イメージを変容させる「閣議決定」がなされました。

平和への手段を語らず、戦場協力による抑止力という内閣の決定は、国民にも国際的にも容れるところとはならないでしょう。

「秀色可餐」（しゅうしよくかさん）

238

2017・05・17

甘い微笑み、透明感、清純、品位のある美人、食べてしまいたいような「明眸皓齒」の女性を「秀色可餐」（陸機『日出東南隅行』など）といいます。たとえば秋田のシヨップ店員でいたところを『週刊ヤングジャンプ』にスカウトされた女優で歌手でタレントでファッションモデルでインスタグラムでも人気の佐々木希（二九歳）のような人っています。

スポーツ選手はこれまで美人は条件ではなかったのですが、バレーボールやバスケットボールには美人が多くいました。それが美形を条件にして選手をあつめた強いチームが現われてコート上で人気比べになつたりしています。

「秀色可餐」は自然景観の秀麗なことや垂涎三尺の美食にもいわれます。そこで絶景と美食をウリにするレストランが流行ることになります。パリ・エッフェル塔上の、バンコク61階ビル屋上の、スイス・ミューレン雪山山頂からアイガー・メンヒ・ユングフラウほか200座の山峰が見渡せる懸崖上の、モルデイブの一望はるか碧海の上の：。

* * * *

「争分奪秒」（そうふんだつびょう）

239

2017・5・24

分秒を争う緊張した場面で用いられるのが「争分奪秒」（『晋書「陶侃伝』』など）です。緊迫したシーンから目を離せないテレビドラマ、たとえば登場人物が次々に事件を展開する『水滸伝』やその名ずばりの警察もの『争分奪秒』（香港電視台）などがありますが、日本でも東野圭吾の推理小説『ガリレオ』シリーズがテレビドラマや劇場映画になつてよく知られています。他に生鮮食品である農産物や魚類の流通、消火活動といった事例もあつて、身近な生活のシーンでもよく用いられています。

喧嘩なき戦場といわれるのが病院の救急診療です。分秒を争う状況のなかで救急患者への対応や救命のための手術など「救死扶傷」（別項）の献身的なしごとを支えているのが看護師さんら。

二年に一度、五月一二日の「国際看護師の日」（ナイチンゲールの誕生日。生誕一〇〇年の一九一二年から）に顕著な功績のあつた看護師らに贈られるのがナイチンゲール記章。二〇一七年には名古屋第二赤十字病院の伊藤明子看護部長に贈られました。

次の時代に輝く人材は、だれか慧眼の人によって見い出されてきました。「十年一劍」(別項)の賈島や「二十にして心已に朽ちたり」と詠った鬼才李賀や「走馬看花」(別項)・「三春之暉」(別項)の孟郊などを見出した韓愈は、「千里の馬は常にあれども、伯樂は常にはあらず」(『雜説「第四」』から)といっています。「相」はよく監察すること。馬の良否を見分けた伯樂(孫陽)は春秋時代の秦の人で、韓愈は「伯樂は常にはあらず」といつて次の時代の逸材を見出す人の不在を嘆いています。韓愈自身は、進士科・博士弘詞科にそれぞれ三度失敗し、三度の左遷を繰り返し地方ぐらしをしています。空海や最澄が入唐したころは最初の左遷で連州陽山(広東省)にいました。

硬骨の官であり「有愛在民」を旨として生きた韓愈の扱いがそんなようすでしたから、優れた留学僧として唐に渡り、二〇年を二年で帰国した空海にとって、長安は長居するところではなかったのでしょうか。

* * * *

「老馬識途」(ろうばしきと)

62 2014・1・1

二〇一四年・平成二六年は甲午(きのえうま)。「馬」にかんする四字熟語には、すでに本稿にも「龍馬精神」「走馬看花」「伯樂相馬」があり、「馬耳東風」「快馬加鞭」「塞翁之馬」「害群之馬」など親しいものも数多くあります。

馬は路をよく覚えていて、帰りには主人が疲れたり泥酔したりして馬上で寝込んでしまっても間違えずにもどってきます。だから酒酔い運転の心配もない。「老馬識途」(『兒女英雄伝「一三回」』など)にはこんな史話が残されています。

春秋時代に斉の桓公の軍が春に遠征をし冬に帰国するという行軍で道に迷った時のこと。臣の管仲が「老馬の智は用いるべきなり」(老馬之智)と提案して老馬を放ち、その後に従って国に戻れたといいます。知識や経験の豊かな高齢者を大いに用いようということです。ちなみにこの年に六〇歳を迎える甲午生まれは、中畑清、松任谷由実、林真理子、清家篤、檀ふみ、志位和夫、安倍晋三、古舘伊知郎、片岡鶴太郎さんなどのみなさんです。

だれもがよく用いる「温故知新」(『論語「為政」』から)は「古きをたずねて新しきを知る」という読み方で知られています。

『論語』は孔子の死(前四七九年)のあと、弟子たちがまとめたものですから、「子曰く・・・」と記されていても、後人の理解による孔子の言であるとして習うことが「温故」のはじめです。「知新」は現在のありようを知ること。孔子は中原周遊の長い旅をして「知新」にもつとめています。

ですから一方で先人の知恵・古例に学びながら、一方で現実の動勢をしつかり把握する。この双方をきわめることによつてはじめて全容を理解することができ、人の師(リーダー)ともなれる(以つて師と為るべし)と説いています。

書齋にもつて文献を漁つていては古いことしかわからない、現実のみに執着しては現実の姿をつかむことしかできない。「古い時代のことをたずねて今を知る手だてとする」と読むのは、書齋派の学者にとつて都合のいい解釈なのです。

* * * *

「不争之徳」(ふそうしとく)

29 2013・5・15

「不争」(争わず)でおわる書物をご存じですか。『老子』です。

何もしないで「不争」(争わず)ではなく、「為而不争」(なして争わず)です。争いが常態であった不幸な時代(周朝末期)に生きた老子は「不争之徳」(六八章)をこう記しています。

まず「善く士たる者は武ならず」(ほんとうの武人は武力をかざしたりしない)、「善く戦う者は怒らず」(ほんとうに戦う者は怒りによつてはしない)、怒りは怨みを残すからです。さらに「善く敵に勝つ者は与(くみ)せず」(ほんとうに敵に勝つ者は四つに組んで完敗させたりしない)、そして「善く人を用いる者は之がために下となる」(ほんとうに人を納得させる者は相手の言い分を聞く)といえます。「武ばらず、怒らず、完膚なきまでにせず、上手に出ず」、これが「不争之徳」。

「不争(平和)」の側から掲げた「憲法」は、世紀を越え、世代を重ねて守るべきものであり、「不争之徳」をもつて崩す側の営為を論駁せねばならないでしょう。

種から芽が出たものの苗の育ちが遅い。そこで早く育てようとひっぱって伸ばして枯らしてしまった農民の話が『孟子「公孫丑章句」』に記されています。いくら周辺から蔑視されていた宋国でも、農民がそんな愚かなはずはないのですが、孟先生は「助けて長ぜしむることなかれ」としてこの宋国の農民の失敗例を引いています。

「拔苗助長」または「揠(あつ)苗助長」としてよく知られている故事成語です。ですから本来、「助長」には良い成果を求めて能力を伸ばす意味合いはないようです。次世代の優れた才能を育てようと「助長」して枯らしてしまうことは、ひとつの金メダルの陰の“英才教育”として知られるところ。

いま中国でも庶民の間で就学前三年の幼児園教育が問題になっています。社会常識や活動能力や情操教育をおろそかにして、文字を書かせたり算数の力をつけさせたりする就学前教育が両親の希望で優先される傾向があるからです。そこで「拔苗助長」がよく用いられます。

* * * *

「羊続懸魚」(ようぞくけんぎよ)

二〇一五年の干支は乙未(おつび・きのとひつじ)。羊にちなむ四字熟語としては「羊頭狗肉」「羊腸九曲」「亡羊補牢」「多岐亡羊」などが知られますが、ここでは「羊続懸魚」(『後漢書「羊続伝」』より)を取り上げておきます。

羊続というのは後漢時代の官吏の名です。彼が南陽の太守になったばかりのころ、属下の者が当地の特産ですと行って白河でとれた鯉を献じてきました。羊続が断つたのにむりやり置いていったので、屋外の柱に懸けておきました。この人物がさらに大きな鯉を持ってやってきたとき、羊続は屋外の柱で干し魚になった鯉を見せて、持って帰るよういったのです。この話が伝わって「懸魚太守」と呼ばれ、以降だれも礼品を持ってこなくなり、羊家の蔵の中はふとんと破れた衣類と少量の塩麦だけだったといえます。

「羊続懸魚」は賄賂を受けない清廉な官吏のこと。反腐敗闘争のつづく中国では、未年を迎えてこの成語を思い出したくない官吏もいるのでしょう。

「勁草」はしなやかに勁（つよ）い草のこと。平時は知られることがないのですが、猛烈な風が吹き荒れたあとに、折れたり吹き飛ばされたりしなかった勁い草が知られるということ。思いもよらぬ困難な事情に遭遇したあとに、しつかりした立場を保って意志堅固に過ごしていた人が知られることにいわれます。

後漢王朝を建てた劉秀（光武帝）は、兵を率いて黄河を渡って河北に攻め入ったとき、故郷の潁川から従ってきた数十人がみな去ってしまったのに王覇が残っているのを知ります。そこで「子独り留まる。努力せよ、疾風は勁草を知らしめん」といって励ましました。

劉秀はのち皇帝となり、王覇はのち北辺を平定して淮陵公に封じられています。「疾風勁草」（『後漢書「王覇伝」から）の典故です。

勁草書房の名はここから。未曾有の嵐だった先の戦争のあと、「信念をもつて良書の出版を」との願いをこめて、安倍能成学習院長が命名したものです。

* * * *

世に皇帝ともなれば、晩年には職務に倦んだり女色に溺れたりするものですが、後漢を興した光武帝劉秀は、「日復一日」（『後漢書「光武帝紀」から）の勤務を怠ることなく生涯を終えました。

「日また一日」はなにげないことばですが、事業をなしとげたあとその継続に意をつくすことにいます。劉秀は深淵に臨むがごとく（如臨深淵）、薄氷を履むがごとく（如履薄氷）にすごして、皇太子の荘が勤勞のすぎるのをみて「優游自寧」を求めたときにも、「これを楽しんでいるのだから疲れはしないのだよ」といって聞かれました。

西暦五七年二月初めに洛陽で六二歳で崩じましたが、その正月に東夷倭奴国王の遣使の奉獻を受けて「漢委奴国王」の金印を贈ってねぎらったのが外交上の最後の務めとなりました。日中交流の事績が、戦戦兢兢として「日また一日」を精勤にまっとうした皇帝劉秀の姿とともに残ったのは歴史の幸運でした。

四月の新年度を迎えて、わが国の企業では「入社式」をおこない、社長が新入社員に、誇りと覚悟をもって社業に当たるとするよう訓示を述べるのが通例です。事業を達成するために人材を求める真情の厚いことを「三顧茅(草)廬」といいます。

三国時代に、劉備が遠路を三度たずねて臥龍諸葛亮を得た故事からですが、いま経済発展のさなかにある中国の企業が、人材を確保するかまえて用いています。求められる側も、それに応えて能力を高めて対応することになります。

人材を求める故事としては、口にしていた食物を吐いて対応した「周公吐哺」や蕭何の「月下に韓信を追う」などがありますが、やはり劉備なきあと孔明がしたためた「出師表」に、「臣を草廬の中に三顧し、臣に諮るに当世の事を以つてす」という真情が、求められる側の胸を打つのでしよう。

三顧の佳話に納得していたら、故地襄陽の「三顧茅廬」像の孔明の顔にマジックでいたずらをした事件が報道されました。

* * * *

「好好先生」(こうこうせんせい)

22 2013・3・27

ここは中国音で「好好(ハオハオ)先生」と読むことにします。

「好好先生」と称された司馬徽(後漢末の隠士・水鏡)は、人の長所はもちろん短所にも、善にも悪にも、美にも醜にもどちらにも「好(ハオ)」と応えていました。

「好(ハオ)」といいながらも「不好(プーハオ)」を伝えるニュアンスを兼ね備えていたからでしょう。無類の善人です。のちにも司馬徽を超える「大好(ダーハオ)先生」はいないようです。(劉義慶『世説新語「言語」』など)

わが子の死を悲しんで伝える人にさえ「大好(ダーハオ)」と応えて納得されたのですが、さすがに妻が聞きとがめてたしなめたところ、徽はすかさず、「あなたの言うことは大好(ダーハオ)です」と妻を誉めたといえます。

日本語でなら「あ、そう」でしょうか。

昭和天皇は優しい「あ、そう」によってすべてのニュアンスを伝えていましたから「好好天皇」といえるのでしよう。

「単刀赴会」(たんとうふかい)

233 2017・04・12

「単刀」は一刀あるいは一人のこと。「単刀赴会」は単身で時には命がけで相手の陣営へ交渉に赴くこと。英傑が覇を争った三国時代にこのことばを代表する人物は蜀の関羽です。『三国演義「六六回」』では「関」の字の紅旗をかかげた船で乗りこみ、腰刀を帯びた八、九人の大漢に護らせて呉の魯肅との交渉に臨んだ関羽を「単刀赴会」と記しています。

アメリカへ乗り込んでトランプ大統領との会に臨んだ習近平主席もそうですが、全人代で国内の難題の討議を終えた三月一日、人民大会堂で待ち構える千人近い内外のメディアに年一回の記者招待会で応対する李克強総理の姿にもみるることができます。日経新聞記者の中国語をほめて笑いを誘うなど余裕を見せていました。

この「単刀赴会」や激痛に耐える「言笑自若」(別項)の関羽を思えば、少々のピンチにあわてることもないでしょう。一人で資料をかかえて交渉に赴くときに支えてくれるに違いありません。困難を克服してくれるたのもしい四字熟語です。

* * * *

「世外桃源」(せがいとうげん)

179 2016・3・30

桃花はすでに「桃李不言」や「柳暗花明」で登場しましたが、本命の「桃源郷」に触れないわけにいきません。

理想郷としての「桃源」です。東晋の陶淵明の『桃花源記』に描かれた世に隔絶して存在する小村で、「世外桃源」(孔尚任『桃花扇「帰山」』など)と呼ばれています。おだやかな山水に囲まれ、桃の花と果実を楽しみ、農業を生業としていて、秦の騒乱を避けたあと五〇〇年余も知られずにいた。そういう小世界はいまもどこかに存在しつづけているにちがいません。

仙境「桃源郷」は湖南省常德市の桃花源がモデルとされ観光地になっています。日本の「桃源郷」といえば山梨県笛吹市でしょう。笛吹川の扇状地に日本一の「桃の里」が広がっていて、春先に桃畑は「ピンクの絨毯」となって季節を謳歌します。二〇一六年の「桃源郷春まつり」は三月二一日(祝)から四月二四日(日)まで。桃源を訪れて、わが心の桃花源を思うのは命を延べる行楽のひとつでしょう。

「波乱に富む人生」はよく使いますが、この「一波三折の人生」という言い方にメリハリがあります。

というのも、「一波三折」（毎作一波、常三過折筆。王羲之「題衛夫人筆陣圖」から）は、書聖といわれる王羲之の書の筆鋒の転換と筆勢の変化を感じさせる表現だからです。

「一波三折」は書法上のことからさらに書かれた文章やできごとの経緯が起伏に富んでいる場合や意外な展開のある場合に用いられることとなりました。

最近でも、インドネシア高速鉄道の日本（新幹線方式）と中国との受注合戦に「一波三折」があつて日本が敗れたこと、ロシアのプーチン大統領の訪日が「一波三折」の末に延期になったこと、中国の株式市場が「一波三折」のあと暴落する局面があつてもなお上昇機運はつづくとする憶測などがあります。「一帆風順」とはいかない世の中ですから、いまでもよくさまざまな場面で用いられることばです。

* * * *

「臨池学書」（りんちがくしよ）

210 2016・11・2

書聖といわれる王羲之の有名な「蘭亭序」（行書）は、唐の太宗がみずからの昭陵に副葬させたので原蹟は失われましたが、臨摸された歴代の逸品のうち、わが国の博物館・美術館・個人が秘蔵する作品も多く残されています。

王羲之が草書の目標としたのが後漢時代の張芝です。張芝は勤めて池に臨んで書の力を養い池水が墨で真つ黒になったため、「臨池学書、池水尽墨」がいわれました（晋衛恒『四体書勢』から）。張芝は家中の衣帛すべてに字を書き、それを洗つて再び使つたといえます。

どうやら池で洗つたのは筆硯ばかりではなかったようです。羲之もそれにならつたことから「臨池学書」がいわれ、その古跡は「墨池」と呼ばれたのですが、いま紹興市の「蘭亭」には池は「鵝池」だけ。しかし羲之が臨池して刻苦して書を学び、筆硯を洗つた姿を後人が慕つて、「臨池」というと書論や書学など書に関する学問を指すようになっていきます。

「牛角掛書」(ぎゆうかくかいしよ)

67 2014・2・5

「牛角に書を掛く」というのは、ゆったりと歩を運ぶ牛にまたがって、その角に書を掛けて道すがら読んだという隋代の李密の故事からいわれます。

李密は煬帝に警戒されて遠ざけられ、後に唐を建てる李淵の下に居ることに甘んじずに、「中原逐鹿」(天下争覇のこと)に敗れますが、道を行きながら牛角に掛けた『漢書』を読んだ姿は、瞬時を惜しんで学問に励む好事例とされています。角を使われ、耳元で「項羽伝」を読み聞かされた牛のほうは迷惑だったことでしょう。

(『新唐書「李密伝」』から)

この成語をとりあげたのは、移動途中の電車のなかで瞬時を惜しんでスマホをあやつる若者たちの姿と重なるからです。

学校で得た知識ではなく、移動中に得た計り知れない質と量の知識によって、国境をこえた電子世界の知識人が時代を動かすことになるだろうと推察されるからです。想像を絶する未来の姿に、牛のように喘ぐばかり。さりとて将来「牛角掛書」の意味合いが解らなくなることもないでしょう。

* * * *

「乾坤一擲」(けんこんいつてき)

15 2013・2・6

大地のその一角に立つと天地をとよます関の声が聞こえてきます。北には足がすくむような崖下を黄河がとうとうと東流し、右岸を切り割って幅三〇〇mほどの深い鴻溝(広武澗とも)が行く手を拒んでいます。かつて項羽の楚軍と劉邦の漢軍がここで対峙したもののともに渡れず、両岸から関の声をあげ、挑み合っただけの鴻溝を境に禹域を東西に二分して別れました。漢霸王城と呼ばれています。

のちに秦斗(泰山北斗)と呼ばれた唐の韓愈は、軍を率いてここに至り、「一擲して乾坤を賭す」(「過鴻溝」から)と詠じて出陣しています。見はるかす対岸に故里の孟州に連なる青山が見えたかどうか。「乾坤」は天と地。「乾坤一擲」は、ひとたびサイを投じて天か地か、賭けに出ること。

人生をかける事業に挑むに際して、天にむかって「乾坤一擲！」と叫んでみる。人を奮い立たせて、勝利する力を得ることができるにちがいありません。

「成人の日」（二月第二月曜）の成人式のあとの二次会の呑み比べで、酒量に自信をもった新成人もいたことでしょう。中国の文人と酒にかんする四字熟語となれば、この「斗酒百篇」（杜甫「飲中八仙歌」から）に勝るものではありません。

李白は酒を一斗飲んで詩を百篇つくったという杜甫の詩「李白一斗詩百篇、長安市上酒家眠」からですが、酒を飲み詩作に興じ市内の酒家で眠ったばかりか天子のお呼びにも応じず「自称臣是酒中仙」というありさま。ですから玄宗の支えはあったものの宦官の高力士と楊貴妃にうとまれて長安を追われ東都（洛陽）にきます。

李白はここで科擧に受からず故郷で鬱々としてすごしていた杜甫と出会って意気投合し、酒を飲み詩を詠じ、後に被（掛け布団）をともしする旅をしました。李杜の出会いはこのときだけで、李白四四歳、杜甫三三歳のことでした。杜甫の「斗酒百篇」は実感からで、酒の詩の数三百では酒仙李白に勝りますが、呑みっぷりも詩作の量も李白には敵わなかったのでしょう。

* * * *

「一葉知秋」（いちようちしゅう）

4 2012・11・21

秋が深まるとこの四字熟語を思います。ひとひらの落葉をみて静かにすすむ秋の深まりを知ることを「一葉知秋」（魏慶之『詩人玉屑』など）といいます。有名なのは唐人の詩としての「一葉落ちて天下の秋を知る」で、微細な事象から大勢や結末を感じすることに例えられます。片々重なって金黄色のじゅうたんになったイチヨウの樹下のようすも「一葉知秋」で、こちらは風に舞い車に舞い、子どもたちが戯れる晩秋の明るい情景です。一葉には「一葉蔽目」があつて、一枚で視界を蔽ってしまうことから、「一葉目を蔽いて、泰山を見ず」となり、局部や少時の現象に惑わされ全局や本質を見誤ることにいいいます。

樋口一葉（本名奈津）の「一葉」（別説あり）は、長江を「葦一葉」に乗ってわたった達磨が、「面壁九年」の修行で「おあし（足）」の用をなくしたいわれから。おかねに縁のなかった自分に重ねた一葉が、ひとひらの五千円札になった感想を知りたいところです。

『論語』しか読まない人物といわれ、北宋草創期の宰相趙普は、政治リーダーとして学問の狭さを云々されていました。そのことを太宗趙匡義に聞かれたとき、「その半を以って太祖（趙匡胤）を輔けて天下を定め（定天下）、いまその半を以って陛下を輔けて太平を致さん（致天下）」と答えました（羅大経『鶴林玉露卷七』から）。その後、「半部論語治天下」として広く用いられています。

近代日本でこの読み方をしたのが渋沢栄一でした。

実業に就くことを嘆く友人に、「半部の論語」（『論語と算盤』）の読み方で、「半部で身を修め、半部で実業界の弊風を正す」と説明しています。

いま中国でも経済人（高級管理職）の渋沢型の「半部の論語」読みが盛んになっています。経済人の倫理性が問われているからで、わが国も銀行の暴力団貸付、有名ホテルの食品偽称など、経済人の倫理性の低落が目立ちます。創業時に立ち返って、「半部論語」を座右にするときのようです。

* * * *

「天上人間」（てんじょうじんかん）

236 2017・05・03

「流水落花、春去りゆきぬ、天上人間」（『浪淘沙令』から）と、宋の汴京（いまの開封）に囚われの身となっていた南唐の後主李煜（りいく）は、生きて再び会うことのかなわぬ故地の人びとや風物への思いを、行く春を前にして詠っています。「別るときは容易に、まみゆるときは難し」と、いかんともしがたい永別の悲しみを見据えています。

また安祿山軍に追われて蜀に落ちのびて行く途中で、玄宗によって死を賜った楊貴妃は、「天上人間、相見ゆるをえん」（白居易「長恨歌」から）と、永別に際して、通じることのできない「天上人間」での再会を約して命絶えています。

天上と人間、この隔絶したふたつの世界をつなぐことはむずかしい。そんなつきつめた別離の情を伝えてきた成語の意味を崩壊させてしまっているのが、逢いがたい人に逢える場として北京や上海にできた「天上人間」という高級ナイトクラブです。ひととき傍らにいただけで五〇〇〇元という名妓まで現われて。

「名落孫山」（めいらくそんさん）

198 2016・8・10

宋代の才子で、「滑稽才子」とあだ名された孫山が同郷の子とともに郡都での「挙人」の考試に参加したときのこと。

終わって合格者名の発表があつて、どんじり（倒数第一名）にやっと孫山の名があり、しかし同郷の子の名はありませんでした。先に戻った孫山に郷里の人がようすを聞きます。そこで孫山は「解名の尽きる所に孫山の名があり、彼の名はさらに孫山の外にありました」（解名尽処是孫山、賢郎更在孫山外）と報告します。

以後、この話が伝わって、不合格だったことを「名落孫山」（范公偁『過庭録「第六九節」』から）というようになりました。科挙は秀才、挙人、進士とありますから、挙人レベルでどんじりだった孫山のその後のようすは本稿の外でのこと。

いまでも考試に不合格（落榜生）であったことに「名落孫山」がいわれますが、そのほかにたとえば西北地区の中心であった歴史文化名城の西安が、「全国六大城市群」から外されたことにも「名落孫山」がいわれます。

* * * *

「一琴一鶴」（いっきんいっかく）

195 2016・7・20

古琴を収めた布袋と白鶴を放した竹簾を馬の背の両辺に荷駄として積んで、宋代の趙抃（ちようべん）は、任地の蜀（成都）へ向かったそうです。任地へ帯同したのが琴と鶴だけ。それが行装のすべてというのは、いささか際立ちすぎます。

古来、ふたつとも文人の高雅不俗のシンボルとはいえ、趙抃の「一琴一鶴」（沈括『夢溪筆談「卷九」』など）は噂になり、神宗の耳にも入りましたが、帝は叛意の行為とせず、上任の「行装簡少」のすがたを賛賞した上で「精兵に奪い取りにいかせよう」と伝えたといえます。趙抃の剛直ぶりは「鉄面御史」と呼ばれたことで知られます。

竹林七賢のひとりで、秘曲「広陵散」を弾き終えて刑場に臨んだという琴の名手嵇康と「鷄群一鶴」といわれた子の嵇紹の親子の姿が趙抃の行装と重なるのは思い入れの類でしょうか。趙抃の「一琴一鶴」が有名で、「為官清廉」が含意になりましたが、先立つ唐代には官に付かず隠遁した意味合いで用いられていたようです。

自然

「陽春白雪」（ようしゅんはくせつ）

60 2013・12・18

北陸に大雪。（二〇一三年）

ことしも本格的な冬のおとずれ。昨年の一二月一〇日には、山中伸弥教授の隣に文学賞の莫言氏と、雪のストックホルムのノーベル賞晩さん会会場には日中の名士が並びました。

「陽春白雪」というこの美しい四字熟語を、莫言氏はお好きなようです。恒例のストックホルム大学でのスピーチで、中国文学の現状を問われて、「陽春白雪と下里巴人」（楚辞「宋玉対楚王問」から）と行って会場の笑声と掌声を誘っています。通訳には意味が分からず、自ら「高級な白酒を好む人もいれば普通の白酒を好む人もいる。それぞれ味わいがある」と受容の多様化を補足していました。

「陽春白雪」は高尚な楚の音曲名で、一方の卑俗な音曲が「下里巴人」（巴蜀のひなびた里人）。「下里巴人」のほうは数千人が和して歌うのに「陽春白雪」は数十人。莫言氏には作品がどちらにも受け入れられている現状へのとまどいもみられます。

* * * *

「筆下春風」（ひつかしゅんぷう）

227 2017・3・1

パソコンやスマホをひねもす叩いているみなさんに聞いてみたい。

杜甫がいう「筆掃千軍」や韓愈がいう「筆力扛（こう）鼎」のように、筆陣で千人の軍を一掃したり、筆力で鼎を扛（あ）げたりできるのだという筆力にかけた気魄や雄大な発想には、もはや実感がもてないのではないのでしょうか。

新聞記者は筆誅を加える記事をパソコンで叩く。筆を用いずに筆鋒鋭い記事を書く。文戦が命運を決するとき、西柏坡新華社（河北省石家荘市）で巨筆をふるったのは毛沢東自身でした。以来、中国の新聞には「筆掃千軍」の使命があるのです。

この項はやや春めてきた空気を察して、「筆下春風」（王庭珪『盧溪集』題宣和御画』など）でさらりといきたい。自然の春より先に筆の下に春風をしのばせることならできそうです。李賀がいう「筆補造化」です。いましばらくすれば「筆頭生花」が実感できる季節がやってきます。筆頭といても力があるのは筆頭株主くらいで、前頭筆頭となると角力があるのかないのか。「筆底春風」ともいいます。

新年（二〇一五年）を迎えて、どこの企業も団体も思い新たに一年の活動を始めますが、春がめぐってきて大地が温まる「春回大地」（李昭玘『楽静居士集』道中書懷三首』など）には、陽暦一月にはまだ実感がありません。

わが国でも一月一日を小正月と称して「成人の日」の祝日に当てていましたが、これもハッピーマンデーに移って、いまや何事もない日となっています。正月飾りをまとめて焼却日とする所はあるようですが。

少なくともなりましたが、一月一日を豊作を祈る祭事として、とんど焼き（どんと焼き）や左義長が各地に残されていて、関東では大磯の左義長が有名です。

陰暦では新年の初日が春節（月齢零、二月一九日）で、それから迎える最初の満月に農家が明かりをともし豊作を祈るのが「元宵節」（ことしは三月五日）で、陰暦での農作業はじめの大切な行事です。台湾ではランタン・フェスティバルが盛んで、「平溪天燈節」は満月の夜の幻想的なランタン飛ばしが人気になっています。

* * * *

「臘尽春回」（ろうじんしゅんかい）

222 2017・1・25

「臘」は臘月で農暦最後の十二月のこと。寒冷な冬の季節が終わって温暖な春の季節がまた回ってくるのが「臘尽春回」（孫道絢「菩薩蛮・梅」など）です。春節（二〇一七年は一月二八日）の祝いことばのひとつ。

梅が咲き初めたり、氷雪が融けだしたり、佳節の訪れを思わせます。

温暖な春にスムーズに回ってくればいいのですが、「臘尽冬残」となるとなお厳しさがつづくことになります。さらには春など訪れずに骨を刺すような「臘月寒風」の年もあります。

そんななかで暮らす人びと。貧困戸を少しでも支援をしようという慰問活動が春節を前にして各地各所でおこなわれています。李克強首相は、今年は雲南の山奥の貧困な小村をたずねて、車座になって村民の話に耳を傾けて激励し、お正月用品を届けて回っています。

臘梅は寒と闘いつつ花開く屈強な姿が愛でられて歴代の詩人に詠われています。

「三春」は孟春、仲春、季春の三カ月のこと。「三春之暉」は春の三カ月の暖かい陽光のこと。長い旅に出る子どもが着る衣服（游子身上の衣）を、「立派になって帰っておくれ」という思いを込めてひと針ひと針と縫う母の愛を「三春之暉」にたとえていきます。暖かさではこれに過ぎる衣はないでしょう。手中に糸を操っている母の恩にどうやって報いればいいのだろう。

孟郊のこの詩「游子吟」を口ずさみながら、中国の子どもたちは自らの出立のことを思うのです。

父の恩については、李紳の詩「憫農」にきわまります。こちらは日中の強い陽光をあびながら、穀物をつくる畑の土に汗を滴らせて鋤をあつかう父。ひと粒ひと粒はみなその辛苦の成果「粒粒辛苦」であることを思うのです。

「游子吟」も「憫農」も、ともに中国の子どもたちがそらんじている唐詩であり、「三春之暉」も「粒粒辛苦」もともに親しい四字熟語です。

* * * *

「年年歳歳」（ねんねんさいさい）

23 2013・4・3

二〇一三年は例年の「サクラ前線」もなく東北を除いていっせいにサクラが開花。東京・上野公園も三月二四日には高知などと同時に満開を迎えて大賑わいに。「3・11大災害」から二年、アベノミクス効果もいわれて浮かれすぎという評も。

ところで「年年歳歳花相似たり、歳歳年年人同じからず」（劉奇夷「代悲白頭翁」から）の花は桜ではなく、唐の都洛陽の城東に咲き誇った桃李でした。

花は年々変わりなく咲くけれど、むかし「紅顔の美少年」だった自分も、いまは白頭の翁に変わってしまった、と遠い日に思いを馳せて「人同じからず」と時の過ぎゆきを省みているのです。もちろん花の下に集う人びとも年々変わっていきます。

実は「花も同じからず」で、いま「花城」といわれる洛陽の春に咲き誇るのは大輪の牡丹です。四月中旬の「牡丹花会」には全土から花見客が訪れています。

わが国では春の人事異動や入学・入社式に頃合いのあいさつとしてよく引用されています。

春には花が咲き、秋には実が熟れる。

「春華秋実」（『顔氏家訓』三卷・勉学』など）は成長と成熟の経過を示しています。自然にといいますが、いい実にするために植物も必死で務めているのです。人の世にも「春生夏長、秋收冬蔵」がいわれて、司馬遷は『史記』「太子公自序」に四時での順逆の要を説いています。

学問・芸術・事業のはじめに当たって、秋での結実はず素からの努力のたまものであることが強調されます。そして成果の秋には、芸術分野では「春華秋実展覧（展演）」がみられます。事業では創設何年かの記念日での「春華秋実」がいわれます。

日中の文化交流でもよく用いられます。友好都市では明石市が無錫市から友好記念として「春華秋実」旗を贈られています（二〇〇一年の二〇周年）が、民間の投資・貿易による秋実はお先のこと、務めなければ時だけが流れて成果のない「春来秋去」や「春生秋殺」ということになります。

* * * *

「鶯歌燕舞」（おうかえんぶ）

132 2015・5・6

ウグイスのさえずりとツバメの舞いは、生きものが新たに生まれ育つ春の温潤な陽気を代表する情景です。唐の劉長卿は「鶯啼燕語報新年」（賦得 題作春思）とツバメの鳴き声を聞いていますが、宋の蘇軾は「燕舞鶯啼春日長」（東坡集・七）とツバメの舞いを見えています。春の色鮮やかな「桃紅柳緑」には煙雨もまたよしで、桃紅に鶯、柳緑に燕は、詩情が生まれ画意が動く風景です。

中国革命の建設期に「鶯歌燕舞」は勃興する明るい景象として詠われています。毛沢東主席の「水調歌頭 重上井冈山」詞にも三八年ぶりに訪れた井冈山で、変わらぬ美景として「到处鶯歌燕舞」と出合っています。

時代かわって習近平主席は、党幹部の民主生活のありようについて、鶯歌燕舞的であることに自省を促しています。

武漢出身の黄鶯黄燕さんという双子姉妹が留学生として来日し、NHKの中国語放送や古筝のデュエットで活躍して、「鶯歌燕舞」で人気になりました。

ほどよい「夏雨」は大地に潤いをもたらす天恵ですが、ことし（二〇一四年）は各地に豪雨の被害をもたらしました。

本来は「春風風人、夏雨雨人」（劉向『説苑「貴徳』から）と合わせて使われて、春風は人に温かさをつたえ、夏雨は人に潤いをもたらすということから、「春風夏雨」ともいいます。丁寧な教えを受けたり援助されて心からの感謝をしたいときに用いられます。

齊の宰相管仲は「そうありがたいが、できないことだ」（『説苑「貴徳』』）といっていますから軽くは使えないようですが、夏休暇を利用して農村に支援に行く学生の活動もそういうようですから、夏休みを利用して東北の被災地にはいり、こつこつと復旧事業の手伝いをしている学生の活動は「夏雨雨人」といっていいでしょう。八月夏雨といえ、広島、長崎の「黒い雨」が思い浮かびます。直後の雨による放射能被曝は福島の大地上にも継続している問題です。

* * * *

「随車夏雨」（ずいしやかう）

194 2016・7・13

官吏が訪れることによって民衆の憂いを解く仁政を「随車夏雨」（『芸文類聚巻五十一「職官部六・刺史」』から）といえます。

後漢末のころ、百里嵩が徐州刺史（州の長官）であったとき、清廉でよく民情視察をおこない、百姓の疾苦の解消を怠らなかつたのですが、ある年の夏、干天がつづいて穀物の苗は枯れ赤土が剥き出しになりました。特に州境の山間部がひどく、農民から解決を求められて、百里嵩は車で視察に向かいます。

車の巡る先々で「感天動地」、大雨がふつて穀物の苗が生き返り、人びとは「刺史雨」と呼んで彼を讃えたといえます。「随車甘雨」ともいい、甘雨はやや神がかりですが、常に地域住民の安寧を願い、民と憂いを分かち合つて難を解く精神が百里嵩にあったことを伝えて「随車夏雨」の成語が残ることになったのでしよう。故里封丘の墓所の傍らに碑を立てて、後人はこの事績をいまに伝えていきます。

山間部に車を入れなかつた都知事のあつたことを合わせ思いつつこの一稿を。

「平分秋色」（へいぶんしゅうしよく）

48 2013・9・25

昼夜がちょうど二分される秋分のころの穏やかな景観が「平分秋色」（李朴「中秋」など）です。

「平分」は収穫した成果を平等に分け合って得ることに通じます。丹精した農作物をみんなで収穫する秋であり、のちには農業だけではなく、商業上の利益や声望などを分け合って、一半を得ることもいうようになりました。

先人の残したさまざまな遺産を収蔵する博物館同士が、お互いの優れた収蔵品を出し合って展覧会を催すのも「平分秋色」。またサッカー戦などで激しく勝利を争いながら引き分けた熱闘を讃えあつての「平分秋色」。ちかごろは宴を盛り上げる白酒と紅酒（葡萄酒）の消費量が「平分秋色」になりつつあるといえます。

なにより平和の下での友好交流。わが国は先行して得た技術や人材や資金を投入して、アジア途上諸国の人びとの暮らしの近代化に貢献しています。アジア各地でその成果が共有されている姿は、わが国が誇っている「平分秋色」の景観です。

* * * *

「秋収冬蔵」（しゅうしゅうとうぞう）

162 2015・12・2

秋に豊作だった農作物を収穫して冬に収蔵し、次の一年に備えること。

収穫が豊かであれば、翌年までは飢餓の心配がなく日々の暮らしに憂慮がないことから、事業が筋道どおりに発展して成果を得ることができる姿にいます。

司馬遷は、「春生夏長、秋収冬蔵」（『史記「太史公自序」』から）こそが天道の大道であると述べながら、実際には善人の伯夷叔斉が餓死をし、悪党の盜跖が長寿を全うしたのはどうしてなのか。歴史を知りつくした司馬遷は、「天道是か非か」という悲痛にも似た疑問を人間と人類史に投げかけています。

「青黄不接」というのは、保存しておいた穀物（黄）を食べ尽くしたのに、次の収穫がまだ得られない（青）ことをいいます。天災で不作の場合もありますが、税の取り立てが厳しい場合もあるし、兵乱によって持ち去られるという人禍によることもあります。こうなるとは人民の暮らしは赤信号です。不況の影響でしごとや収入が減り、年々に税が増えて「青黄接せず」という赤字の家庭が増えたいへんです。

「雪中高士」（せつちゆうこうし）

16 2013・2・13

梅は寒中に花を咲かせます。雪中の梅の木を高潔の士に見立てて「雪中高士」(『高
青邱詩集「梅花』から)といます。

ご存じ、松竹梅を「歳寒三友」と呼ぶのは、多くの植物が厳冬のさなかに息をひ
そめても、松と竹は姿あせずに過ごし、梅は寒中に花を咲かせるからで、三品の格
は日中ともに高位の松から梅にいたりますが、甲乙は付けがたいところです。

「歳寒三友」といえば詩画はもちろん、磁器や織物の意匠としても好まれて、だれ
もが心を静かに支えてくれる親しい三友を持って暮らしています。雪中の梅の木は
たたずまいもよく花も香もよく、寒に耐えて命を保つ風情は節を持する高士と呼ぶ
にふさわしい。

作者高啓と花といえば、よく吟じられる「水を渡り復た水を渡る、花を看還た花
を看る」(『胡隱君を尋ぬ』から)が有名ですが、この花は春風江上の路でのものな
ので、江南の春の桃李のようです。

* * * *

「雪中送炭」（せつちゆうそうたん）

169 2016・1・20

「雪中送炭」（雪中に炭を送る。徳行禅師『四字経「甲乙』など）といえば、困つ
ている人に救済の手を差し伸べること。雪の中を車に載せた炭が行く情景は色の対
比も鮮やかで、すなおに人の気持ちに温かくしてくれます。骨炭と豆炭が子どもた
ちのこしらえる雪ダルマの目と鼻と口になった時代がありました。生活感のある頼
りがいのある顔つきでした。子どもたちは雪ダルマをつくるのに炭や豆炭が手に入
らなくなつて目鼻立ちはどうなったのでしょうか。

「雪中高士」（別項）といえば、梅の古木を君子に見たてたもの。雪中の梅はたたず
まいよく寒に耐えて、静かに香りのいい花をつけて、節を保持する高士と呼ぶにふ
さわしい。

「3・11大震災」直後のTVニュースで、どこだったでしょう。混乱する役所の
事務室の壁に墨も鮮やかな「雪中送炭」の張り紙があったことを思い出します。「雪
中送炭」と「雪中高士」とは、雪国が生んだ品格のある心強い四字熟語です。

NHKの連続ドラマ「梅ちゃん先生」で有名になったのが、松、竹、梅の三つを指す「歳寒三友」（王質『雪山集「送鄭德帰呉中」』など）です。姉の松子、兄の竹夫そして梅子という名前を、父の建造から、きびしい寒期に松と竹は枯れず梅は寒中に花を咲かせる、その姿から付けた名前であると知らされて得心するシーンがありました。

人生の厳しい時期に三人の頼れる友人がいれば心強い。唐の白居易は「琴・詩・酒」を三友としています。

その詩を読んだ菅原道真は、三友のうち琴と酒は「交情浅し好去（さよなら）だ」といい、詩だけが「独り留まる真の死友」（読楽天「北窓三友」詩）と詠じて生涯の友としています。主の道真を慕って京から太宰府へ飛んだ「飛梅」が天満宮に残されていて、春先になって東風（こち）が吹くと白い花を咲かせています。梅ならではの言い伝えといえるでしょう。

* * * *

「一陽復始」（いちようふくし）

8 2012・12・19

四季のめぐりの中で、陰気が尽きる日が冬至（十二月二日）で、それを過ぎると陽気がまた生じて春へとむかいます。

「一陽復始」（李雨堂『万花楼楊包狄演義「卷三」』など）や「一陽来復」は、陰陽の二気が陰から陽に返ることから、暗から明への転回をいいます。

この反対が「夏至」で、双方の中間に「春分」と「秋分」があつて、その間を割って「立春・立夏・立秋・立冬」があつて二至二分四立が八節。その間を三つに割って「二十四節季」としています。これは古代の黄河流域で成立したことから、わが国の季節感とずれたり実感のない呼び名も含まれています。

そこで日本気象協会は、わが国にふさわしい「二十四節季」を提案するために「季節のことば」を募集（二月二日まで）しています。また二〇一二年二月二日はマヤ暦最後の日で、「人類滅亡」の予言の日とされてきましたが、「暦の循環における区切り」と科学的に解釈されて、無事に通過するようです。

中国の「土中」には「土のなか」だけでなく「四方の土地の中央」の意味があります。周公旦が洛邑（いまの洛陽市）を「土中」として京師（都）に立て諸侯を四方に封じたことから地勢的・歴史的な中国の版図が意識されてきました。

都が長安（西安）、南京、北京、東京（開封）と移つても、皇帝は常に「中原逐鹿」の勝利者でした。ですから「天涯海角」（曾鞏『北帰三首「其一」』など）は版図の果ての地のこと。

南方では海南島が「天涯海角」の地で、宋代に海南島に左遷された蘇軾は、戻るときに「天容海色」と詠じています。雲散つて月明るい「天容」も「海色」も、ともに任地でのしごとの潔白であることの証しになっています。

いま海南島に「天涯海角遊覧区」があつて観光地になっています。突兀として立ち並ぶ巨石のうちに天涯と海角と呼ばれる巨石があつて、仇敵だった家族の反対を押し切つた若いふたりの愛が化したと伝えられています。

* * * *

「樂天知命」（らくてんちめい）

2 2012・11・7

「天」は自然のすがたで、「樂天」は自然のすがたに素直にしたがうこと。「命」は生きる筋道で、「知命」は生きる筋道を知ること。自然のうちに見えてくる良き筋道に率直にしたがって生きることが「樂天知命」（『周易「系辞上」』など）です。

後漢を興した光武帝劉秀は、晩年を「樂此不疲」（これを樂しんで疲れず）として過ごしました。皇帝になるといはたから見るとたいへんな事業でも、当人が愛好してすることであれば疲れないということ。なすべき道を知った人の「樂天知命」のすがたです。

よく磨きあげた鏡は何度使つても損なわれないというのが「明鏡不疲」（明鏡は疲れず）です。磨かれた叡知をもつ優れた師匠や先輩はどしどし使おうというところ。

樂天的というのは、作為にとられずに自然のままに過ごすこと。とはいえプロ野球の試合ともなればそれだけでは勝てないようです。

夜につかの間むすばれて白昼には消えてしまう露のような男女の仲を「露水夫妻」（蘭陵笑笑生『金瓶梅詞話「十二回」』など）といいます。愛情のない一夜の性の意味につかわれては、自然のなかで露水のもつ清冽さが読み取れません。『詩経「鄭風・野有蔓草」』では、野の草のなかに露に濡れて美しい人がいる。清らかでたおやかに。邂逅して相遇う子とともによろしからん（与子偕蔵）。この露水には自由で自然な愛情が託されています。『詩経「邶風・燕燕」』では、ふたたび会えない女性を、野に遠く見えなくなるまで送ったシーンで、眼から大粒の涙を落として離別の悲痛に耐える姿を「泣涕如雨」（別項）と伝えていきます。自然な愛情の発露に納得です。自然だけれども正式でない夫妻。故あつてのそれは、時に反道徳という現実の圧力にさらされることとなります。

国家間のイギリスとEUのあいだが「露水夫妻」であったとする論調は、イギリスにはもはや帰り路はないとでもいいたいのでしょうか。

* * * *

「旧雨新知」（きゅううしんち）

遠い日の雨と近ごろの雨とが「旧雨今雨」（杜甫「秋述」から）です。

とって雨そのものことではなく、かつては秋の雨の日といえは車馬絶えず友人がよく訪れてくれたのに、いま長安への旅の途次、貧しく病に臥している身を雨を冒して訪ねてくれる友人もないと、詩人杜甫は述懐しています。連綿と降る雨、来ない友人を待つ杜甫の晩年の哀切さをかみしめるのも味のうちですが。

新しい知己を加えて、「旧雨新知」（張集馨「道咸宦海見聞録」など）となれば、新旧の友人が一堂に会するにぎわいの場をいいます。

うつつうしい雨の日、来る人を待たずに出かけて歓談するのもまた人生の味のうち。人の出会いばかりでなく、大家枯淡の作品と新進気鋭の力作とが並ぶ書画展もまた「旧雨新知」の出会いの場。

わが国特有の「梅雨（つゆ）」。関東甲信越では「梅雨入り」が六月八日ころから、「梅雨明け」は七月二日ころまで。稲の生育には恵みの雨の季節です。

「風花雪月」（ふうかせつげつ）

124 2015・3・11

「雪月花（せつげつか）」あるいは「月雪花（つきゆきはな）」は日本人の美意識の底に息づく三つの自然風物で、大伴家持や清少納言らしい歴代の詩歌人が文采を競って表現してきた素材です。

「雪月花」はノーベル文学賞の受賞記念講演で、川端康成が「美しい日本の私」と題して紹介して話題になりましたし、箏曲や歌謡曲のタイトルにもなっていますし、宝塚歌劇団の組名でも親しいもの。

中国ではもうひとつ「風」が存在として意識されて、「風花雪月」（邵雍『伊川擊壤集「序」など）が四季変化を伝える風物として詩文に織り込まれています。とい

ってわが国の風流人が風雲、風刺、風情を知らないわけではありませんが、厳選極上の優雅な旅もあって、
円安で中国からのパック旅行客が増えています。厳選極上の優雅な旅もあって、
名湯、名宿の名物料理に、春は桜、夏は祭、秋は楓（ここに風）、冬は雪の季節絶
景。そして名宿では和倉温泉の加賀屋雪月花館が総合日本一に選ばれています。

* * * *

「披星戴月」（ひせいいたいげつ）

202 2016・9・7

星の光に身をさらし月を頭上に戴く「披星戴月」（『諭世明言「卷一八」』など）
といえ、朝は暗いうちに出て夜遅くなって帰ること。昼夜分かたず外で辛苦して
働く姿をいいます。

農民なら日のあるうちは働くことでしたし、商人なら家郷を離れて「餐風宿水」
で過ごすことでした。今やどちらか片方ならともかく「披星戴月」で辛苦して働く
姿は見かけません。といってこのニュアンスの豊かな四字熟語はしっかり別の場面
で使われています。

長距離夜行列車やバスやキャンピングカーでの旅、仏像や彫刻など時代を越えて
生きる野外の芸術品、世界文化遺産、老舗の商品や店がまえ。来年の超難関の大学
受験をめざす学生、四年後の東京五輪を目標にトレーニングをはじめたスポーツ選
手。中国少数民族納世族の女性が着ける羊皮製の伝統衣装「披星戴月」は肩に日月
を担い、背に星々を負って、彼女たちの日夜の勤労ぶりを象徴しています。

「七月流火」(しちがつりゅうか)

39 2013・7・24

盛夏をむかえて、中国大陆の暑気炎熱いよいよ激しい時節の訪れとともに使われていた「七月流火」(『詩経「豳風七月」』から)に対して、本来の意味合いは「向熱」ではなく「転涼」であるとして、誤用を指摘したのは天文関係の人たちでした。

この「火」は、さそり座の α 星アンタレスのことで、旧暦六月の南天に赤く輝いて現れますが、七月になると西空に傾いて沈んでいく。これが「流火」で本来は「七月流火、九月授衣」とつないで秋涼の訪れを指すのが原義だということです。

原義はそれとして、現実の生活感に親しい意味での使用はつづいていて、誤用というなら「八月流火」をしようというのが「現代漢語」派の意見です。八月には連日、四〇度を超える重慶などでは「八月流火」が一般に通用しているようですが、さすがにメディアでは、誤用誤用と騒がれると扱いはづらいようです。

日本で用いられないのは、緯度が高いために「流火」の鮮やかさに欠けるからでしょう。

* * * *

「吉星高照」(きつせいこうしょう)

172 2016・2・10

「春節」(新月、二〇一六年は二月八日)を祝うあいさつのなかに、「吉祥如意」とともに「吉星高照」(姚雪垠『李自成「三卷」』など)があります。まったく月のない春節の夜、冴えかえった冬空に輝く三つの星を吉星(福祿寿)と呼んで、これから始まる一年の豊作と長寿と子宝への願いを懸けた古人の思いには納得です。

冬空に輝く三つの星といってもオリオン座の三つ星や冬の大三角形の星ではないようです。全天で最も明るい「狼星」(シリウス)はその一つでしょう。「狼より地に近くに大星があつて、これを南極老人星という。良く見えれば治安、見えないと兵乱が起きる」(『史記「天官書」』から)とされています。

南の地平に近く、わが国からは見えづらい全天で二番目に明るい「南極老人星」(カノープス)には健康な長寿を祈ったようです。

そんな古人の思いとは関わりなく、春節休暇(七日〜十三日)を利用した中国からの観光客は、東京都心で買い物(爆買い)を楽しんでいるようです。

このおらかな風物の四字熟語は、実景ではなく、とくに優れた古楽器演奏やかけがえない友人をたたえる比喻として用いられています。

先に記した「弦外之音」で、琴の名手だった伯牙が自分の曲想を深く理解してくれている鐘子期が離世したと聞いたあと、琴を弾じなかつたという故事「破琴絶弦」(『呂氏春秋「本味」』から)をみんながよく知っていて、「高山流水」(『列子「湯問」』から)は聞いて快いほめことばとして使われています。

箏(十三弦・有柱)と琴(七弦・無柱)との違いはそれとして、古琴十大名曲のひとつ「高山流水」が双方で演奏されています。

箏の七〇%を制作している揚州市は、ことし四月「万花節」に合わせて歴史文化街区「古琴第一街」を開設しました。一方、古跡として「古琴台」(伯牙台)が残る武漢市では、「破琴」の物語「高山流水」の映画化を発表し、この八月にクランクインするといえます。

* * * *

「気呑山河」(きどんさんが)

意気さかんにして山河をも呑むほどの勢いがあることを「気は山河を呑む」(金仁傑「蕭何月下追韓信」など)といえます。意気さかんな度合いはさまざまで限りがありません。大きいところでは雲夢(うんぼう、楚の大沢)を呑んでやろうという「気呑雲夢」となったり、はては牛斗(牽牛星と北斗星)を呑む「気呑牛斗」や宇宙まで呑んでしまう「気呑宇宙」となったりします。中国史上で稀有の意気さかな人物として知られる楚の英傑、項羽は、「拔山蓋世」(力は山を抜き、気は世を蓋う)と伝えられています。

平成不況が長引いている上に「消費税増税」では国民の氣勢はあがりようがありません。景気も気のうちですから「気呑山河」の勢いがほしいところ。景気をよくするのは国民ひとりひとりの気力だとすれば、みなさんの「気呑・・」がなにを呑むかによります。みずから力づよい・・を呑んで氣勢を盛んにし、景気をよくしてください。

「円水礼賛」（えんすいらいさん）

1 2012・11・1

みなさんは「円水」から何を思うでしょうか。木の葉の先からまあるくなって落ちてゆく小さな雨雫でしょうか。あるいは水面に見渡すかぎり重なって広がる水玉模様でしょうか。滝つぼや谷合いの池、それとも大きな火口湖。一転して画かれた水色の円。

わたしの「円水」は水玉模様です。ひとつひとつの中心にだれかがいて、まわりにだれかがいて、さまざまなテーマで語り合う文化の形。円水社のホームページのデザインを担当したゆめmo・graさんは、パソコンの方形の画面に、水色の円を配してシンプルでやさしく柔らかく「円水」を構成しています。

老子は「水の善は万物を利用して争わず」といいます。水には争わずおだやかに地をうるおす高い理想が託されています。そこで「円水礼賛」ですが、辞書にはありません。

じつは漢字四字を用いて自分の世界をこしらえるのも愉しみのひとつなのです。

* * * *

「逆水行舟」（ぎゃくすいこうしゅう）

149 2015・9・2

水流の方向に逆らって舟が行くこと。

したがって努力しつづけなければ流れに従って後退してしまうことになります。

「逆水行舟、不進則退」（梁啓超『飲冰室文集』二九）などとして事業でも学問でも活動の現場でもよく用いられます。

中国経済の下降状況を迎えて、李克強首相も国務院の重要会議などで、下行圧力のなかでの改革と発展は「逆水行舟、不進則退」にあると繰り返し訴えて、各界の奮起を促しています。

学問も日ごろから努めないと思ってしまうどころか後退してしまうことでは同じです。宋の欧陽修は、「学書は急流を遡るようなもので、氣力を尽くしたところでもとのところ（故処）から離れない」（『欧陽文忠公集』試筆）から）といって嘆いています。大学者ともなれば努めても務めても先に進んだ実感がなかったのでしょうか。学問は強いて勉める（勉強）ことで後退しなすむことになります。

「雨過天青」（うかてんせい）

41 2013・8・7

雨が去って雲が切れて、見る間に広がってゆく晴れやかな青空。世情を暗く覆い尽くしていた弊風を打ち破って、天命を革めて新たな時代を実現しようとして立つた英傑のひとり、五代後周の創成者、世宗柴榮でした。

その後「雨過天青」は、厳しい状況が大きく好転することの例えとされ、暗澹とした気分を吹きはらったあとの爽快な心情を伝えることばとなっています。

「デフレーション（萎縮）」状態を脱して好況を呼びさまそうという「アベノミクス」がすべての国民にとってそうなるかは、国民の共感次第です。「雨過天晴」ともいいます。

柴榮は商家の出で、茶を商ったこともあつたといえます。みずからの柴窯での磁器焼造にあたって、苦しい境涯の好転を願う思いをこめて、明朗な「雨過天青」（謝肇淛『文海披沙記』から）の釉色の器を求めたのでした。その願いは次の宋代に引きつがれ、官窯が焼造した「宋の青磁」は時代を画する逸品となりました。

* * * *

「断雨残雲」（だんうざんうん）

200 2016・8・24

ことし（二〇一六年）は台風9・10・11号が前後してやってきて、各地に風雨による被害をもたらしています。北海道にふたつも台風が上陸したのは観測史上で初めてのことにいます。

雨はやんだもののお雲がたれこめている情景が「断雨残雲」（劉克莊『後村全集「西楼」』など）で、特にひとたび途切れた愛情や恩愛が心のどこかに残りながらもふたたび戻らないことの例えとされます。

雨と雲との情景には「雲翻雨覆」という成語もあつて、こちらは雲行きがあやしく雨になる気配。天気予報では傘をもって出ましようというところ。比喻としては人情世評が常ならぬこと、簡単に変わってしまうことで、唐代の詩人杜甫は「手を翻せば雲と作り、手を覆せば雨となる」（「貧交行」から）と態度を手のひらを反すように変えてしまうことを憂えています。

そんななかに「雨過天青（晴）」（別項）があるのはうれしい。

「蚕食鯨吞」（さんしよくげいどん）

2008 2016・10・19

クジラが大きな口でガブリとひと呑みする「鯨吞」のような侵略がある一方に、カイコが小さな口で桑の葉を少しずつ食べて食べ尽くす「蚕食」のような侵略もあるということ。カイコの一口は小さくともいつしか桑の葉は筋だけになるということで、「鯨吞」と「蚕食」とは異なった侵略の形をいいます。

韓非子は「蚕食」（『韓非子「存韓」』から）という形で秦の侵攻について述べ、「鯨吞」の勢いによる一気の席捲（『晋書「慕容暉載記論」』など）はのちになると現われます。二者を連ねて「蚕食鯨吞」というのは清朝になってイギリス帝国の侵略法に対して呼ぶようになり、孫文は「興中会宣言」の中で祖国の「蚕食鯨吞」の危機を指摘しています。

いまでもたとえばトルコは、歴史的な経緯としてロシアによる「鯨吞」を警戒していますし、一方でIS（イスラム国）による「蚕食」という侵略とも応戦していますから「蚕食鯨吞」の国難のただ中にあるといえます。

* * * *

「蠅頭微利」（ようとうびり）

49 2013・10・2

「蠅頭」を「ようとう」と読める人はどれほどいるのでしょうか。ハエを見なくなつて久しいことも関係しているのでしょうか。給食のパンに混入していて、食べても害がないとかで話題になりましたが。

ちっぽけな利益をいうのに中国では「蠅頭微利」（口語では「蠅頭小利」）が用いられています。日本で少量をいう「雀の涙」と「猫の額」。「雀の涙」は見たことがないし、「猫の額」は尺度として範囲があいまいだからでしょうか、中国では見聞きしません。少量を代表するのはハエの頭とカタツムリの角。

「蠅利蝸名」は、わずかな利益とささやかな名声。宋の蘇軾は「蝸角虚名、蠅頭微利」（「満庭芳」から）といって、利得も名声もまとめて突き放しています。

ハエとカタツムリ。どちらも身近でなくなりましたが、ネコだけは健在です。ソファの上に寝そべるネコの狭い額を見て、転じてわが家の狭い庭を見ますと、なるほどと思える巧みな表現なのですが。

「蛙鳴蟬噪」(あめいせんそう)

45 2013・9・4

蛙が鳴いて蟬が噪ぐというのは、親しい夏の風物です。とくに蟬の声は、一声一声が短い生を知って生きることの謳歌、小さい命の大合唱です。ニイニゼミ、ヒグラシ(カナカナ)、ミンミンゼミ、アブラゼミ、ツクツクボウシ・それぞれに鳴き声に特徴があり、現われる順もあるので、曲調は少しずつ移ろっていきます。芭蕉の有名な句「閑さや岩にしみいる蟬の声」は旧暦五月末の山形・立石寺の作なので、ニイニゼミと調査結果が出ているようです。莊子の「螻蛄(けいこ・夏ゼミ)は春秋を知らず」は、一年を生きたれない凝縮された生へのいとおしさを掬いとっています。蘇軾の「蛙鳴青草の泊、蟬噪垂楊の浦」も人の賑わいの中に混じる生きものの声を聞いています。

蟬の声が途絶えて虫の音が引き継ぐ季節の転回。比喻として「蛙鳴蟬噪」(儲欣『唐宋八大家文評「韓愈・平淮西碑」など』)が低俗な文章や内容のない議論をいうのはなぜでしょう。炎熱の夏を騒ぎ終えて成熟の秋に期待するということでしょうか。

* * * *

「猫鼠同眠」(びようそどうみん)

52 2013・10・23

猫と鼠がいつしよに眠る「猫鼠同眠」(『金瓶梅「七六回」』など)というのはありえない情景です。あればネコのほうに問題があることを示しています。これは歴代王朝内では「猫鼠同処」(『新唐書「五行志」』など)ともいわれて、官吏の職務怠慢を戒めることばとして、しばしば使われてきました。

「猫鼠同眠」は今の社会でも見られて、片目を開いて片目をつぶって製品検査をすることでの「互利互惠」がそれに当たります。とくに食品や医療部門の製品での管理者と被管理者の「灰色の默契」によっておこなわれ、問題が発覚すると「猫鼠同眠」として騒がれることになります。

「トムとジェリー」(猫和老鼠)でみるように、善悪より先に敏捷性も問題の要因で、警察官が逃げ足の早い犯人を捕えられないこともこの類ということになります。

さて十二支に猫がない理由は、歴代見られる猫的官吏が避けたのかもしれないかもしれません、なぜなら漢字文化圏でもベトナムでは兎のかわりに猫が入っています。

中国の「四大火爐(かまど)都市」のトップ重慶市のことは「七月流火」(別項)で取り上げましたが、いま流行っている消暑法に「水上麻雀」があります。中国では麻雀はスポーツで、みんな熱中してやっています。水辺に青と白のまだらの傘を立てて、その下で足を冷やしながら麻雀を打つ。水流に沿って延々つづく傘の列は奇観であり涼しげです。しかし勝負で熱くなつて涼は感じられないでしょう。

呉は長江の下流(杭州も四大火爐のひとつ)に当たります。「江浙熟すれば天下足る」といわれたように、長江下流域は米どころ。農作業に牛は欠かせません。炎熱に苦しむのは人間ばかりではありません。

炎熱のもと日中いっぱい酷使されて終えて帰る道で、東から満月が上ってくる。牛の目に月は太陽と映ります。そこで「呉牛喘月」(劉義慶『世説新語「言語」』など)ということになります。牛の喘ぎは同時に農民の喘ぎ。それでも表向きの意味合いは月におびえるといったところに止まっています。

* * * *

「虎落平川」(こらくへいせん)

97 2014・9・3

平川は山中ではなく平坦な土地のことで、「一馬平川」ならごくありふれた田園風景です。ところが平時なら山中深くにいるはずの虎が、人里近くに現れる「虎落平川」(『説岳全伝「四〇』』など)となると、山中での実権を失って流浪の旅に出た痛ましい姿です。こうなると犬に囲まれて立ち往生ということになります。

朝鮮での加藤清正の虎退治も、山深くの虎かこんな平川での虎との出会いかによって評価は変わることになります。

一方に「放虎帰山」や「放虎山林」(『三国志「蜀書・劉巴伝」』から)があります。将来は危害を及ぼすかもしれない人物と知りながら、放って自在にさせること。三国時代には益州の劉璋が曹操の遠征軍に対抗するために、「放虎山林」をいう劉巴の諫めを聞かず劉備を迎え入れたため、後に劉備に蜀を奪われることになります。

わが国では池禪尼のはからいで、命ながらえて伊豆に流された源頼朝が、平家を滅ぼすなどがいよいよ例でしょう。

敵として闘う者の多い原野で、とくに闘う武器になるような器官をもたない「平和主義者」である兔の生き方について。

ずるがしこい兔は三つの隠れ場所を持つているというのが「狡兔三窟」(『戦国策「斉策」』から)です。ずるがしこいといわれようと、難を逃がれて生きていく道は、長い耳による危機察知能力とすばしっこい逃げ足と三つの隠れ場所を持つていることにあるということです。

三つの隠れ場所の真ん中にいて、外敵の迫るのをいち早く察知して逃げ込みます。「二兔を追うもの」は六窟を相手にするので、一兔をも得られない結果になつてもいたし方がないでしょう。

戦国時代斉の孟嘗君の食客のひとり馮諼(ふうけん)は、「狡兔三窟ありてわずかにその死を免るのみ」といって、他の二窟を用意するよう勧めています。いまなら企業や個人が税逃れのためにする資金の分割(海外隠し)もこの類です。

* * * *

「狐兔之悲」(ことしひ)

206 2016・10・5

原野でともに暮らしていた狐が死ぬと兔が悲しみ、兔が死ぬと狐が悲しむのを「狐兔之悲」(朱国楨『浦幢小品』など)あるいは「兔死狐悲」(『三国演義第八九回』など)といいます。

兔は狐に襲われるのではないかと思われませんが、同じ野に生きるもの同士死や不幸に感じて悲痛の思いを共にするとされますが、おそらく里人の実見した姿だったのでしょう。

いまや野ギツネがいなくなり、それを悲しむ野ウサギも絶えました。「狐兔之悲」という四字熟語は、狐も兔も共に見なくなった野を、「狐兔のいない悲しみ」という別の意味合いでさまよっているようです。

狐には「狐死首丘」(『礼記「檀弓上」』など)があつて、狐はまさに死なんとするときに、自分の首を生まれた丘のほうにむけて死ぬと伝えていきます。大元をたいてつにして忘れないことに例えています。

このたびの総選挙にあたって、「維新の会」は坂本龍馬(りょうま)の「船中八策」にちなんで政策をつくり、天駆ける龍馬がもつ奔騰、剛健といった属性にあやかっ、大勝利に結びつけようとしています。幕末土佐の下級武士の子に、母親が夢に龍をみて名付けた思いは、志士となり時代の波に翻弄されて三一歳で刺客に暗殺されるまで体内を熱く駆け廻っていたことでしょう。新しい時代を願う思いがいまの国民に通じるかどうか。

典故とされる唐代の詩(李郢「上裴晋公」)には、老齢になった憂国の臣が「龍馬精神」なお健在、旺盛であったと詠われています。そのことから若年者よりもむしろ壮年者が、国家安寧のために奮闘する姿が思われる頼もしいことばです。今年は辰年でしたから、中国では年初には航空会社や証券市場ばかりでなく公共機関からも、「新年快樂」「万事如意」そして「龍馬精神」といった成長と大発展を願う迎春の賀辞が目立ちました。

* * * *

「画龍点睛」(がりょうてんせい)

14 2013・1・30

金陵(いま南京)の安楽寺の障壁に四龍を画いたとき、張僧繚(ちようそうよう・南朝梁の画家)は睛(ひとみ)を入れませんでした。「点睛即飛去」がその理由です。人をたぶらかすな、睛を入れろと急かされて、墨を落とすことにします。二龍まで睛を点じたところで、二龍は雷電とともに壁を破って飛び去り、睛を点じなかった二龍は存在したと、唐の張彦遠は『歴代名画記』に記しています。

こんな話が伝わるのは、最後の一筆である点睛が画龍の生き死にかかわるからで、「画龍点睛」はしごとの正否にかかわる最後の一点を仕上げることにいい、「画龍点睛を欠く」は逆を意味します。

最近車やパソコンのモデルチェンジによって一部の変更で機能が格段によくなくなったところを「画龍点睛」といって広告したりします。そのパソコンでは「てんせい」とうつと「点睛」と出ますから校正の労はありませんが、今でも美しく「画龍点睛」と書いて「画龍点睛」と直されたりします。

「筆走龍蛇」（ひつそうりゆうだ）

10 2013・1・2

おだやかに迎える年初の行事といえ、元旦の初詣、二日の書き初め。

書は知と技の芸術ですから奥が深く、とくに草書の筆勢の洒脱で非凡なことを「筆走龍蛇」（李白「草書歌行」など）といいます。

ことしの干支は癸巳（みずのと・み）。まずは龍蛇走るといった筆勢で、「筆走龍蛇」を書いてみてください。

「一龍一蛇」は頭れたり隠れたりすること。「蛇欲吞象」は蛇が象を呑みこもうと思ふことでひどく貪欲であること。「蛇行斗折」は蛇行して延びたり北斗七星のように曲折したりすること。蛇は形状の異様さや有毒であることで親和性にとぼしく、十支の「巳」は、年賀状の賀辞や縁起図としての表現に工夫がいるところです。

「筆走」についてですが、金石に刻んできた中国の書と帖紙から始まった日本の書には美意識に大きい違いがあるようです。交流展などで両国の子どもの書を合わせ見ると、その特徴がよくわかります。

* * * *

「走馬看花」（そうばかんか）

21 2013・3・20

馬を走らせながら花を看るのが「走馬看花」です。難関の科挙に通った心躍る気分を馬を走らせて長安の街中の花を看てまわったという晴れやかな実景として唐の孟郊の詩に詠われています。（『孟東野集「登科後』から）

それが後世になると高揚する心情での「走馬看花」の姿を離れて、事物の観察が粗略である例（清の呉喬）に用いられるようになります。そこで仔細に観察する意味での「下馬看花」が登場します。こうなると孟郊が走馬して見た花の実景の世界にはもどれません。ことばが時とともに移りゆく例として知られます。

いまやバスでの移動ばかり多くて風物はちよっと見ですませる「走馬看花」のバック旅行や、多用なために仔細なしごとができなかった言い訳にも使われています。聞いたほうの印象が明るいので納得されやすいでしょうか。

高速道路を走る高速バスのドライバーのよそ見運転ともなると、これはもう看過できない「走馬看花」です。

三歳馬の優駿を決める「ダービー」は、たいへんな調教の労苦の末の出走ですから、関係者にとっては愛馬がターフを疾駆できるだけでも感激のようです。生まれ三年、牧場では群れを害する馬が混じるのは困りますから、「害群之馬」（劉安世『尽言集「一三・応詔言事」』など）として、飼慣らすか除去せねばなりません。そのことから集団に危害をおよぼす人物に対してもいいいます。

民衆の夢である「安居楽業」の達成のためには、「害群之馬」の除去が必要なことを、習近平主席も重要講話のなかで強調しています。

ことしはウマ年で、ドイツのメルケル首相も安倍晋三首相も同じ一九五四年生まれの六〇歳（厄年＝本命年）ですが、メルケルさんとはともかく、中国にとって安倍さんはこれまでのところどうやら「害群の本命馬」のようです。

市民にとっては害馬より害車。交通ルール違反はもろろんタクシー運転手が「舍近求遠」や高額請求をする「黒車」が、身近な「害群之馬」といったところですよ。

* * * *

「博士買驢」（はかせばいろ）

193 2016・7・6

主意を伝えない空文を書く知識人を「博士買驢」（『顔氏家訓「勉学」』）からと揶揄していいいます。学者の尊大さをあしらう小気味よい四字熟語です。

ここでの「博士」は、学者兄弟でつくった「博士ラーメン」ほどの親しさでしょう。古代の鄴都での話なので、きっと「五経」など民衆の暮らしに関係がない知識をひけらかす人物を博士と呼んだのでしょう。そんな博士がある日、市へ行って驢馬を買うことになります。

一頭の驢馬を選んでさて代金となって、驢馬売りに証明を求めます。書けませんから当然に自分が代わって書くことになって三枚。やっと書き終わって抑揚よろしく読み上げました。驢馬売りが「三枚のどこにも驢がない」と指摘すると、そのとおりだったので博士は売り場でもの笑いになりました。

参院選で「改憲」をいわないのは、落としたのではなく選挙に勝つために意図してのもの。キャスターに指摘されてキレルようでは信は得られないでしょう。

羊は巧みに閉じ込められている小屋（牢）からよく逃げ出すようです。管理人は急いで小屋を繕うわけですが、逃げたあとですから落ち度をとがめられます。そこで事後いそいで小屋を繕うことで、「亡羊補牢」『戦国策「楚策」』からは、以後の損失を免れることができるという意味合いで、「いまだ遅きとなさず」として許されることとなります。

「亡羊」のような事例はいろいろあることなのでよく使われます。

ドイツ航空機事故のあとコックピット内の乗務を「常時二人態勢」にしたことや、年末の上海・外灘広場での雑踏事故のあと、日本の明石事故後の雑踏警備やカウンタウンでは同じく一〇〇万人が集まる米タイムズスクエアの警備などを「他山之石」として活かしているのもその例です。

未（ひつじ）年に因んで張謙卑が作詞・作曲した「亡羊補牢」を、著作権を盾にして他の歌手に使わせないというのは、いささか困い込みに問題がありそうです。

* * * *

「窮猿投林」（きゆうえんとりりん）

平成二八年・二〇一六年の干支は丙申（かのえ・さる）で、賀状にも多様な表情の猿たちが新年のごあいさつに参加しています。

ここではごあいさつに参加するのは逆に、人間に追い詰められて窮地におちいって、林に逃げ込んでしまうという「窮猿投林」『晋書「李充伝」』から）について触れたいと思います。

書聖としてあがめられる王羲之と同時代人であった李充が、記室参軍（軍の文書起草や記録表彰がしごと）では家貧しいゆえに地方官（県令）を選んで出たことから、中央から去る進退の処し方として「窮猿投林」が用いられています。李充の母（衛錬）は王羲之が若き日に書法を学んだことで知られる衛夫人です。のちに李充は「文義冠世」の仲間とともに王羲之の蘭亭の宴に連なっています。

内閣府は女性管理職三〇％を掲げていますが、七〇％の女性が管理職になりたくないといえます。こんな実情が「窮猿投林」の理解の助けになりました。

「千里鵝毛」(せんりがもう)

30 2013・5・22

スイスの旅先から友人の手書きのあいさつが添えられた絵葉書が届いて、「千里迢々」(遙かなこと)の思いを伝えてくれました。

近ごろは珍しいことです。千里のはるかかなたにいる友人へ鵝毛(軽くささやかなもの)を送る。それでも友誼の心は伝えられるというのが「千里鵝毛」(歐陽修「聖俞寄銀杏」など)で、絵葉書はこの四字熟語を思い出させてくれました。鵝毛であることのいわれもともに。

こないわれがあります。唐の長安へ向かうチベットからの遣使が、旅の途中で貢献のためにつれてきた珍禽の白天鵝に水を飲ませ羽毛を洗おうとした際に逃がしてしまいました。残されたのは鵝毛のみ。遣使は太宗との接見の際にこれを献じ、詩を添えて事情を訴えました。太宗は罪とせず忠誠心をたたえてねぎらったといいます。いまや鵝毛ならぬ電子メール(電子郵便)の時代。送ったらすぐに返事がもどってくる。「千里迢々」であることを忘れてしまっているようです。

* * * *

「鵬程万里」(ほうていばんり)

40 2013・7・31

大地の北冥(北のはての暗い海)にすむ大きさの知れない大魚の鯨が化して大鳥となり、名を鵬と呼びます。この大きさの知れない鵬が、奮い立って飛び立ち、高さ九万里ともいわれる天空を雲のように飛翔して南冥(天池)にいたるといいます。この情景は絵画の素材となり、卒業生を送るにあたって前途を祝して用いられています。

鵬は伝説にあらわれる最大の鳥。鵬程は飛びゆく先のはるかなこと。そこで「鵬程万里」(『漁樵記「第一折」など)は前途の遠大なことにいいます。

『莊子』の巻頭「逍遙遊篇」に記されている有名な情景です。

ここでの「鵬程万里」は、横綱白鵬の連勝記録のこと。大鵬が四五連勝なので、七月名古屋場所の全勝での四五勝を期待して用意した四字熟語でしたが、一四日目に稀勢の里に敗れて途切れしました。白鵬にはすでに六三連勝があって、大横綱双葉山の六九連勝を越えて先にゆく「鵬程万里」は再スタートになりました。

「鳳鳴朝陽」（ほうめいちようよう）

219 2017・1・4

二〇一七年は丁酉（ひのととり）年ですから、トリにちなむ四字熟語をはじめにトリあげておきましょう。年初に明るい希望を与えてくれるのは、やはり伝説のオトリ（鵬・鳳凰・鴻）にちなむものでしょう。すでに「鵬程万里」（別項）は飛び立ちましたから、「鳳鳴朝陽」（『詩経「大雅・卷阿」』など）ででしょうか。

鳳凰が初日の出のときに優美に飛翔して鳴くことがあれば、天下太平の吉兆とされます。それはまた賢者が時を得て、正義の抱負を展開することになります。鳳は雄で凰が雌、ともに飛ぶ「鳳凰于飛」は夫婦相愛の姿とされて、婚礼の折りに家庭和睦の祝辞に用いられます。したがって「鳳鳥不至」（『論語「子罕篇」』）から）となると、政治が乱れて希望のない世の中の例に。また「鳳起雲湧」は改革期に堂々と大義を論じること。湖南省出の楊度（ようたく）が日本留学（法政大学）時に創作した「湖南少年歌」は多くの愛国青年を鼓舞したことで、梁啓超が「鳳起雲湧」と称えています。

* * * *

「鳳毛麟角」（ほうもうりんかく）

184 2016・5・4

鳳凰は伝説中の珍鳥ですし麒麟も伝説中の神獣ですから、鳳凰の毛も麒麟の角も実は見たことがないのですが、世にまれで貴ぶべき人物や珍しく得がたい事物を「鳳毛麟角」（蘇軾「送馮判官之昌国」など）といいます。

意味は「鳳毛」だけでも十分ですが、「鳳毛麟角」の四字を重ねることで超がつくレベルになります。

人物ならノーベル賞受賞者クラスならいうまでもなく、芸芸に優れた人間国宝も納得ですが、判断のつきがたい「鳳毛麟角」と呼ばれる人も学問や芸能やスポーツの分野に見受けられます。事物ですと用例は多彩です。クラシックカー、鶏宝（漢方）、隕石、魯迅の直筆といったもの。世界で認められるブランド品、天皇家や幕府の御用達、高級高層マンションの名にも用いられています。

当代では見過ごされても真贋は歴史が決めることになります。そしてだれも見たことのない「鳳毛麟角」の四字熟語は時代を越えて残りつづけることになります。

「鴛鴦」はオシドリのこと。つがいで行動するようすはほほえましく、「おしどり（愛し鳥）夫婦」といえば仲のいいご夫婦の例えとされています。実際に水辺でみる姿は「相思相愛」を思わせませう。

そういう評価を崩すのが、群れている夜のうちに草陰でお互いの相手を取り替えて、昼間は何事もないうようにむつまじいという実見者の説です。人の世にも夫婦を交換する例があつて、そのプロセスが人生模様としておもしろいことから、中国には演劇化された馮夢龍「喬太守乱点鴛鴦譜」が人気になって、「乱点鴛鴦」はよく知られています。

わが国では鳥取県の県鳥や五〇円切手で親しいですが、最近では絶滅危惧種のレッズドリフトに指定している県もあります。

「乱点鴛鴦」の実態がどうなのかを某動物園の飼育係に聞いたところ、「ほんとうです」という。おしどり夫婦といわれている人には聞かせたくない事実です。

* * * *

「精衛填海」（せいえいてんかい）

ジョア（女娃）は東海で遊んでいて溺死したあと鳥に化身して、ひたすら西山から小石や小枝をくわえてきては海を埋めようとしたといひます。その鳴き声から「精衛」と呼ばれて、「精衛填海」（『山海経「北山経」から）は堅固な意志の証とされましたが、後になると徒労になるムダな作業をつづけることにいわれるようになりましう。伝説時代の炎帝の末娘として、古代の人はどうしてこんな作業を永遠につづける哀切な女性を生み出したのでしょうか。

二〇〇七年七月に、温家宝総理は香港の中学生に、「杜鵑（ホトトギス）再拜憂天泪、精衛（セイエイ）無窮填海心」の二句をしたためて、啼血の情熱と填海の心とで香港と祖国の建設に当たるよう呼びかけています。しかし香港を「本土」と叫ぶ若者までは予想も期待もしなかつたことでしょう。

一方で、永遠に岩を押しあげつづけているギリシャ神話のシジフォス（シーシュポス）が思われます。

「松柏之茂」（しょうはくしも）

59 2013・12・11

人の一生を遙かに越えて百年・千年を生きつづける古木。その中でも松柏は、三千年柏まであつて長寿のシンボルになっています。中国の「柏」は日本のカシワではなく和名「コノテガシワ」（児の手柏）のことで常緑樹です。カシワは落葉するので一見すればわかりませんが、なぜか先人は「柏」の字にカシワを当ててきました。

他の植物が葉を落として新年を待つのに、松と柏は寒中にも葉を緑に繁らせて長寿であることから、「松柏之茂」（『詩経』小雅・天保）など）は衰微せずに不変であることに例えられます。中国の旅先で「古老柏」に出会うと実感します。

中岳嵩山の嵩陽書院内には漢の武帝によって將軍に封じられた「將軍柏」がいまも傾きながら雄姿をみせていますし、山西省太原市の晋祠や高平市には三千年柏もあります。実は南京の老樹「六朝松」が柏であるなど、中国でも松と柏をわけずに用いてきた例をみかけます。

わが国に「柏」の老樹は多くありませんが、東京・国分寺市の祥應寺で樹齡六〇〇年を超える大樹をみるができます。

* * * *

「樹大招風」（じゅだいししょうふう）

146 2015・8・12

真夏の東京・日比谷公園の大樹の下のベンチで、読みさしの本を膝にうたたねをする人がいます。大樹の蔭は風も通って蝉鳴すら涼しそうです。

霞が関の官庁では冷房の効いた部屋でクールビズ姿の官僚が、国会での「安民法制」の議論を聞いているにちがいありません。

平和な東京の夏の日比谷公園の情景です。

樹は大きくなれば風を招く「樹大招風」（『西遊記』三三回）など）というのは、だれもが実見するおおらかな風景です。ところが、能力が目立ったり事業が順調に成長したりすると風あたりが強くなるという意味合いで用いられています。

中国の台頭は、軍事的にはアメリカの世界戦略に対抗する「中国脅威論」がいわれます。大陸間弾道ミサイルの展開や衛星「北斗」の稼働、海洋進出は「樹大招風」として認識され、そのはざままでアメリカの戦略に加担して平和を守るのが「安民法制」です。樹下に憩う国民の将来の安心を担保できるのでしょうか。

どんなにすぐれた能力をもつ人であっても、当面する時代の難局に個人では対応しきれないことを「独木難支」（野叟曝言「一三回」など）といいます。

国のことはもちろん、企業や組織などでも、個人では局面をいかんともしがたい場面があつて、とくに企業の場合には倒産の危機を「独木支え難し」といつてワマン経営者は退く理由とします。また能力を大きく超える事業への参画を求められて周辺へ協力を要望するときにも「独木難支」といつてひとまず控える場合に用いられることとなります。スポーツでは団体競技がひとりの力では勝てないことよく使われます。大きな建物が崩れようとする時、一本の木では支えられないという意味合いで「一木難支」ともいいます。

「独樹一幟」は、他にまぎれずに自立している樹木のように一家一派をなしているようにすにいうことばですし、「独具慧眼」となると他に求められない独特の見解をもつことの形容で、どちらも「独」にかんするカッコいい誉めことばです。

* * * *

「良禽択木」（りょうきんたくぼく）

134 2015・5・20

トリは良い木を択んで住みつき巢をいとなみですが、ここは良いトリは木を択ぶ「良禽択木」（『三国演義「一四』』など）ということ、賢能な人物は英明な君主を択んでつかえて大業をなすという意味合いで用いられています。

後漢の創成期に光武帝劉秀につかえて名将として活躍した馬援は、「君が臣を択ぶ世ではありません、臣もまた君を択ぶ世なのです」といつて逆指名して木を択んで仕えています。

木の側からは、優れた人材を得たい企業が人材を確保するにあたって良木であることを広報するときや不動産の広告にも見られます。このトリと木の関係は、名実ともにそなわったサッカー選手の移籍がわかりやすい例でしょう。

これから求められる「良禽」としての学生の条件というのは、マネジメント能力、外国語でのコミュニケーション能力、専門分野でのプロフェショナル能力だと思います。奇に出て笑いをとるエンタメ能力が優先するこの国とは異なるようです。

「火樹銀花」（かじゆぎんか）

231 2017・3・29

冬の夜を明るくする「火樹銀花」（唐・蘇味道「正月十五夜」など）は、なにやら現代の大都市の夜景を思わせることばです。「火樹」は紅い火の色をした樹で、樹上に灯火を掛けつないだ情景でしたが、いまは夜空にむかつて昇っていく花火の軌跡で、「銀花」は光で銀色に輝く大輪の花火。

日と月が同時に昇って沈む「春節」から月の出が遅れて夕暮れの三日月となり、半月となり凸月となり、十五夜を迎えます。「元宵節」です。「火樹銀花」は灯光や焰火に照らされて明るく輝く「元宵節」の夜景をいいます。農民は一年の幸いを満月に祈るのです。豊作であること、無事であること、子宝が得られること・・・。

唐の長安での「火樹銀花」は、月への願いの明かりでした。それから農作業に精を出し、八月十五日には「中秋名月」に収穫のお礼をし、月餅をいただくのです。いまや西安ばかりでなく、大都市の「元宵節」には花火をあげ、木々の枝を電飾で彩り、ビルの壁面や池の水面まで使って不夜天の世界を演出しています。

* * * *

「花開無声」（かかいむせい）

229 2017・3・15

春の訪れとともに人の心はおおらかに晴れやかに動きますし、木々はそれぞれにそれらしく花々を開きます。「花開無声」は、花やぎながら特性を表現する静かなたたずまいをとらえています。そこで人知れず世のため人のために静かに尽くすこと、例えば献血とか介護とかの活動に添えて用いられます。「花開無言」ともいいます。「花開無声、落地有声」といささか世俗臭をまじえて、製品を誇示する場合に用いたりしますが、「花開無声太匆匆、落花無言亦匆匆」（「花開花落両無言」から）が本筋で、開花も落花も無声無言であることに本来の味わいがあるといえることばです。

春の訪れとともに花々が開いて五彩繽紛として人の心を昂らせ、花々が落ちて凋零離散して人の情を傷める。年々歳々そうして「春暖花開」のときは移ろっていきまます。しかし「落花無言」については、唐代から司空圖『二十四詩品「典雅」』の「落花無言、人淡如菊」が知られて、世の佳士たるものは花に淡泊であるべしとする鑑賞のほうに品格を見えています。

「寒花晩節」（かんかばんせつ）

215 2016・12・07

寒花は晩秋から初冬の寒さにも耐えてしつかり咲いている花のことで、「寒花晩節」（『宋名臣言行録・韓琦「九日小閣」』など）は、節操を保って晩年を過ごすように例えていいです。「黄花晩節」ともいうのは、菊（黄花）がそのころに花をつけることから。同じ意味合いの「桑榆晩景」は、日の落ちる方向にある桑や榆の木の梢を夕陽が照らしている情景で、晩年の風姿が後人の目標として輝いているようにいいです。

それに対して「晩節不終」は、築き上げてきた名声や評価を晩年に覆してしまうこと。鐘（鍾）が鳴りおわり漏壺の水が滴りおわる「鐘鳴漏尽」の終末期を、節操を保てずに「晩節を汚す」ことでよく用いられます。昨今の東京都知事選はその舞台で、首相を務めた細川・小泉両氏が舛添氏に敗れた際にいわれ、猪瀬知事に「晩節を汚すな」と辞職を促した当人の石原元知事がその立場となる。その末に小池知事が誕生しましたが、花ある知事が「寒花晩節」に至れるかどうかはわかりません。

* * * *

「錦上添花」（きんじょうてんか）

204 2016・9・21

「錦」は絹糸を色染めして織った織物の総称で、美しく鮮やかなものを例えています。空には錦雲が浮かび、池には錦鯉が泳ぎ、さらに相撲取りの醜名（しこな）にもよく見かけます。花を添えた「桜錦」という名はことに美しい。プロテニスの錦織（にしこり）圭選手もまた華麗です。

「錦上に花を添える」（黄庭堅『豫章文集「了庵頌」』など）は、美しい錦織の上にさらに美しい花たとえば牡丹などの刺繍を添えることをいいます。お祝いの宴で晴れやかに歌を歌ったり、美酒を献じたり、麗人が花束を捧げる、そんな美の上さらに美を添える演出が「锦上添花」です。

「衣錦還郷」（錦を衣て郷へ還る。『梁書「劉慶遠伝」』など）となると、中央での栄達という錦で身を飾って故郷へ帰ること。古来から男子は、この錦を最良のものとし、芸術家ならみずからの作品を故郷に寄贈するなどして「锦上添花」が成立します。

「柳暗花明」(りゅうあんかめい)

177 2016・3・16

日本の春の花は淡いですが中国の春の花はどれも色濃くあざやかです。その中でもとくに桃は明るい。春の光をあびて柳の緑が陰をつくり、桃をはじめとして百花がいつせいに開いて明るく輝いているようすが「柳暗花明」(王維「早朝」など)です。

唐の詩人王維は春の盛りを率直に詠じていますし、宋の陸游の「柳暗花明又一村」(陸游「游山西村」から)では桃の紅、柳の緑のあいだを詩人がゆったりと動くようすを伝えていきます。洛陽東郊の桃李(「年々歳々」の花)もいいですが、南京の街なかの真っ赤な花桃の並木も目を奪う風景です。ですから「柳暗花明春又来」は明るい展望を意味します。

また「柳暗花明」は、比喩的には逆境の中で急に転機がおとずれて希望が持てる状況になることに似ています。いい結果を求めている原油価格、株式市場、シャープ(夏普)の経営、第二子対策などさまざまあつてよく用いられます。

* * * *

「明日黄花」(みょうにちこうか)

51 2013・10・16

「明日」というのは、重陽節(旧暦九月九日)が過ぎたあとの日のこと。「黄花」は菊の花。重陽節には菊を観賞するならわしがあり、その日に合わせて花の盛りを迎えるよう栽培されます。ですから「明日黄花」(蘇軾「九日次韻王鞏」など)は、節日を過ぎて人びとの関心が薄れたあとの菊の花のことで、遅れて盛りを迎える花の場合には「役たたず」ということになります。

普及のはじめは独占状態だった人気デジタル商品が売れなくなるのも「明日黄花」。女子バレーで日本が中国を破って金星を挙げると、中国は「昔日の面影もなし」で、日本は「遅れて今更」という意味で、「明日黄花」の評を受けたりします。

重陽節は中国では「老人節(敬老の日)」で、年老いた両親に会いに行きます。高齢化率一位の上海では一〇月の「敬老月」には敬老・愛老・助老といった「崇尚敬老」の行事がさかんです。

気がつけばこの稿も重陽節をすぎており「明日黄花」でした。

「狂花病葉」

(きょうかびょうよう)

78

2014・4・23

桜前線が北上して、満開の花の下での酒宴も同時に北上して、ことしは消費税増税後のウサ晴らしもあって酒量も度を越してつい痛飲となります。「狂花病葉」(皇甫松「醉郷日月」など)といっても空を見上げて見えるものではありません。宴たけなわに酒呑みが示す際立った二様の酔いざまなのですから。

「狂花」のほうは、酔いにつれて大声を発して悪態を並べて騒ぐ者。一方の「病葉」のほうは、酔うほどに暗鬱になり静かになりついには寝入ってしまう者。ほどほどのところならよいのですが、ふたりして酔ってそれぞれに「狂花」と「病葉」に極まってしまうと、周りの手に負えません。

桜花爛漫の宴席に興を添えるつもりで、「酒令」(罰酒)の趣向をこらして飲酒を煽りたてた末に、一方は「狂花」となり一方は「病葉」となりという結果を招いてしまつては、仕切る者(令官)としては、みな「狂花病葉」の度合いに通じていなかっただけのことになります。

* * * *

104

「葉落帰根」

(ようらくきこん)

216

2016・12・14

樹木の根から発した養分が枝先に達して春に芽を出し、夏に葉を茂げらせて秋には落ちて根に帰るようすを「葉落帰根」(『劔南詩稿「八四・寓嘆」』など)といひ、人の活動やものごとが本源を忘れずに戻ること例えます。

「樹高千丈、葉落帰根」と合わせていい、中島みゆきの歌のタイトルにもなっています。中島みゆきの歌では、ひとひらの葉が空を漂いながら見知らぬ地へと流れていくけれど、最後は木の根がゆりかごを差し伸べてきつと抱きとめてくれるだろうと、孤独にたえて漂いつづけます。このことばは中国残留孤児の望郷の思いが込められていて、瀋陽には帰国孤児と養母をつなぐ「瀋陽落葉帰根の会」があります。

それに対して「落地生根」というのは、本源の木から遠く離れた地に落ちてそこでみずからの力を信じて新たな根をつくる姿をいいます。神戸華僑歴史博物館に飾られている「落地生根」は、故郷から離れて生きる華僑の人たちの強い心情を示しています。

「十歩芳草」（じゅつぽほうそう）

151 2015・9・16

「十歩のうちには芳草（賢才）が見出せる」ということ。

十歩のうちですから見まわすほどの範囲の処に賢才がいるということ。賢才は日月を継いで決して絶えることがないという意味もあるようです。その比喩として芳草、香草、茂草などの違いはあっても、後代の典故には「十室之邑、必有忠信」（「公治長」から）という孔子のことばが同時に意識されているようです。

漢の劉向『説苑「談叢」』には「十歩之澤、必有香草、十室之邑、必有忠士」とあり、また『隋書「煬帝紀三」』には「十歩之内、必有芳草」と出てきます。

「芳草」については、「桃源郷」（陶淵明『桃花源記』から）の桃花林に「芳草鮮美」とあって、桃花と芳草はまさに舞台の主役として才媛を待つ風情です。いまや多様性（ダイバーシティ）の時代に、さまざまな分野で才女・才媛が求められるとき、ここでの「芳草」を才媛と読めば、「十歩芳草」という「四字熟語」は、その登場を呼かけるにほどよいといえそうです。

* * * *

「出類拔萃」（しゅつるいばつすい）

142 2015・7・15

類から出る、あるいは萃から抜けるというのが「出類拔萃」（『孟子「公孫丑章句」』など）で、「萃」には草が集まる（くさむら）という意がありますから「抜粹」で「粹」と記すと実景への誤解を生じます。

書物の中から優れた部分を抜き出すことに「拔萃」はよく使われています。人物なら衆人から品格や才能が抜きん出ていることに。

孟子は孔子がとくに秀れていることの表現としました。「三国志」では蜀の張松が魏の許都に出かけた折り、楊修に人物のことを問われて、「その類に出て、その萃を抜く者は記すにたえず、数え尽くす能わず」（『三国演義「六〇回」』から）と誇る場面があります。

ニコン（尼康）のカメラやソニー（索尼）のデジカメラやトヨタ（豊田）車の「出類拔萃」の機能の紹介や宣伝とともに、村上春樹の短編集『女のいない男たち』が「出類拔萃」ではないという批評に出くわしたりもします。

「春筍」は春のたけのこ。「怒」は怒るではなく氣勢強盛なこと。春のたけのこの若い莖が勢いよく伸びることから、「春筍怒発」は好い事が次から次に現われることに似ています。春の花々が色あせたころ、温かな雨のあとに芽を出すと、竹は一気に成長します。ひと晩で数十センチも伸びます。ですから中国の都市のビル建設ラッシュはまさに「雨後春筍」(韜奮『萍蹤憶語』など)です。新しい事物が迅速に出現することにあります。

日本では農村の過疎化や竹材輸入もあって、放置された里山や雑木林では樹木が竹の地下茎に養分を取られ日光を遮られて枯れ、どこも竹林に代わっています。その一方で竹冠のつく日用品は使われなくなったり、プラスチックになったりしています。竿、箒、箒、箱、篋、筒、筆、簪、筍、籠、笛、簾、箕、笠、策、笈、筵、筏、箒。節、筋、算、籍・。ただ「笑」だけが音が転じて借用されて大はやりですが。そうでした女性の繊細な手指を玉筍といいます。

* * * *

「桃李不言」 (とうりふげん)

71 2014・3・5

桃も李も、ものを言わない。けれども花が咲き実がなれば、樹下には人びとが訪れておのずから小径ができる。

司馬遷は、『史記「李將軍列伝贊」』で、將軍の李広が鄙びた風姿のまま、また能弁でもなかったのに、何事にも誠実に尽くして親しまれて、その死がみんなに哀悼されたことを「桃李不言、下自成蹊」に託して記しています。品格が優れて着々と実績を積んでいる人のもとには、おのずからみな慕い寄ってくるものだというのです。安倍晋三少年が学んだ成蹊学園の建学の精神です。

桃には陶淵明の「桃花源記」に由来する仙境「桃源郷」があります。湖南省常德市の桃花源がモデルとされて観光地になっています。日本の「桃源郷」といえば山梨県笛吹市でしょう。笛吹川の扇状地に日本一を誇る「桃の里」が広がっていて、春先の桃畑は「ピンクの絨毯」となって温和な季節を彩ります。パノラマ「笛吹市桃源郷春まつり」は二〇一四年は三月二日から四月二七日までです。

わが国でいう種々の花がいつせいに咲き乱れる「百花繚乱」は中国では「百花斉放」あるいは「百花争妍」で、この「眼花繚乱」（王実甫『西廂記「一本一折」』など）は事物や事情が煩雑で眼前の事象への判断に迷うこと。反義語は「一目瞭然」。ですから魚市場移転での築地か豊州かについて、さまざまな事物や事情が錯綜しており、小池都知事がどう判断するかに迷うようすは、この「眼花繚乱」の事例のひとつとっていいでしょう。身近なところでは、発売10周年にちなむアップル社製のスマートフォン「Phone 8」に関する発売日や型式情報についてがそれ。

途上国だった中国の最大の「眼花繚乱」は、本当の大国になったのかという問いでしょう。陸・海の新シルクロードといわれる「一帯一路」構想など着々と地歩を築いているものの、人民元の国際通貨としての安定性や包囲する地縁世界である日米、ロシア、インドとの関係に懸念があり、強国にはなったが大国とはいえず、まだ驕傲、自豪であるという抑制した意見に実感があります。

「一言九鼎」（いちごんきゅうてい）

44 2013・8・28

トップリーダーである人の発言が軽すぎはしないでしょうか。

仔細に配慮して心に響くことばによって国民に安心を与え鼓舞するのが務めであり、逆に国の内外で混乱を増幅するような発言は資格を問われることとなります。

「一言九鼎」（範浚『香溪集・一八』など）というのは、将相たるものの一言は、国家を象徴する宝器である「九鼎」の重みにも当たるという意味です。それだけの影響力を持つことばを常に心底にとどめて発言しなければならぬということです。

「鼎」は三足をもつ器で、宗廟への供えものを盛ることから礼器となり、禹王が九州（全土のこと）から集めた青銅によって鑄造したと伝える「九鼎」は、古代王朝の王権の証とされました。

「いまでも「鼎の軽重を問う」（問鼎軽重）というと、大きなしごとをこなす実力の有無を問う場面で使われています。将相には「一言九鼎」の表現力が求められ、それに値する人物でなければ任に堪えないのです。

* * * *

「石破天驚」（せきはてんきょう）

225 2017・2・15

唐代の鬼才李賀が詩的感性の冴えを示して、石を破って天を驚かせるという「石破天驚」（李賀「李憑箏篋引」から）という表現を用いたのは、李憑が奏する外来の弦楽器箏篋（くご）から撥き出された音色が、かつてだれによっても表出されなかった新奇で意想外な情域に達していたからでしょう。伝説の女媧が五色の石を練って天を補修した、その補石を破って溢れ出して天を驚かせたというこの四字成語は、詩文や演奏ばかりでなく、世の中を震撼させるほどの内容をもつさまざまな事象に用いられています。

たとえば、岩を掘削して彫り出した雲崗や龍門石窟の仏像群は「石破天驚」の文化遺産ですし、石づくりの摩天楼群もそうでしょうし、一転してスイス製の時計や日本製のカメラといった精密機械にもいわれます。サッカーで敵の固いディフェンスを破って矢のようにゴールに飛び込んだキックなどにもいわれます。「女媧補天」にちなんで客家の人びとは農曆一月二〇日を「天穿日」として祝っています。

大皿の上に散らした砂のように、ばらばらで、力が分散されて活かされていないことを「一盤散沙」(孫中山『建国方略』など)といいます。

孫文は四万万(四億)の民衆は一盤散沙に等しい」といって、「天下為公」を唱えて民族的結集を呼びかけたのでした。

衆・参両院選挙後のわが国の野党のありようが、この「一盤散沙」といわれる状態にあるといわれると、与党独走の情勢の長いことが予測されます。

国家となると大盤でしょうが、小ぶりの盤ならさまざまあります。

そのひとつがサッカー場です。広州でおこなわれたAFCアジア・チャンピオンズ・リーグで、広州恒大が横浜F・マリノスを2-1で破ったとき、「今日は一盤散沙でなかった」というコメントが出ました。ということは横浜のほうは「一盤散沙」だったということになります。中国スポーツ界では陸上の花である女子中・長距離界の選手育成が遅れて不振つづきで、「一盤散沙」がいわれます。

* * * *

「沙裡淘金」(さりとうきん)

199 2016・8・17

砂の中から金を取り出すことが「沙裡淘金」(徳行禅師『四字経』など)で、得ることが難しいこと、多大な費用を使っても成果が乏しいことといわれます。

リオ・オリンピックは日本選手のメダルラッシュに沸きましたが、とくに柔道では全階級で一二個。女子七〇キロ級の田知本遥選手が、小学生のころから父親と姉からくる日もくる日も稽古をつけられて、そんな沙のような練習をかぎりなく重ねた結果として金メダルを獲得したことも「沙裡淘金」といえるのでしよう。

農民作家の趙樹理は「読書」を「沙裡淘金のようなもの」といっています。

また「棋譜」には「沙裡淘金」と呼ぶほどみごとに打碁の例があります。

一九〇〇年に敦煌莫高窟で発見された「敦煌遺書」もその貴重な例ですが、変文(説話)の中にみられる仏法を求める心情の厳しさを伝える「碎身粉骨」や同じ野に生きる同類の死を悼む「狐死兔悲」といった四字熟語は「沙裡淘金」と呼ぶにふさわしい内容を伝えています。

手中に収めて掌上にある美しい明珠・珍珠が「掌上明珠」(『元遺山詩集箋注』「二」など)です。掌上にある明珠といえ、男性ならば最愛の女性のことを、父や母ならば寵愛する子女とくに女の子を指します。女の子が生まれたことをよろこんで「明珠入掌」(郭応祥「鷓鴣天」など)といいます。

「掌中之珠(玉)」もよく使う親しい方です。求めて得た珍珠だったのに故あって失ってしまったことの悲哀の例も多くあって、「掌中明珠去る」(辛棄疾「永遇楽」)や「掌中の珠砕ける」(庾信「傷心賦」)という表現も知られます。

掌中にできない「明珠」としては美しい夜のましが例えられます。「東方明珠」といえば上海の呼称です。外灘から望む浦東地区に建てられたテレビ塔が「東方明珠電視塔」(四六八メートル)で、上海の觀光スポットになっています。白居易の「大珠小珠玉盤に落つ」(「琵琶行」)から想を得てといわれるように、よく見ると大小一個の明珠を連ねて設計されています。

* * * *

「小家碧玉」(しょうかへきぎよく)

109 2014・11・26

碧玉は女性の名前です。大家名門ではない普通の家の出の美貌の娘のことを「小家碧玉」(郭茂倩『樂府詩集「碧玉歌二」』など)といいます。

「大家閨秀」(名門の娘)であれば、教育を受け、しつけを教えられ、しとやかで喜怒哀楽を表に出さず、おとなから称賛をうけ、仲間の評判もいい。一方の「小家碧玉」は、ことばづかいがかわいくて、性格は柔和で活発で、両目は輝いて喜びを露わにする。動作は楚々として男性に「護花」の気持ちを起こさせます。どちらも「時代の花」であることに違いはありません。

例えばアメリカ車やドイツ車が「大家閨秀」なのに対して、日本車が「小家碧玉」といわれます。実際にそういう宣伝をしています。ケイタイなら仔細な用途を巧みに埋め込んだものに。お寿司の盛り合わせや日本酒も。さらにはよく手入れされた日本庭園のたたずまいもそのひとつ。最近はやりの内輪でコンパクトな結婚式にもいわれますが、やはり花束を抱えた「小家碧玉」が主役です。

「十年一劍を磨く」というのは唐の賈島の詩「劍客」の首句です。こつこつと労苦して十年をかけて磨きあげた一劍。その「霜のような刃」をもつ名劍を、「未だかつて試みず」、試みる相手も機会もなかったと劍客はいい、モノの「品格」が理解されず、ヒトの「品性」が衰えていく時代相をみています。賈島は三十年も都にいて科挙に何度も失敗し、ひとたびは出家しています。この「劍客」は僧籍にあったときの慷慨の詩です。賈島は「一字之師」（別項）で、韓愈に自詩の「推敲」をしてもらった故事で登場しています。

同じ十年でも「十年窓下」や「十載寒窓」というのは、長いあいだ人に知られず学問にはげむこと。無名でひたすら勉強に努めて、「科挙」に合格すると一挙に名が天下に知れ渡ることになります。冬の窓辺で降り積もる雪を眺めて年月をかさねて髪が白くなるのを見た人、志を得ずして故郷へ帰った（白首空帰）人も数知れません。現代中国では、長年かけた製品の優秀さを訴える広告に用いられています。

* * * *

「掩耳盜鈴」（えんじとうれい）

中国版「流行語大賞」である「漢語盤点二〇一三」は、字では国内が「房」（部屋）、国際が「争」、詞では国内が「正能量」（前向きエネルギー、積極的な思いやり）、国際が「曼德拉（マンデラ）」でした。昨年の詞の国際は「釣魚島」でした。

「釣魚島（尖閣諸島）」は「カイロ宣言」（一九四三年二月一日。ことし七〇年目）で返還されたとする中国の立場は固い。そこで日本政府（安倍政権）の手法を「掩耳盜鈴」（沈徳符『万曆野獲編二』など。耳を掩いて鈴を盗む）といって譲りません。盗もうとした鈴（鐘）が音をたてたので、聞かれるのを恐れて自分の耳をふさいで実行したというのが原意。F15の緊急発進もそう。中国側から「掩耳盜鈴」と呼ばれるかぎり、このままでは解決への会談など開ける事情にありません。

わが国の有名ホテルの食材偽装などもそれ。自分を欺き人を欺く。中国でも企業内の成果が専門技術者への個人的報奨金に過剰に使われていることにいわれます。古くは盗鐘だったものが、いまは盗鈴に。

仲のよかったご夫妻が故あって離散したり決別したのち、ふたたびまるく納まっ
てめでたしめでたしというのが「破鏡重圓」(孟堅『本事詩「情感」』から)です。

時折りめでたい話題になります、典故になっている徐徳言と樂昌公主(南朝陳
国皇帝の娘)の場合は故あって離散した事例です。

隋が遠征して長江を渡り南朝の陳を滅ぼした際に、皇帝舎人であった徐徳言は、
妻の樂昌公主と離別せざるをえなくなり、そこで銅鏡を割って半分ずつを持つ
ことにします。あなたは才色兼備だから遠征軍の隋の楊家に収まるでしょうから、
来年の正月一五日に鏡を街なかで売ってほしい。わたしが生き延びていればその鏡
から消息をえてあなたに会う機会ができる。樂昌公主はそうします。

街なかで半分鏡をえた徐徳言は詩をつくる。「鏡與人俱去 鏡婦人不帰・・」。
隋の楊素は情愛の深いふたりに動かされ、故郷の江南の地に帰します。楊素の「成
人之美」を示す挿話として残された「破鏡重圓」のお話です。

* * * *

「象箸玉杯」(ぞうちよぎよくはい)

213 2016・11・23

象牙の箸と玉製の杯とが並べば、およそどんな食事がはじまるかの想像がつきま
す。箕子は紂王が象牙の箸をつくったときに天下の禍を怖れたといひます。この「象
箸玉杯」(『韓非子「喻老」』から)という成語の主は、「酒池肉林」や「長夜之
飲」で知られる殷の紂王です。

殷を滅ぼしてしまった紂王は人がなしうる限りの悪逆をつくした王として知られ、
それを諫めた箕子は狂をよそおって命を永らえたといひます。

「玉杯象箸」といわないのは、まずは象箸を使い犀玉の杯を求めて「象箸玉杯」と
したからで、そうなれば料理も牛象豹の肉となり、錦衣を着、高台にのぼり・・。

箕子が象箸を見て怖れたのは、のちの天下の禍を見たからで、それから五年で「酒
池肉林」の末に亡国を迎えています。始めの小事を見て終わりの大局を知る箕子の
このことばに、韓非子は老子の「小を見るを明」(『老子「五二章」』から)を引
いています。もちろん奢侈によって滅びたのは、ひとり紂王ばかりではありません。

「半晴半陰」(はんせいはんいん)

128 2015・4・8

春になって桜が咲きだすころ、薄曇りの空模様から晴れるのかあるいは小雨になるのか定まらない天候を「半晴半陰」(劉禹錫「洛中早春」など)といています。繊細な桜の花は烈しい風や冷たい雨は苦手ですが、このあいまいでぼんやりしていて、暖かく湿りのある天気が好きで、花の命を長らえるようです。江戸時代の「季寄せ」にも「半晴半陰これを花曇といふ、養花天はこれに同じ」とあります。

「半陰半晴」もあって、こちらは薄曇りから日差しが戻る気配。

永井荷風はこの成語が好きだったようで、『断腸亭日乗』によく出てきます。戦中の昭和二十年「四月初八 日曜日。半陰半晴。隣人より食麴麴(食パン)を買ふ。

一斤六圓」、戦後の昭和二十二年「五月十四日は半陰半晴。帰途八百屋にて覆盆子(いちご)を買ふ。一箱四十粒にて金四拾圓なり」とあります。

また景気の動向が、ある業種が上向きで、ある業種が低迷している模様見のときにも用いられます。

* * * *

「一以貫之」(いちいかんし)

93 2014・8・6

一貫した態度でひとつの道を歩むことをいいます。「吾道一以貫之」といったのは孔子です。弟子の曾参がそれを聞きました。あとで門人たちが「先生の一を以つて之を貫くとは」と問うたのに対して、曾参は「忠恕のみ」と答えています(『論語「里仁」から)。「忠」は心に素直であること、「恕」は思いやりです。

現代中国での孔子の復権とともに、このことばも復活しています。李克強首相が内外記者との会見の席で、改革を説明するに当たって「古人説(いう)」として用いてインパクトがありました。わが国では古くから知られて、政治家はいうに及ばず、すぐれた業績を残した経済人やスポーツ選手などが座右の銘としています。

やや頑なに独断専行でわが意を通す成語に「一意孤行」(『史記「酷吏列伝」』など)があつて、最近はこちらのほうが目立ちます。

昨今のウクライナ問題でのプーチン大統領や軍国化に進む安倍首相の言動にも、「一以貫之」がいわれます。

「一字一泪」（いちじいちれい）

118 2015・1・28

漢字は一字がそれぞれの意味をもつことから、文中のひとつの文字に感極まっとなみだするという「一字一泪」（李贽『焚書「書答」』など）には実感があります。

「一句一泪」なら日本語にもありうるでしょう。

また文章が一字の増減も許さないほどに達意明解で、一字に千金の値打ちがあることを誇示する「一字千金」もあります。秦の呂不韋は『呂氏春秋』を撰して都の咸陽の市門に掲げた時おおいに誇りとし、一字でも増減しうる者があれば千金を与えると言語しました。

「一字千鈞」は重さ（「一言九鼎」は別項）ではなく、魂を揺するほどの詩品のレベルの高さをいいます。

また「一字一珠」はすばらしい詩文や歌声の円潤なことにいい、「一字見心」は書き手の思いを一字に読みとることができることにいいいます。一字が「千金」「千鈞」「一珠」「見心」「一泪」とくれば、やはり「一字一泪」に極まります。

* * * *

「一塵不染」（いちじんふせん）

105 2014・10・29

欲念を払う仏教での修行のことばかり「一塵不染」（馮夢龍『喻世明言』など）がいわれます。官人として清廉であること、品格に汚点がなく高尚なこと。ほかに環境が清潔であることやものがきれいなことなどにも広く用いられています。

日中間の「政冷経冷」がいわれながらも、中国からの観光客は回復しています。東京では浅草寺、天空樹（スカイツリー）、秋葉原、銀座。そして富士山は忍野八海、五合目ツアー。京都では清水寺、祇園。大阪では大阪城、心斎橋、道頓堀など。和食はスシと日本ラーメン。伝統と現代をあわせ楽しんでいきます。それに秋には紅葉が加わって七日二〇〇〇元（三万円余）は安いです。

観光客が一樣に驚いているのは、公園やトイレなど公共施設がどこも「一塵不染」なこと。その清掃員に中国人アルバイトがいることでした。

格差の広がる中国で、民衆の模範となる公務員は、勤儉節約、克己奉公につとめて「一塵不染」が求められますから、生活での規律の緩みは深刻のようです。

ここの「名」は占有することで、「一文不名」（司馬遷『史記「佞幸列伝」』など）はおカネを持っていないこと、一文無しであること、貧しいことをいいます。『史記』には「不得名一錢」とあり、「一錢不名」ともいいます。反義語は「万貫家財」です。紛れやすいことばに「一文不值」があります。こちらは値打ちがないということですから、低い地位のことや人を軽くみたりすることに用います。

さて「一文不名」から「資産百万」へのほうでは、『ハリー・ポッター』シリーズを書いたJ・K・ローリング（英）をあげておきましょう。七〇か国以上に翻訳され、四億五〇〇〇万冊以上といますからすごい。逆に「千万富豪」から「一文不名」へでは一九歳で起業、女性ジョブスといわれた医療会社「セラノス」のCEOエリザベス・ホームズ（米）でしょうか。注射で採血せず指先からの血液で検査する特許業務の禁止により会社は超一兆円の資産からホームレスに。小保方晴子さんの手法を思わせませす。

* * * *

わずかな元手で大きな利潤を得ることを「一本万利」（李海観『岐路灯「三四回」』など）といいます。控えめに「一本十利」もありますが、万利に勢いがあります。

最近の「一本万利」事業として、結婚式とお葬式の請負があげられます。一生に一度の機会ということで、結婚するふたりは会場、衣装、料理、引き出物などにムリしますし、葬儀では逝去した人への外聞を気にして喪主がムリするからです。

運によってお金持ちを願うなら、「一本万利招財進宝」と刻んだ古銅銭を懐中にするのでもいいでしょう。

歴史上では、呂不韋のように、一本どころか全財産をかけて人質だった子楚を「奇貨」として買い取って、秦の相国になった豪快な「奇貨可居」もあります。

現代中国では、一本どころか「無本万利」で、職権と利権を用いて巨額（億兆元レベル）の蓄財をした規律違反の罪で、周永康前政治局常務委員が党籍剥奪、送検されましたが、急成長期の社会での公職と私利つまり汚職の根は深いようです。

琴の音が最高音から一気に最低音にまで至ることを「一落千丈」（韓愈「聴穎師彈琴」など）といひます。なるほどこれは一落して千丈だと思わせる落差があります。

琴の名手といわれ、「幽憤詩」に秀でていた魏晋の嵇康が、刑死にあたって弾じたというのが「広陵散」です。その曲中での「一落千丈」なら、大地に響いて余韻嫋々として、嵇康の幽憤のいかばかりであったかを想像することができそうです。

実尺で一丈は約三メートル（中国は約三・三メートル）に当たります。地震によって突然に起こる数十メートルの土砂崩れでも恐ろしいのですから、何につけ千丈の落差はやはり想像に絶します。

さてわが世にも「一落千丈」で例えられる事象がさまざまあつて、みなさんは何を思うでしょうか。国際オイルの価格急落、ブラジルの経済下降、革新政党の得票減少、コンピューターに負けた囲碁九段の名声、プロ球界スーパースターの薬づけ、清純派女優の離婚での罵り、言えない産後性欲・・。

* * * *

「濟々一堂」（せいせいいちどう）

127 2015・4・1

目標を共有する人びとがひとところに集まったようすを「濟々一堂」（帰莊『静観樓講義「序」など』）といひます。

フレッシユマンの新入生や新入社員を迎えた学校の入学式や新入社員を迎えた企業の入社式は、春にふさわしい華やぎのある「濟々一堂」でいいものです。が、一方の秋の重陽の日（旧暦九月九日）には、地元のお元気なお年寄りの集い「百歳宴」という「濟々一堂」の会があつて、こちらは人生の深い味わいを感じさせます。

北京の人民大会堂の広々とした三層の席を埋めつくした三〇〇〇人に近い全人代表が、報告を聞き会議する光景は、まさしく最大規模の「濟々一堂」の情景です。全員賛成の表決の場面などは圧巻です。

「人才濟々」もいいのですが、さまざまな新製品の展示会もまた「濟々一堂」の晴れの舞台です。ちかごろの新車の展示会には、家庭に二台目の需要も加わって、多彩な車種の展示がされて活発な経済活動のシンボルとなっています。

「不三不四」(ふさんふし)

237 2017・5・10

「三にあらず、四にあらず」と数字を重ねて否定した成語「不三不四」(施耐庵『水滸全伝「七回」など)は、現在は規範がない、端正でない、どっちつかず、不正派の意味で、人や態度や手法などについて広く用いられます。

とって「不不不」や「不五不六」とはいいませんから、三と四を重ねることで意味をなしていることはたしかです。

易の爻(こう)の重なりからきているという説もあるようですが、古人は三(天・地・人、三皇、三省)や四(四方、四季、四書、四宝)などを整った体系を示す数字としてきましたから、規範がない不正派の言行を「不三不四」というようになったのでしょう。

封建社会の女性の礼教育として「三従四徳」がありました。三従は未婚時は父に、既婚時は夫に、夫が死んだあとには子に従うこと、四徳は婦徳、婦言、婦容、婦功を教えられました。三従四徳すこしも学ばず」や「三従四徳まるでなし」という女性もいましたから、「不三不四」には女性のそんな別建ての理解があつたかも知れません。

* * * *

「五光十色」(ごこうじっしょく)

110 2014・12・3

南朝梁の才人江淹にちなむ「五光十色」(麗色賦)からは、初めて見た麗人の姿を、あたかも崖から彩雲が輝いて湧いて出たようと描写したのですが、五と十の数字を合わせ用いることで、鮮やかさ豊かさを巧みに伝えていきます。

アカデミー賞セレモニー会場のレッドカーペットの上を色とりどりの衣装で次々に通過する女優たちは、たしかに「五光十色」に輝いています。

見渡すかぎりの山々の木々の葉が明るい日差しを浴びて、さまざまな色に染まつた「秋山如粧」のようすは、目を奪うばかりの「五光十色」の風景というにふさわしい。大都市の水辺の夜景もまた「五光十色」の世界を演出しています。

上海の黄浦江兩岸の夜景はその代表でしょうが、第四五回の世界体操選手権の開催地、広西チワン族自治区の南寧では、「五光十色慶佳節」と名づけて、体操の内村航平選手の個人男子総合五連覇を祝ってくれました。

もちろんモノにばかりではなく、心のうちの輝きの表現にも用いられます。

みんながそれぞれ勝手にしゃべって騒がしくしたり、異なる立場でそれぞれ口をはさむので議論がまとまらない状態のことを「七嘴八舌」(『官場現形記「五回」』など)といいます。多すぎて混乱する場合に、七と八とを連ねて用いる例です。

ですから「七手八脚」というのも、満員の長距離列車のなかやお祭りの雑踏のように、たくさんの方の手足が入り乱れているように思います。みんなで力を合わせてする場合もいます。しゃべるほうも「吵吵嚷嚷」(そうそうじょうじょう・チャオチャオランラン)となつては、もはや何をいつているのかわかりません。

魯迅は、風刺家たちの「七嘴八舌」は何も産まないといつて避けていますが、いまやインターネット(因特網)時代ですから、避けても何でもやつてきます。

政治家も、TVやラジオの司会者も、企業経営者も、教師も、バスの運転手も、感謝のことばの少なくなった世の中を毎日「七嘴八舌」にさらされながらわが道をゆくのですから、心境を安定させて暮らすのはたいへんなわけです。

* * * *

ことしは大寒気団が何度も南下してきて、大雪が降つては積もつて、春のおとずれが遅いようですが、春季の三カ月、九十日の暖かく心地よい光に包まれた期間に繰り広げられる情景を、「九十春光」(陳陶「春婦去」など)といいます。

「冬山如睡」だった九十日から「春山如笑」の九十日への移ろいるときであり、目にやさしくて肌につややかなことから「春光明媚」ともいわれます。あるいは風はやわらかな感触から「春風和氣」とも、さらには次々に開花のときを迎えて「春暖花香」ともいわれます。待っていた九十日の春光を、生けるものすべてがそれぞれに謳歌します。その中で人もまた、「春満人間(じんかん)」のときを迎えて、新たな経歴を刻むことになります。

こんな「九十春光」もあります。九十歳に達した慕わしい教師を、白髪になった学生たちが囲んで、点々滴々のお札を述べあつてお祝いをし、「春華秋実」の百寿に至るのを励まそうというのです。

この上なくすべてよし、「十全十美」（『警世通言「卷二二」』など）は、まさにこの上なく心地のよい四字熟語です。「十全」は古くから病が癒えて良くなる「十治十癒」の意味でつかわれてきましたが、「十全十美」という完全無欠の意味となつて、かえって実例が出づらくなりました。毛沢東がマルクス・レーニン主義は「十全十美」であるといっていますが、そのレベルとなると事例はそう多くはありません。はじめから及ばない「十全十美」を避けて、一つ欠ける「十全九美」が生き生きというかのびのびと使われています。

北京オリンピックのころに封切られた映画「十全九美」は三〇〇〇万枚ものチケットが売れて流行語になりましたし、北京の最高級マンションのウリことばになっています。緑の多い環境のなかで、交通が便利で、医院やゴルフ場が近くにあつて、一五〇平米以上の広さを持ち、内部設計も品質もよく・・。

そこで価格もいいわけですが、買い手は「十全九美」に納得できるのでしょう。

* * * *

二〇二〇年のオリンピック招致を争った三都市は、TOKYOはもちろん、どこも「各有千秋」で優劣つけがたかったといわれました。「千秋」は千年のこと。一つひとつの物事、一人ひとりの人間にはそれぞれに遠く久しい流伝があることを「各（おのおの）に千秋有り」（趙翼「瓠北誌鈔・絶句」など）といっています。

漢の李陵は、同じ時代の天の一隅に生きながら、もはや友人の蘇武と再び遇えないという思いを、「三載（三年）は千秋となる」ということばに込めました。「千古絶唱」といわれるように唐の李白や杜甫の詩は、文字どおりに千年を重ねて「名流おのおの千秋あり」を証明して、いまに読み継がれています。名も無き者の人生にだって、それぞれ千年の来歴をたどって現在がある、それが「各有千秋」です。

しかし現代の四字熟語としての「各有千秋」は、ずっと軽くて、ものの特徴ややり方の特色といった意味合いで使われています。新車の外観だとか女性の髪型の特徴や、こそどろの手口だって「各有千秋」なのです。

「尺幅千里」(しやくふくせんり)

114 2014・12・31

扇に画いた山水画のように、わずか一尺の画幅のうちに千里の景象を画くことができること、外形は小さくとも大きな内容をもっていることを「尺幅千里」(何紹基「与汪菊士論詩」など)といいます。

五言絶句はわずか二〇字ですが、そのうちの前の一〇字で大意を述べ、あとの一〇字で「尺幅千里」を尽くすのがその例とされます。

春節(今年二〇一四年は二月一九日)を迎える中国には「春聯」を書く風習があります。新しい年が邪気を払って「吉祥如意」(別項)であるように、赤い紙に縁起のいい詩文を書いて門柱の左右や入り口の扉に貼ります。この伝統を守ろうというので、天津市では書家が市民のために春聯を書く「辞旧迎新、尺幅千里」という活動をおこなっています。

中国では元旦は休みですが四日(日)は振り替え出勤です。春節には大みそか(除夕)の二月一日(水)から二四日までの七連休がお正月休みとなります。

* * * *

120

数字

128 「半晴半陰」 56 「半部論語」 93 「一以貫之」 195 「一琴一鶴」
44 「一言九鼎」 118 「一字一泪」 196 「一字之師」 105 「一塵不染」 158 「一波三折」 81 「一盤散沙」 190 「一文不名」 111
「一本万利」 26 「一目十行」 4 「一葉知秋」 8 「一陽復始」 182 「一落千丈」 28 「聞一知二」 15 「乾坤一擲」 127 「濟々一堂」 119
「日復一日」 92 「兩袖清風」 58 「三更半夜」 76 「三顧茅廬」 6
8 「三春之暉」 207 「狡兔三窟」 66 「歲寒三友」 88 「日上三竿」 2
37 「不三不四」 110 「五光十色」 94 「目迷五色」 84 「七嘴八舌」
211 「十年一劍」 77 「十全十美」 171 「十指連心」 151 「十步芳草」 73 「九十春光」 11 「百齡眉寿」 168 「斗酒百篇」 30 「千里鵝毛」 50 「各有千秋」 114 「尺幅千里」